

秋 田 市

下堤D遺跡発掘調査報告書

1982. 3 秋田市教育委員会

序

御所野周辺一帯は昔から、土器、石器の出土するところとして知られている所で、この度、秋田臨空港新都市開発事業に伴う下堤D遺跡発掘調査の結果、旧石器時代から平安時代の人々の生活跡で、多くの貴重な遺物が出土しました。

調査の実施にあたっては、県・関係機関の指導援助をはじめ、地元関係者、土地所有者等多くの方々の積極的なご協力をいただき深く感謝申しあげる次第です。

本報告書が文化財保護のため、さらには研究資料として広く活用されれば幸甚に存じます。

昭和57年3月

秋田市教育委員会 教育長職務代行者

次長 池田 正

例　　言

1. 本報告書は、秋田市四ヶ小屋小阿地字下堤に所在する下堤D遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本報告書は、安田忠市、田口 都、内浦佐員の協力を得て菅原俊行が編集したものである。
3. 本報告書の執筆は第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章（旧石器時代）、第V章は菅原俊行、第Ⅴ章遺構は田口 都、遺物は安田忠市が担当し、菅原が加筆した。
4. 第Ⅱ章遺跡の地形、地質は「小阿地^{坂ノ上遺跡}発掘調査報告書」の第Ⅱ章を抜粋し、利用したものである。
5. 発掘調査、整理には下記の各氏より助言を賜った。

川井正一 河原純之 加藤邦雄 小林達雄 林 謙作 野尻 優

秋田県文化課、富樫泰時氏には全面的に指導、助言をいただいた。

6. 整理は下記の人々の協力を得た。

佐々木直人、三浦千枝子、伊藤茂子、大友幸子、川井 尚、木村 徹、相馬 修

目 次

序	
例言	
第Ⅰ章 調査に至る経過・調査体制	1
第Ⅱ章 遺跡の位置・地形・地質	1
第Ⅲ章 調査の方法と経過	6
第Ⅳ章 遺構と遺物	8
(1)1 地区	8
(2)2 地区	18
(3)3 地区	49
(4)4 地区	56
第Ⅴ章 まとめ	66



下堤D 連絡航空写真

第Ⅰ章 調査に至る経過・調査体制

秋田県商工労働部を通じ、秋田市企画調整課より秋田市御所野地区一帯を内陸工業団地造成地域にしようとする計画がある旨、市教育委員会に昭和55年9月に連絡があり、この地域一帯の埋蔵文化財に関する状況の説明を求められ、計画地域内の周知の遺跡数、範囲等を報告した。この時点では、周知の遺跡は5ヶ所であり、台地のあり方からは他にも遺跡の存在することが予想されていた。その後、造成事業開始に際し、埋蔵文化財の分布状況を把握しておく必要があるとの県、市協議結果に基づき、12月上旬に市教育委員会ではほぼ全域にわたり分布調査を実施したところ、前述遺跡の他に30ヶ所の遺物散布地が確認され、その面積は約243,000m²と推定されたのである。

昭和56年4月、造成事業地区が計画され、この計画地区には分布調査の結果5ヶ所の遺物散布地（面積約18,000m²）が含まれていることがわかった。造成計画事業の工程から発掘調査については市教育委員会が担当することに決まり、4月8日から現地での作業を始めたのである。

調査体制

調査期間	昭和56年4月8日～11月28日
調査主体者	秋田県商工労働部
調査担当者	秋田市教育委員会
調査員	菅原俊行、石郷岡誠一（秋田市社会教育課）
調査補佐員	西谷 隆、安田忠市（秋田城跡発掘調査事務所）、田口 都（秋田考古学协会会员）
調査協力員	武藤康弘（国学院大学）、本間 宏（明治大学）、石川恵美子（筑波大学）、谷口重光（天王郵便局）
調査作業員	鈴木銀一、鈴木長治、鈴木茂治、鈴木 満、三浦武治、三浦 韶、三浦吉男、三浦吉司、岩崎岩五郎、鈴木トミ、鈴木慶子、鈴木キヨ、三浦トミエ、三浦千枝子、堀井ヤス、橋本栄子（四ツ小屋小阿地地区）加藤満子、大友幸子（四ツ小屋中野地区）伊藤茂子（四ツ小屋上町地区）佐々木フミ、佐々木直人、加藤 均（仁井田地区）鈴木徳行、鈴木 浩、鈴木和人、塙田 誠、土崎龍郎、川井 尚、木村 徹、相場 修

第Ⅱ章 遺跡の位置・地形・地質

遺跡の位置

下堤D遺跡は秋田市四ツ小屋小阿地字下堤に所在する。秋田市街から国道13号線を南下し、仁井田、横山地区を過ぎると三叉路があり、そこを右の道に入り約200m進んだ西側の台地一帯が遺跡で



第1図 遺跡の位置

ある。この下堤D遺跡のさらに西約0.8kmの台地端は下堤A、B、C遺跡である。D遺跡には二つの沢があり、杉林で、湧水地である。この地域はもともと畠地として利用されていたが、現在一部の畠を除き、そのほとんどが荒地、萱場と化している。北西部に延びる細長い舌状台地の先端からは秋田市街が一望できる。D遺跡は分布調査の結果等で1～4地区に分けて調査をした(第5図)。1地区は南東部。2地区は東部。3地区は北部。4地区は南西、西部である。

遺跡の地形・地質

下堤A～D遺跡を含む末戸台付近の地形を大別すると和田丘陵と末戸台台地に分けられる。和田丘陵は平坦面をあまり持たない。しかし、定高性を持った標高60～150mのかなり開析を受けた老年期地形を示し、地質は第3系鮮新統に属する青色砂質シルト岩(笠岡層)と青灰色塊状泥岩(天徳寺層)、それに中新統に属する暗灰色泥岩(船川層)などからなっている。末戸台台地は標高25～50m強で、その表面は大変平坦である。この台地は和田丘陵と接して、数段の段丘を識別できる。これらは内藤¹⁾の区分からすると、上位から標高45～50m強の椿台段丘、標高40m強の上野台段丘I、標高35m強の上野台段丘II、標高25m強の宝竜崎段丘の4段に分けられる(第2図)。

①椿台段丘

岩見川右岸末戸台台地では45～50m強の標高をもつ、いわゆる椿台面をその堆積面とする椿台層が、厚い礫(最大径10cm前後)、砂、粘土の互層で構成されている。ただ基底高度はわからない。岩相は最上部に1～2mの褐色の粘土質火山灰層があり、次に礫・砂・粘土の互層で、砂礫の部分でしばしばクロス・ラミナ(斜交葉理)がみられ、砂土あるいはシルトは水平な細かい層理をなすことが多い。層厚をみると、礫層はうすく、砂・粘土層が厚い。その下部は第3系の泥岩(船川層)や砂質シルト(笠岡層)となっている。

②上野台段丘I

末戸台台地で椿台段丘の南側に標高40m強でついている段丘が、上野台段丘Iと呼ばれている。表層の1～2mの粘土質火山灰層を除くと、段丘堆積物は最大径20～30cmの礫を含む礫層であり、厚さは5m程度でその下部は第3系となっている。下堤遺跡は、この上野台段丘Iに位置する(第3図)。

③上野台段丘II

末戸台台地では上野台段丘Iとの比高が5m強である。段丘堆積物の岩相は上野台段丘Iとはほぼ同様で、層厚は5m前後である。内藤によれば、厚い礫層の下部は椿台層に当たるとしている。

④宝竜崎段丘

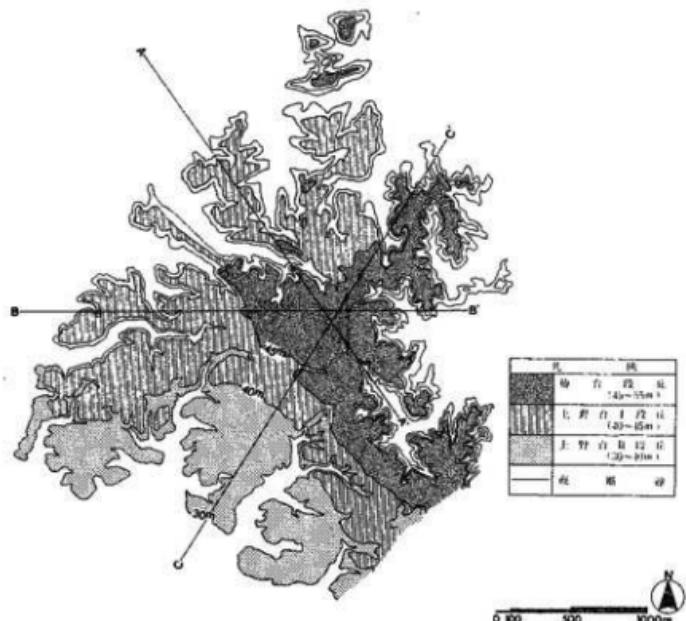
末戸台台地の北縁の宝竜崎付近に分布し、他の段丘との関係を判然とさせる。標高20m前後である。段丘堆積物の厚さは約8mで上部1m前後は砂混じりシルト、以下は砂礫層で砂の多い部分と礫の多い部分とが層理をなす。礫は最大径15cm弱で上野台I・II段丘の段丘礫層に比べて小さい。基底には50cm以下の泥岩の塊が点在する。内藤によれば、基盤は椿台層の砂層であり、不整合面はほ

ほ水平であるとしている。これに対比されうる段丘およびそれより若干低い段丘が雄物川沿いで発達がよい。

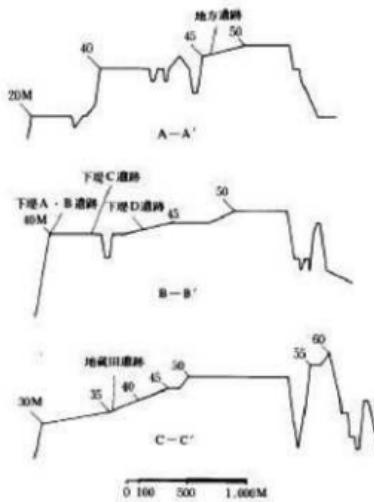
段丘堆積物の特徴

前述の4つの段丘のうち、上野台Ⅰ・Ⅱ面では最大径30cm前後の亜円礫を主体とするほぼ一様な礫層をもつ。また、椿台面、宝龜崎面では礫・砂・粘土の互層で比較的細粒であり、垂直、水平方向に変化が大きい。ゆえに、上野台Ⅰ・Ⅱ面は明らかに河川堆積物で、厚さも加味すると、岩見川などによる河成の浸食段丘面と考えられる。これに対し、椿台面と宝龜崎面は上野台Ⅰ・Ⅱ面よりも運動力の弱い環境下で堆積したことは明らかで、岩相を加味すると、浅海性ないし河口性堆積物と考えられる。また、宝龜崎面を除く椿台、上野台Ⅰ・Ⅱの各面をおおっている層厚1~2mのシルト分を含んだ粘土質火山灰層は、経済企画庁の土地分類基本調査²⁾、秋田県教育委員会の「八郎潟の研究」³⁾及び村山⁴⁾、林⁵⁾などの研究調査をもとにすると、男鹿半島の寒風山が起源と一応考えられている。この粘土質火山灰層の表層細粒物質の風化状態をみていくと、椿台面、上野台Ⅰ・Ⅱ面では黒色土の下の細粒物質のうち、上部50~100cmが明褐色を呈し、下部は灰色で、境は漸移する。また、土壤断面をみると、椿台、上野台Ⅰ・Ⅱ面をおおう土壤は、いわゆる高岡2統に属していると考えられ、比較的大きい円礫を混入していて、黒色土層を厚く堆積させている。この層中に

は火山ガラスを
混入しており、
火山灰が関係し
ているものとも
のと推定される。
(第4図)は下
提D跡で調査
された土質柱状
図₆₎である。



第2図 段丘



第3図 地形断面

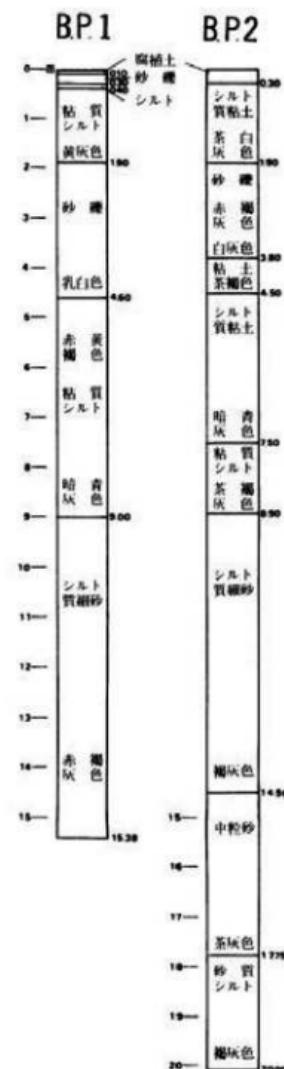
参考文献

- 1)内藤博夫 「秋田県岩見川流域およびその周辺の段丘について」第4紀研究第4巻第1号1965年
- 2)経済企画庁土地分類企画調査「秋田」1966年
- 3)秋田県教育委員会「八郎潟の研究」1965年
- 寒風山噴火史の推定

III 悲 - 木加時代	…小噴火(?)
飯浦文 - 有生時代	…大噴火(隕灰 - 飯浦成層)
昭文期 後期 中期	…1 - 21-噴火
前期 早期	…噴火隕灰
前中期 以前	…噴火(?)
後中期 以後	…?

八郎潟の研究 S40 (秋田県教育委員会)

- 4)村山 脩 「火山活動と地形」 大明堂
- 5)林 宏 「秋田県男鹿半島一の日潟周辺の火山拠出物について」 地質学雑誌第61巻第717号 1955年
- 6)有限会社 加賀伊ボーリング 「報告書第18号 土質調査試験」 1981年



第4図 土質柱状図

第Ⅲ章 調査の方法と経過

方 法

分布調査の結果、計画地区には5ヶ所の遺物散布地が確認されており、その面積は約18,000m²に及び、縄文時代～平安時代の遺物が見られた。5ヶ所のうち4ヶ所は字名下堤、1ヶ所は字名大杉沢であり、まず下堤から発掘調査を開始することとし、遺跡名は昭和43年～48年まで調査した下堤A、B、C遺跡に今回の地区をD地区として加え、下堤D遺跡と呼び、これらを総称して從来どおり「下堤遺跡」とした。

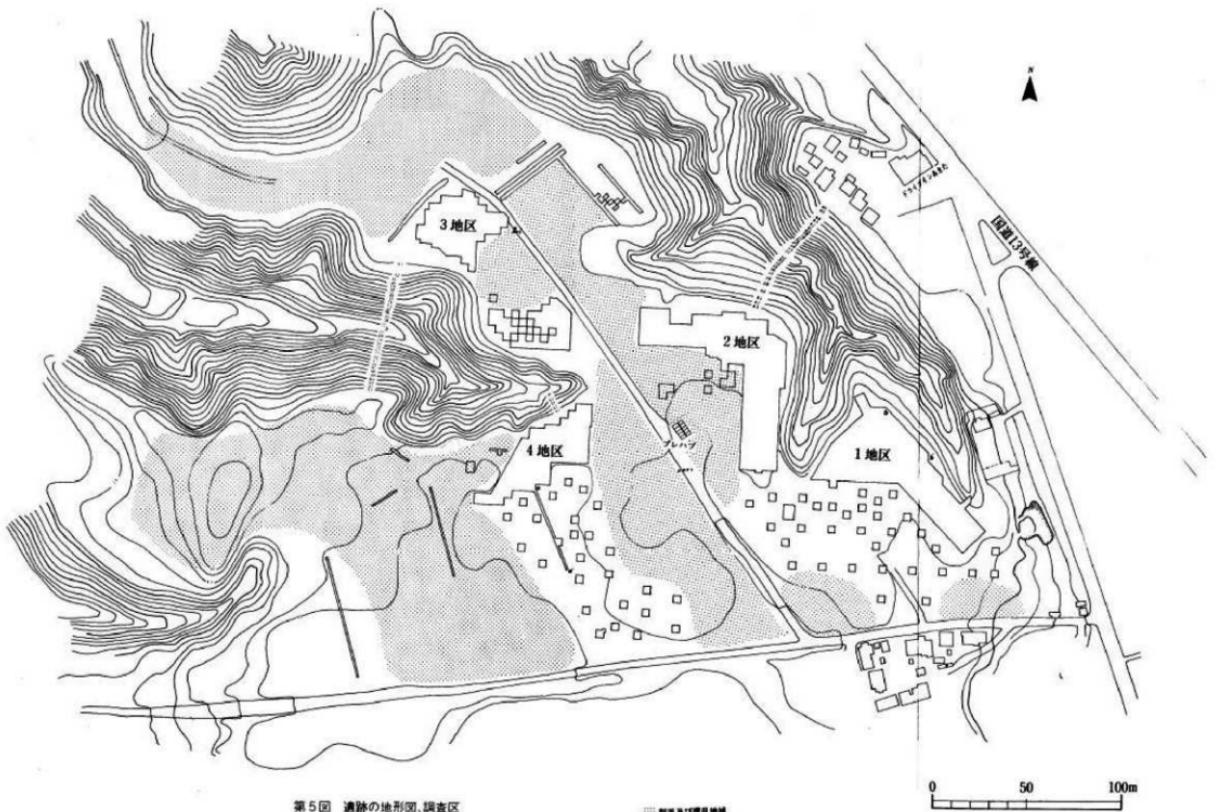
D遺跡の調査対象面積は約17,000m²あり、プレハブ（作業小屋）の建つ南西約16mに原点を任意に決め、東西南北（磁北）に基準線を作り、大グリッド（40m×40m）を35、その中に小グリッド（4m×4m）を設定し、調査を実施することにした。分布調査の結果と発掘調査の関係で4地区に分けて調査することにしたのであるが、この周辺一帯は昔からの畠地であり、良質の黒土（耕作土）が得られるため、業者等による黒土採取がひんぱんに行なわれ、D遺跡の大部分がローム層まで削平されていた。発掘調査は2、4、3、1地区的順に実施した。

経 過

4月8日、下堤D遺跡の下見を行ない、調査にあたり、1、4地区は草が一面に茂り、ブルドーザで表土の一部も含めて排除すること、2地区は廃棄されているゴミを排除すること、3地区は雨水溜りの排水の必要があることなどがわかった。4月14・15日調査区グリッド設定作業。2地区（4月16日～7月4日、発掘調査面積2,871m²）、廃棄物の多い地区で表土剥ぎ作業で困難。北側、中央部に遺構を確認するが、黒土採取で削平されていた。4地区（6月18日～8月10日、発掘調査面積2,001m²）。調査区東側、西側はブルドーザによる黒土採取のためローム層まで削平されていた。全域に遺物の出土は少なく、一部グリッド（4m×4m）、トレンチによる調査を実施。3地区（7月31日～9月25日、発掘調査面積2,242m²）調査区は北側の雜木林（一部ブルドーザによる削平）、東側の杉苗畑、中央部の水溜りを除く範囲で、一部トレンチ、グリッドによる調査を実施。1地区（9月21日～11月25日、発掘調査面積3,136m²）。この調査区は、元々畠地であり（2ヶ所の畠が耕作中であり、畠作の取り入れを終了後発掘調査を実施する承諾を得た）、ローム層までの擾乱が著しく、本遺跡では初めて確認された旧石器時代の遺物まで影響があった。大杉沢地区についての発掘調査は造成計画から除外されたこと、時間的余裕がないこと等で調査を実施しなかった。

調査期間中来跡者（敬称略）河原純之（文化庁）、林謙作（北大助教授）、小林達雄（国学院大助教授）、岩見誠夫、富隈泰時、島山憲司、紫田陽一郎、高橋忠彦（秋田県文化課）、庄内昭男（秋田県立博物館）庄内公子（県税事務所）、斎藤章子（秋田大学）、仁井田小学校有志

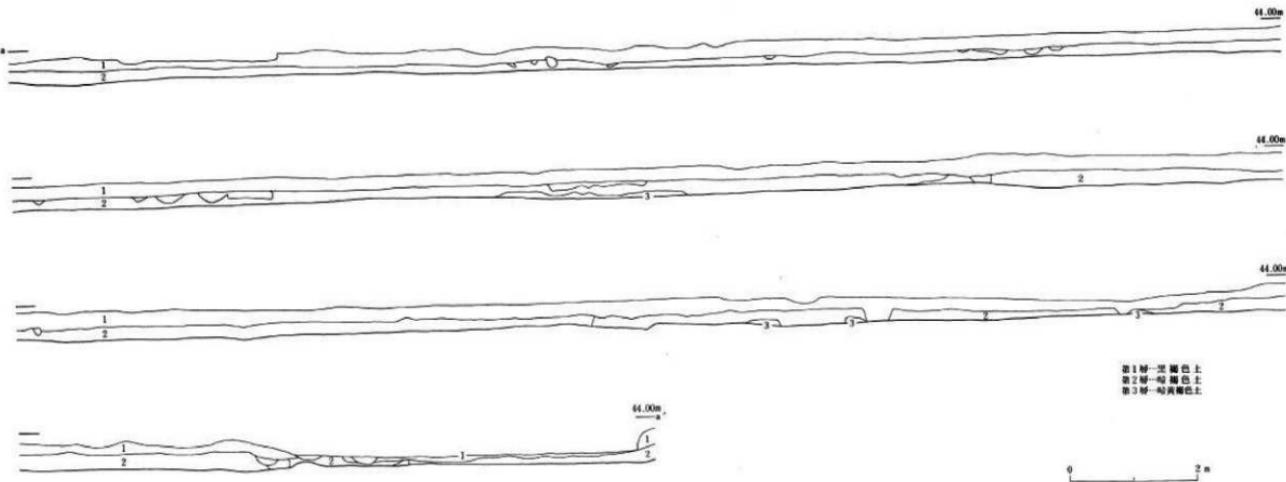
調査面積 10,555m²



第5図 遺跡の地形図、調査区

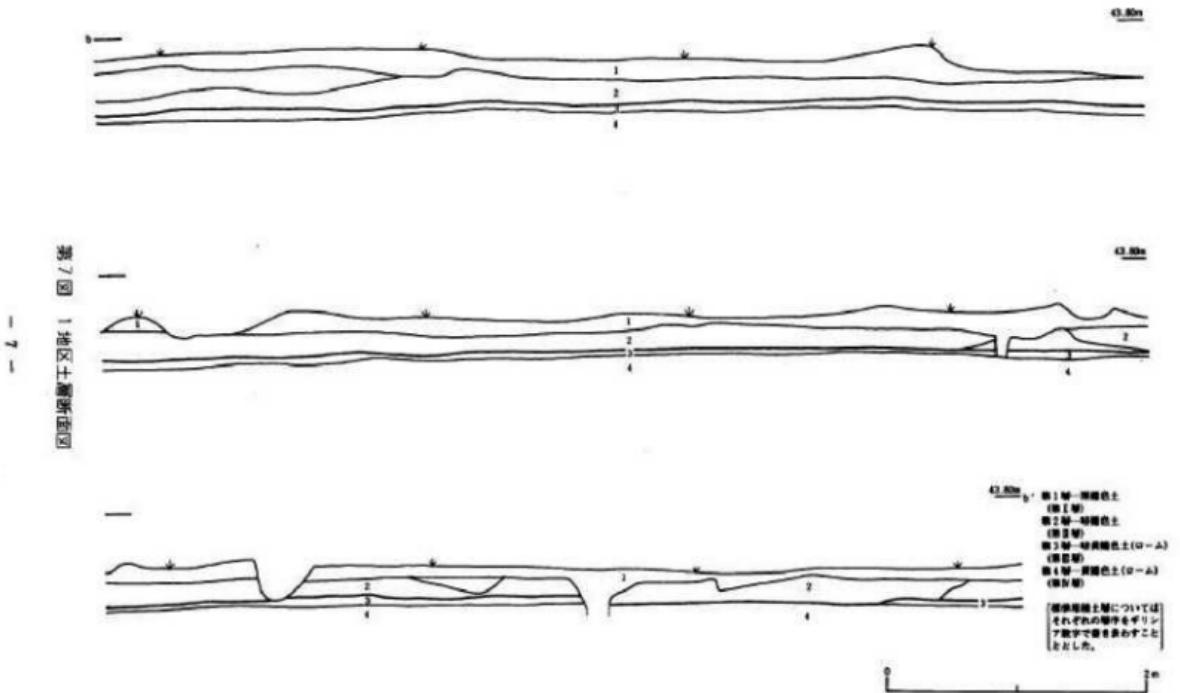
削平及び復元地域

0 50 100m



第六图 4 地区土壤剖面图

第7図 1地区 土層断面図

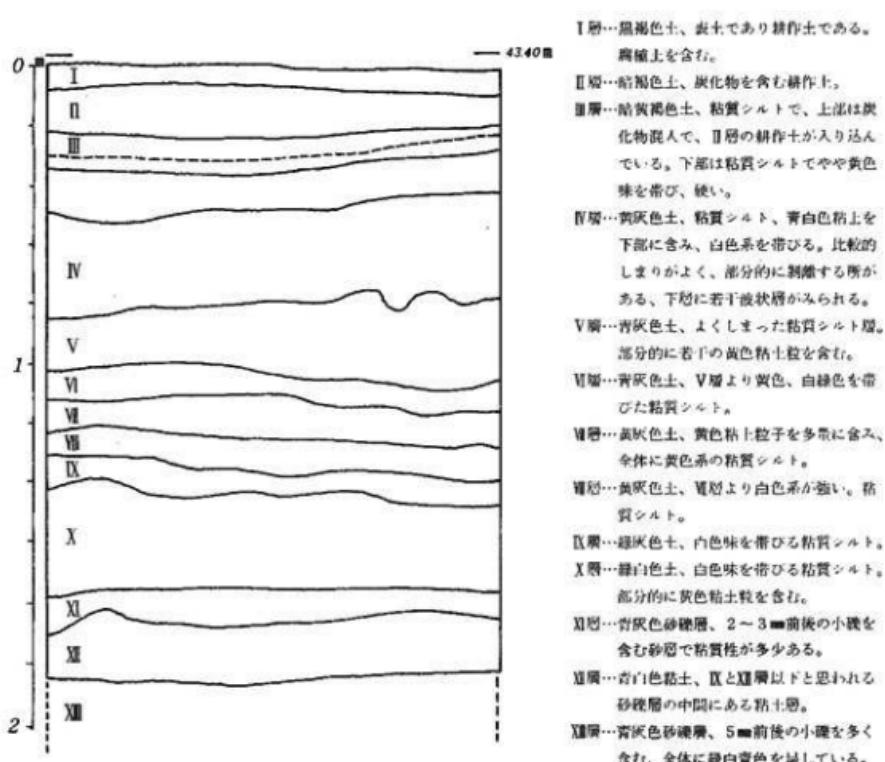


第IV章 遺構と遺物

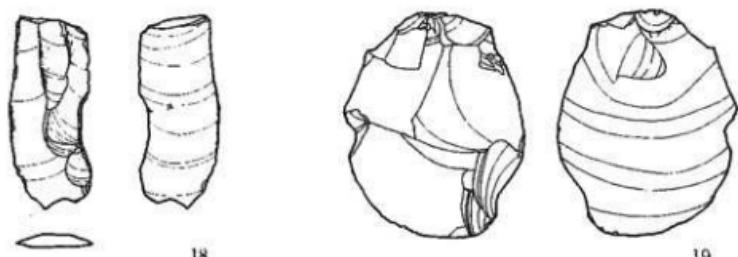
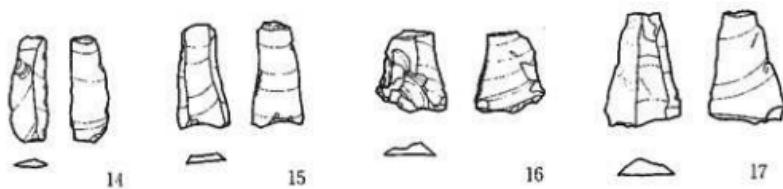
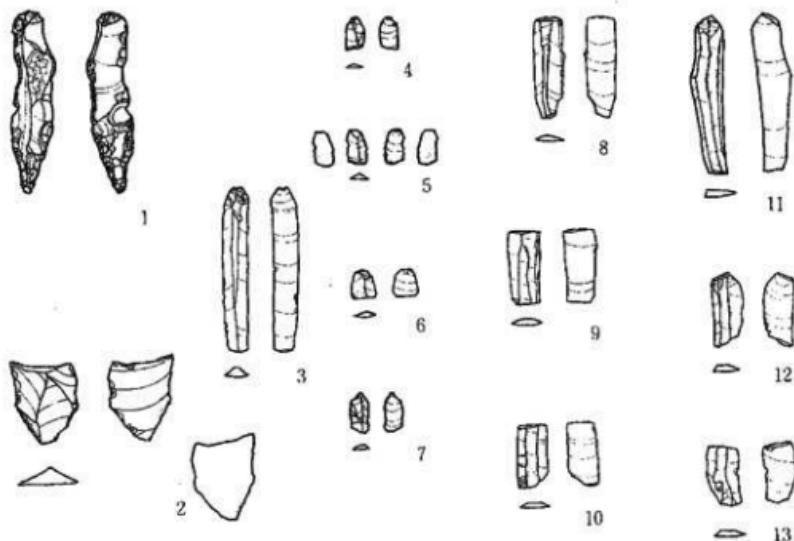
(1) 1地区

旧石器時代の遺物

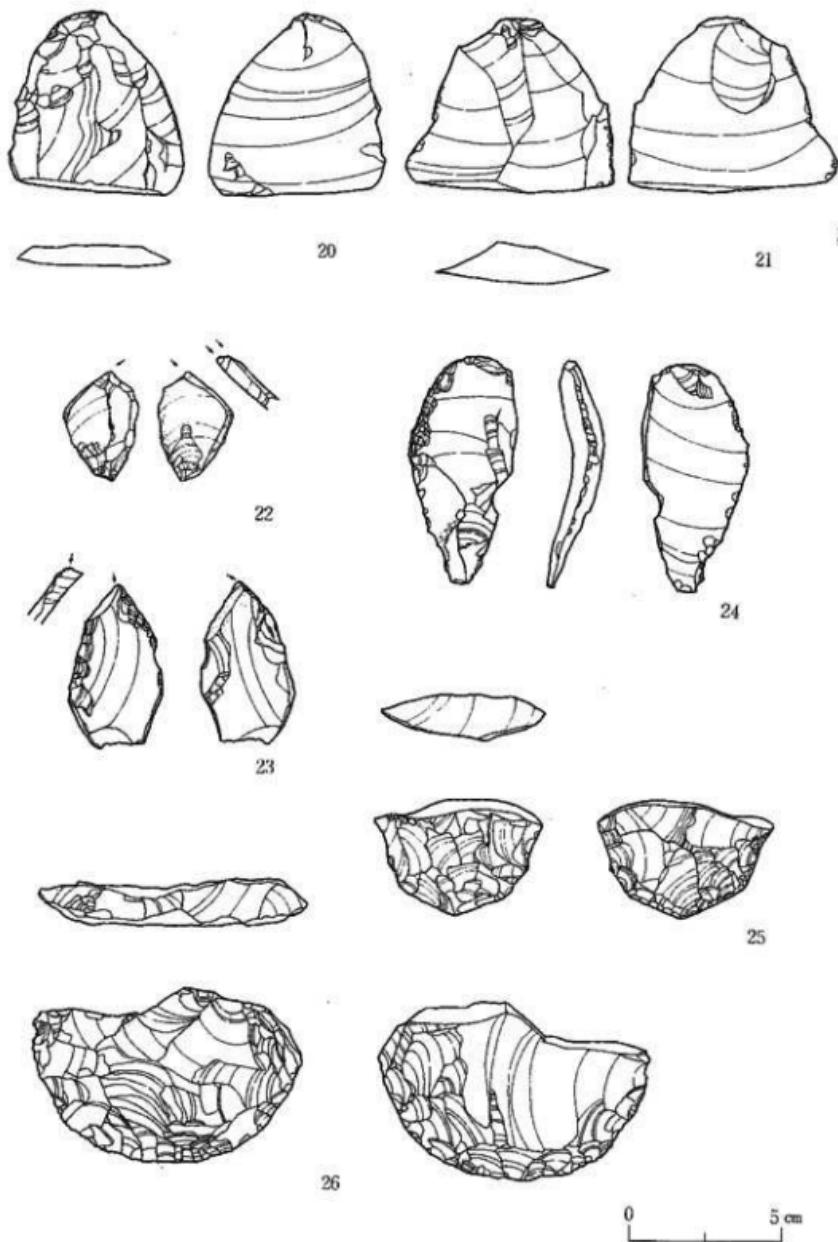
旧石器時代と思われる遺物総数は約250点ほどあるが、畑耕作（長芋栽培）により、プライマリーな状態で出土した遺物は少なく、擾乱層などから出土したものも含め、形態等から石器として認定出来るものは26点ほどであり、剝片、チップが多い。遺物は第2層（暗褐色土、縄文期包含層）、第3層（ローム層、上部は暗黄褐色土で第2層との漸移層）から出土し、第8図の波線を中心とした第3層中部までであるが、旧石器時代の遺構等は確認出来なかった。石器の器種はナイフ形石器（2）、細石刃（5）、石刃（14）、彫刻刀形石器（2）、削器（1）、両面調整石器（2）である。石質は全て硬質頁岩である。



第8図 1地区土層断面図



第9図 1地区旧石器時代の遺物



第10図 1地区旧石器時代の遺物

ナイフ形石器（第9図1、2）

いずれも完形ではないが、1は細身の柳葉形で、基部両面と主要剝離面の片側縁に刃溝し調整がなされている。2は折損し、全体形は不明であるが、背面基部に刃溝し調整がみられる。主要剝離面の剝離は刃溝し調整として明確ではない。主要剝離面側縁に、わずかにアスファルト状の付着が認められる。

細石刃（第9図3～7）

細石刃の数が少ないとと、細石核と断定できる資料もないが、二つのタイプに分けられそうである。（3、6）と（4、5、7）である。それぞれ共通の特徴は、打面が薄く小さく残る。断面は内湾し、刃こぼれが見られることで、（3、6）は途中で折れており、（4、5、7）は完形で、長さは1～1.3cm程度であり、厚さは1.5mm前後で薄い。5の細石刃の両面にアスファルト状の付着物が認められる。

石刃（第9図8～19、第10図20、21）

石刃は三つのタイプに分けられる。巾が1cm前後で、厚さの薄いものA（8～14）、巾が2cm前後で、比較的厚いものB（15～18）、巾が6cm前後で、大形のものC（19～21）で、A、Bタイプについては背面の全剝離面の加撃方向が主要剝離面と同方向のもの、背面の剝離面の中に逆方向の剝離面があるものがある。打面が残っているのは11、12である。17は自然面が残っている。Cタイプは打面をもち側縁に刃こぼれの見られるものである。

彫刻刀形石器（第10図22、23）

22は基部裏面調整がなされ、背面右側縁（自然面）に調整剝離で打面が作られ背面右肩からの打撃で彫刻刀面が作られている。23は横長剝片を素材としたもので、両側縁を調整剝離し、右肩からの打撃で彫刻刀面を作っている。

削器（第10図24）

打面が大きく残る縦長剝片を素材とし、背面一側縁に細部調整剝離を施し、刃部を作っている。

両面調整石器（第10図25、26）

両面調整素材とすべきものであるかも知れない。

まとめ

ユニットとして把握されるほど石器の出土状態は良くない。ナイフ形石器は、杉久保型と米ヶ森型ナイフ形石器に近い。彫刻刀形石器はいわゆる荒原型である。細石刃については、細石核が確認されていないので作出技法はわからないが、4、5、7の細石刃は完形であり、小形の細石核から剝取されたものと思われる。石刃は大形のものを除くと途中で折れているものが多い。石器の出土層位での時間差は明確ではないが、石器の組成からは杉久保型文化のカテゴリーの中に位置づけられるものである。

旧石器時代遺物一覧表

器種	レベル(m)	石質	層位(出土状態)	備考
1 細石刃	43.199	真岩	ローム上面	第9図3
2 彫刻刀形石器	43.205	真岩	ローム上面	第10図22
3 刻片	43.176	真岩	ローム上面	
4 刻片	43.140	真岩	ローム上面	
5 ナイフ形石器	42.879	真岩	II層の擾乱	第9図1
6 チップ	43.362	真岩	ローム上面	
7 刻片	43.506	真岩	II層	
8 刻片	43.476	真岩	II層	
9 石刃	43.363	真岩	ローム上面の擾乱	第9図16
10 ナイフ形石器	43.373	真岩	ローム上面の擾乱	第9図2
11 刻片	43.502	真岩	II層上面	
12 刻片	43.533	真岩	II層上面	
13 刻片	43.597	真岩	II層上面	
14 刻片	43.577	真岩	II層上面	
15 刻片	43.548	真岩	II層	
16 刻片	43.405	真岩	II層下	
17 刻片	43.522	真岩	II層	
18 刻片	43.576	真岩	II層	
19 刻片	43.479	真岩	擾乱	
20 刻片	43.493	真岩	II層	
21 刻片	43.664	真岩	擾乱	
22 刻片	43.636	真岩	擾乱	
23 刻片	43.350	真岩	擾乱	
24 刻片	43.213	真岩	ローム上面の擾乱	
25 細石刃	43.110	真岩	ローム上面	第9図13
26 刻片	43.033	真岩	ローム	
27 両面調整石器	43.050	真岩	ローム	第10図25
28 チップ	43.089	真岩	ローム	
29 刻片	43.135	真岩	ローム	
30 チップ	43.135	真岩	ローム	
31 刻片	43.059	真岩	ローム	
32 細石刃	43.179	真岩	ローム上面(重複)	第9図10
33 細石刃	43.050	真岩	暗褐色土	第9図8
34 細石刃	43.054	真岩	ローム	第9図4
35 刻片	43.056	真岩	擾乱	
36 石刃	43.165	真岩	ローム上面、暗褐色土	第9図18
37 細石刃	43.075	真岩	ローム	第9図5
38 刻片	43.131	真岩	ローム上面、暗褐色土	
39 刻片	43.084	真岩	ローム	
40 刻片	43.171	真岩	ローム上面	
41 刻片	43.167	真岩	ローム上面	
42 チップ	43.089	真岩	ローム	
43 刻片	43.064	真岩	ローム	
44 刻片	43.117	真岩	ローム	
45 刻片	43.129	真岩	ローム	
46 チップ	43.140	真岩	ローム	
47 刻片	43.059	真岩	ローム	
48 刻片	43.088	真岩	ローム上面の擾乱	
49 細石刃	43.067	真岩	ローム	第9図12
50 刻片	43.151	真岩	ローム上面	

	器種	レベル(m)	石質	層位(出土状態)	備考
51	剝片	43.125	頁岩	ローム上面	
52	剝片	43.077	頁岩	ローム	
53	チップ	43.084	頁岩	ローム	
54	チップ	43.159	頁岩	ローム	
55	剝片	43.137	頁岩	ローム	
56	剝片	43.092	頁岩	ローム	
57	剝片	43.229	頁岩	擾乱	
58	剝片	43.200	黒耀石	擾乱	
59	チップ	43.254	頁岩	ローム	
60	チップ	43.288	頁岩	ローム	
61	チップ	43.316	頁岩	暗褐色土	
62	チップ	43.152	頁岩	暗褐色土	
63	剝片	43.170	頁岩	暗褐色土	
64	剝片	43.198	頁岩	ローム上面	
65	剝片	43.168	頁岩	擾乱	
66	剝片	42.767	頁岩	暗褐色土	
67	剝片	43.151	頁岩	擾乱	
68	剝片	43.431	頁岩	II層の擾乱	
69	剝片	43.307	頁岩	擾乱	
70	剝片	43.349	頁岩	擾乱	
71	剝片	43.051	頁岩	ローム	
72	剝片	43.034	頁岩	ローム	
73	剝片	43.162	頁岩	ローム	
74	剝片	43.182	頁岩	ローム	
75	剝片	43.172	頁岩	ローム	
76	剝片	43.163	頁岩	ローム	
77	チップ	43.177	頁岩	ローム	
78	剝片	43.191	頁岩	ローム	
79	剝片	43.137	頁岩	ローム	
80	剝片	43.132	頁岩	擾乱	
81	チップ	43.082	頁岩	ローム	
82	細石刃		頁岩		第9図6
83	剝片	43.157	頁岩	ローム	
84	剝片	43.130	頁岩	ローム	
85	細石刃	43.151	頁岩	ローム	第9図7
86	剝片	43.146	頁岩	ローム	
87	剝片	43.131	頁岩	ローム	
88	剝片	43.114	頁岩	ローム	
89	剝片	43.487	頁岩	擾乱	
90	剝片	43.163	頁岩	擾乱	
91	剝片	43.115	頁岩	擾乱	
92	剝片	43.183	頁岩	ローム	
93	石刃	42.999	頁岩	1号住居跡の床直下	第9図14
94	剝片	43.107	頁岩	擾乱	
95	剝片	43.097	頁岩	擾乱	
96	剝片	43.072	頁岩	擾乱	
97	剝片	43.072	頁岩	ローム	

(注)

暗褐色土は、根または耕作上の下部と思われる。

遺構

1地区の検出遺構は、竪穴住居跡1軒、土塙6基、焼土遺構16ヶ所である。

1号住居跡（第11図）

竪穴住居跡で、北面する沢部の緩斜面に確認された。プランは長方形を呈し、大きさは7.8m × 3mで、壁はしっかりして、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦で、よくしまっており、特に南壁付近、中央部柱穴の南、西壁付近は硬くしまっていた。ピットは13ヶ所検出されているが、中央部南壁隅のものは深く、他は比較的浅いが、規則的な位置からすると柱穴（3×5本）と考えられる。東壁中央の柱穴は壁に斜めに掘り込まれていた。住居跡内に灰は検出されなかつたが、北側に6号土塙が確認され、本住居跡より新しい。また、中央部に焼土（径約100cm、厚さ15cm）が住居跡確認面の上部から検出されている。

土塙（第12図）

2号、4号、5号土塙の確認面、上部から焼土がみられ、土塙に意識的に廃棄された可能性がある。なお、5号土塙は底の方がややふくらむ形を呈し、1地区土塙中では1番しっかりした土塙である。埋土上面、焼土の下からは個体の異なる土器片がまとまって出土し、上塙内にも焼土を含んだ土とともに入り込んでいた。

焼土遺構については、そのほとんどが畑耕作のため残存状態が悪かった。その他、調査区東側の沢頭部に焼土、炭化物を廃棄した場所が発見された（図版5）が湧水や杉林のため一部調査するにとどまった。また、旧石器時代の遺構は確認されなかつた。

縄文時代の遺物

D遺跡縄文時代の出土遺物は、土器、石器、土製品、石製品であり、土器については地区ごとに記述し、石器についてはまとめて記述する。土器はI群（縄文前期）、II群（縄文中期）、III群（縄文後期）、IV群（縄文晚期）、平安時代の土器に分け、類別した。

遺物

I群土器（第13図20、21）

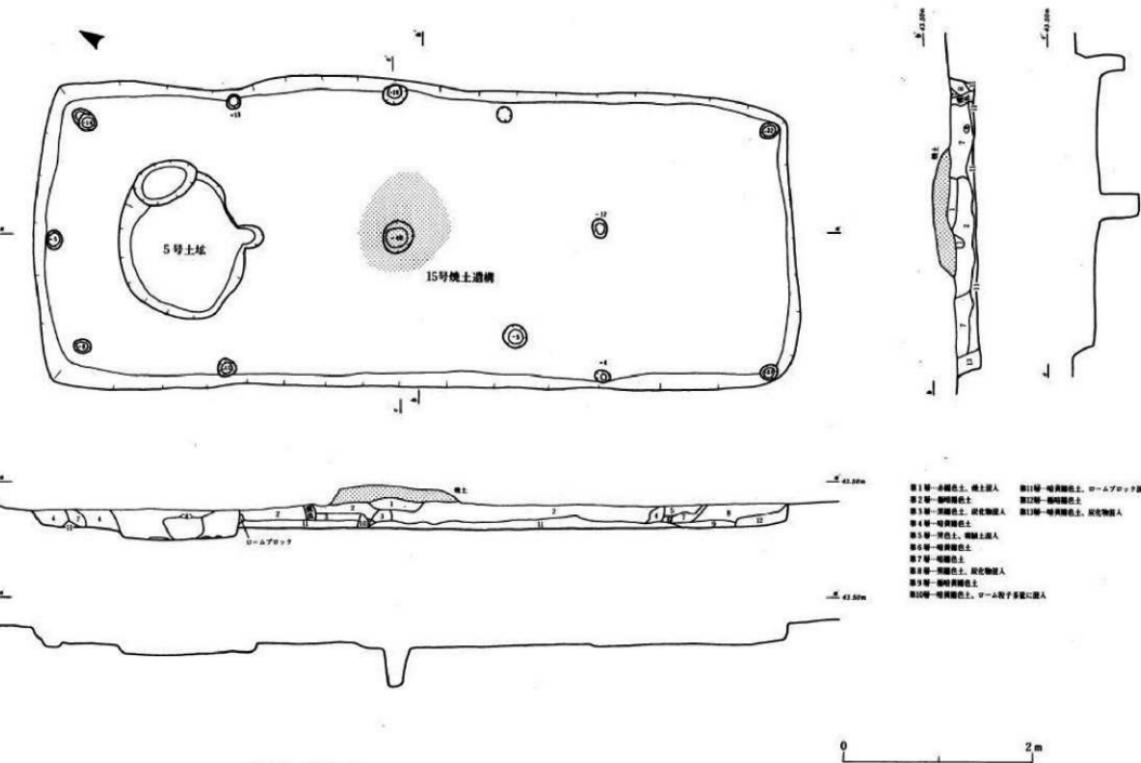
細い粘土紐を貼り付け、幾何学的文様を作るもの、21は右傾の粘土紐上にさらに粘土紐を重ね、格子目文を作り出している。

II群土器（第13図5～13、15～18、22～24、第14図25～28、35、第15図36）

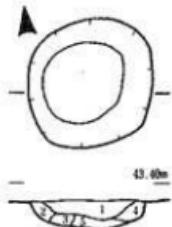
沈線による文様構成を主とし、地文は撲糸文、單節斜縋文、無文で、口縁部から胴部に幾何学的施文のあるもの（12）、3～4個の山形口縁を持ち、その下部にS字状連續文、鉤形文が施文されるもの（23、36）がある。

IV群土器（第14図29～34）

平行沈線文、工字文、変形工字文の施文で、口唇部に刻目、沈線のめぐるものがみられる。器形は鉢形、壺形と考えられる。29、33、34はヘラ状工具でよく研磨されており、29、34は特に著しく、

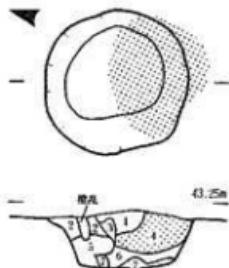


第11図 1号住居跡



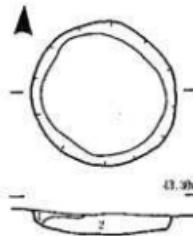
- 第1剖…暗褐色土、ローム粒子・炭化物混入
第2剖…暗褐色土
第3剖…暗茶褐色土、ローム粒子混入
第4剖…暗褐色土
第5剖…暗色土、ローム粒子混入

1号土堆

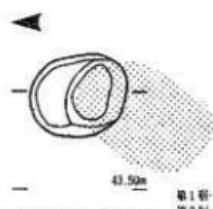


- 第1剖…暗褐色土、植生・炭化物混入 しまっている
第2剖…暗茶褐色土、ローム粒・炭化物混入
第3剖…暗褐色土、灰土・炭化物混入
第4剖…本褐色土 (灰土)
第5剖…暗褐色土、河口砂粘土上のブロック・炭化物混入
第6剖…浅褐色土、被土混入
第7剖…青褐色土、かたくしまっている

2号土堆

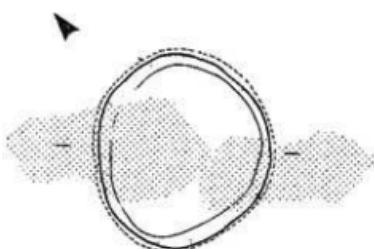


- 第1剖…暗褐色土
第2剖…暗褐色土、ローム粒子・炭化物混入
3号土堆



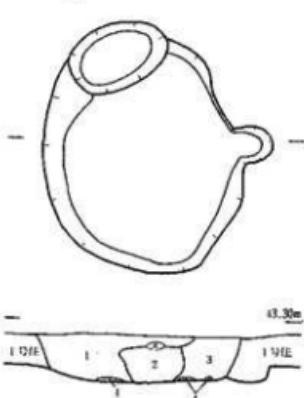
- 第1剖…暗褐色土、ローム粒子混入
第2剖…暗褐色土
第3剖…褐色土
第4剖…深褐色土
第5剖…黑褐色土

4号土堆



- 第1剖…本褐色土 (灰土)
第2剖…暗褐色土、炭化物混入
第3剖…暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第4剖…黄褐色土、灰土・炭化物・ローム粒子混入
第5剖…暗褐色土、灰土・炭化物・ローム粒子混入
第6剖…暗褐色土、灰土・炭化物・ローム粒子混入
第7剖…暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第8剖…暗褐色土、炭化物混入、かたくしまっている

5号土堆

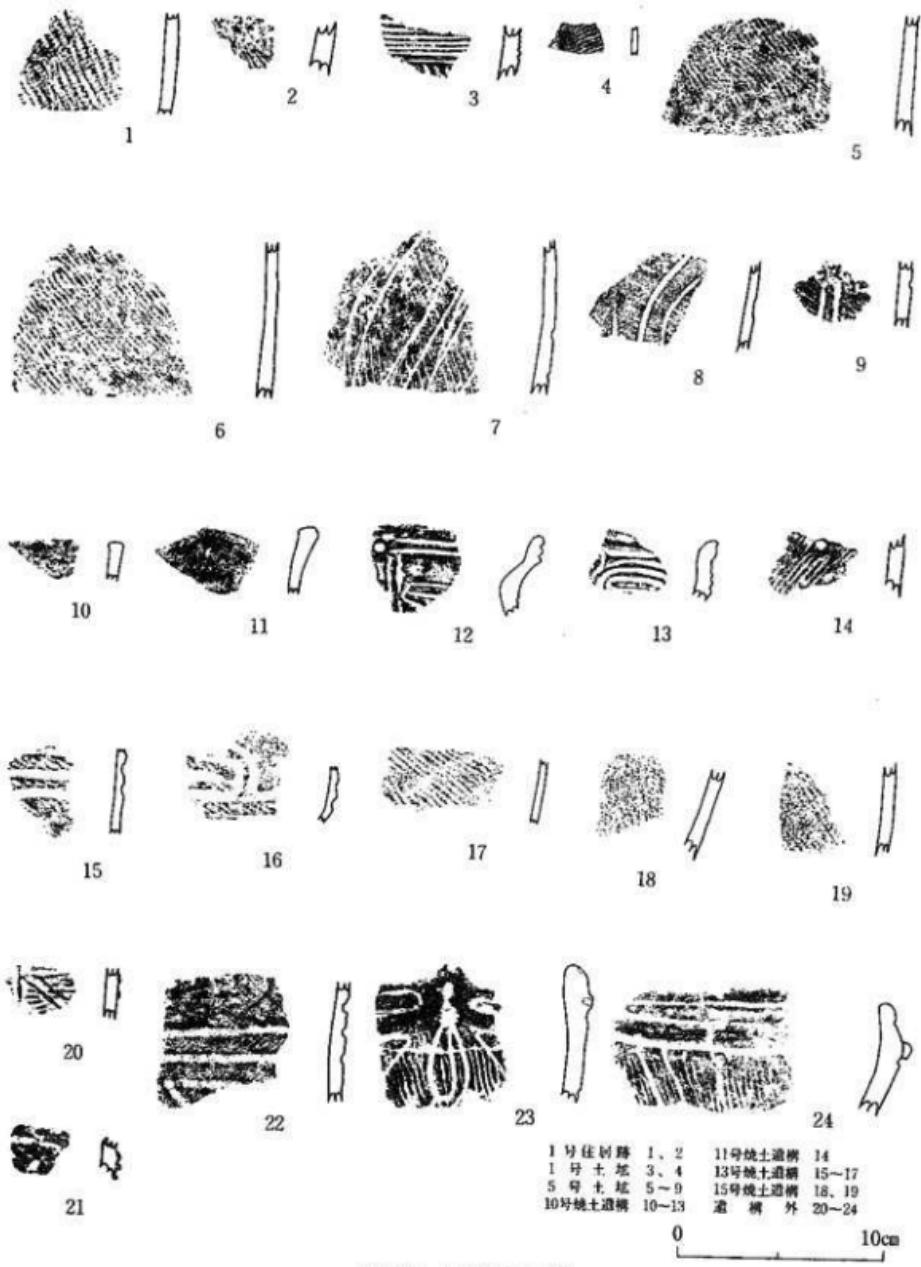


- 第1剖…暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2剖…暗褐色土、灰土・炭化物・ローム粒子混入
第3剖…深褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第4剖…深褐色土

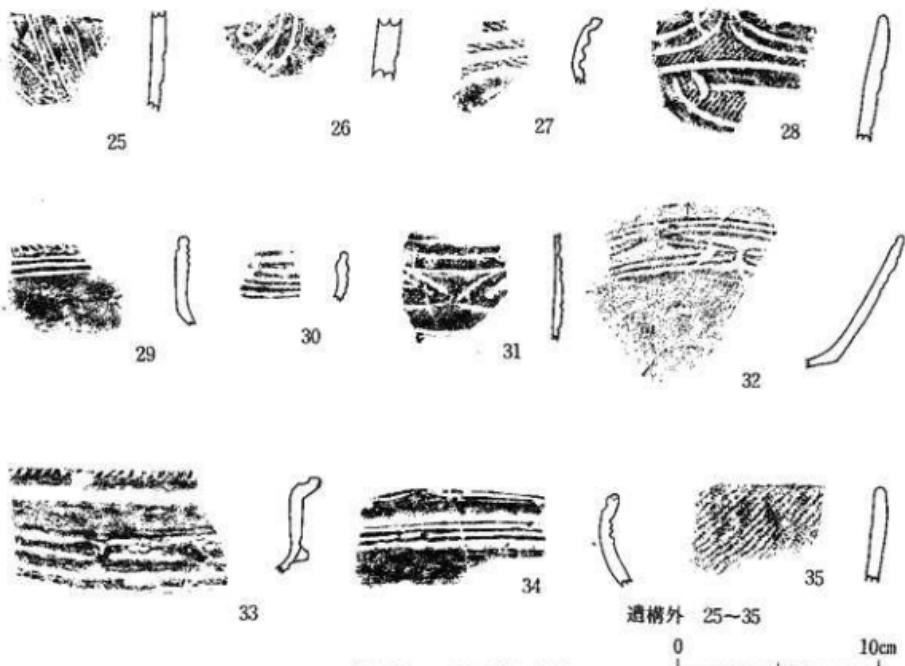
6号土堆



第12図 1地区土堆

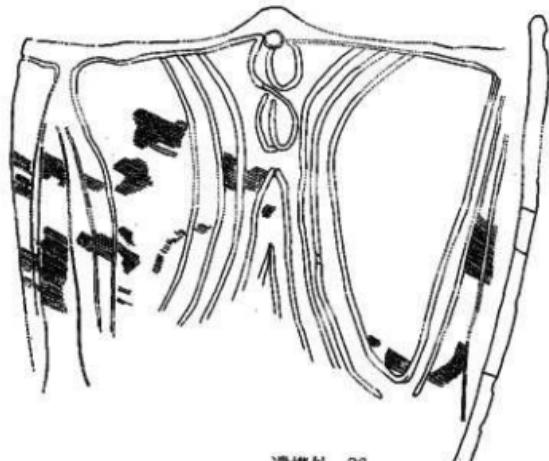


第13図 1地区出土土器



第14図 1地区出土土器

胎土、焼成共に良好である。
30は外面にベニガラ、内外
面に煤状炭化物の付着が認
められる。



第15図 1地区出土土器

(2) 2 地区

遺構

2 地区の検出遺構は、堅穴住居跡 4 箇、土塙 61 基、溝状土塙 2 基、焼土遺構 8 ケ所である。焼土遺構の中には住居跡の炉と考えられるものもある。

1 号住居跡（第16図）

北側の沢に面した堅穴住居跡で、3号住居跡の東壁を切り、49号土塙を内包している。プランは不整円形を呈し、直径は約 4m を測る。壁高は 10cm 程度で緩やかに立ち上がる。床はしっかりとしておりほぼ平坦であるが、一部長芋の擾乱が及んでいる。ピットは、中央部と壁にそって検出されており、明確な主柱穴としては不明だが、おそらく配列としては壁に沿った形になると考えられる。炉としての焼土は確認できなかったが、埋土中に焼土や炭化物が集中して検出された。遺物は埋土から前期土器片が若干出土したのみである。

2 号住居跡（第17図）

2 地区北東部に位置し、4.4m × 3.6m の不整椭円形を呈する堅穴住居跡である。この付近は、ローム上面にまで擾乱が及んでいるため、壁はあまりしっかりとしないかったが、床は比較的しまっており、ピットが内外部にわたり集中的に多数検出されている。埋土において確認された焼土は住居跡床面にまで及んでおらず、炉は検出できなかった。遺物は埋土から晩期の土器片、ピットからはそれぞれ前期と晩期の土器片が出土している。

3 号住居跡（第16図）

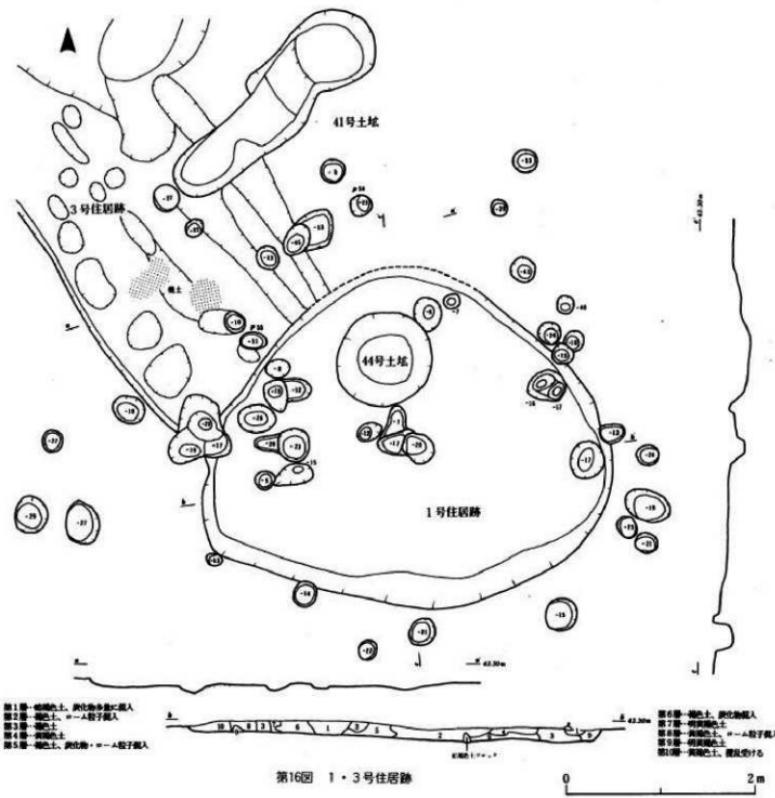
北側の沢に面し、1号住居跡によって東壁を切られている堅穴住居跡である。また、長芋による擾乱が著しく、わずかな焼土が 2 ケ所検出されているものの、壁は南西部分が一部残るだけである。検出されたピットのうちのひとつから前期の土器片が出土している。

4 号住居跡（第18図）

2 地区南東に位置する堅穴住居跡で、45号土塙及び 46 号土塙を内包する。南半分が擾乱を受けていたため壁が検出できなかったが、北東壁は比較的しっかりとおり、おそらく円を基本としたプランになるものと思われる。床は全体的に平坦でよくしまっているが、45号土塙と 46 号土塙の中間から東側は特にかたくしまっている。柱穴は北半部の壁に沿って形よくならんで検出された。焼土は、いわゆる床が焼けた形態のものは確認されておらず、45号土塙と 46 号土塙の埋土に流れ込む形で入っているが、46号土塙の焼土については、焼土のあり方等から本住居跡の炉の可能性も考えられる。遺物は出土していない。

焼土遺構

焼土遺構としては、北東端の沢に面した一角と、中央部 39 号土塙北側の 2 ケ所に集中してみられた。これら焼土遺構のうち北東部の 3 号、4 号と中央部 7 号、8 号の 4 基がローム直上でよく焼けている。北東部では、ピットが重複して多数検出され、これらのピット及びロームを覆う層からは、



第16回 1・3号住居跡

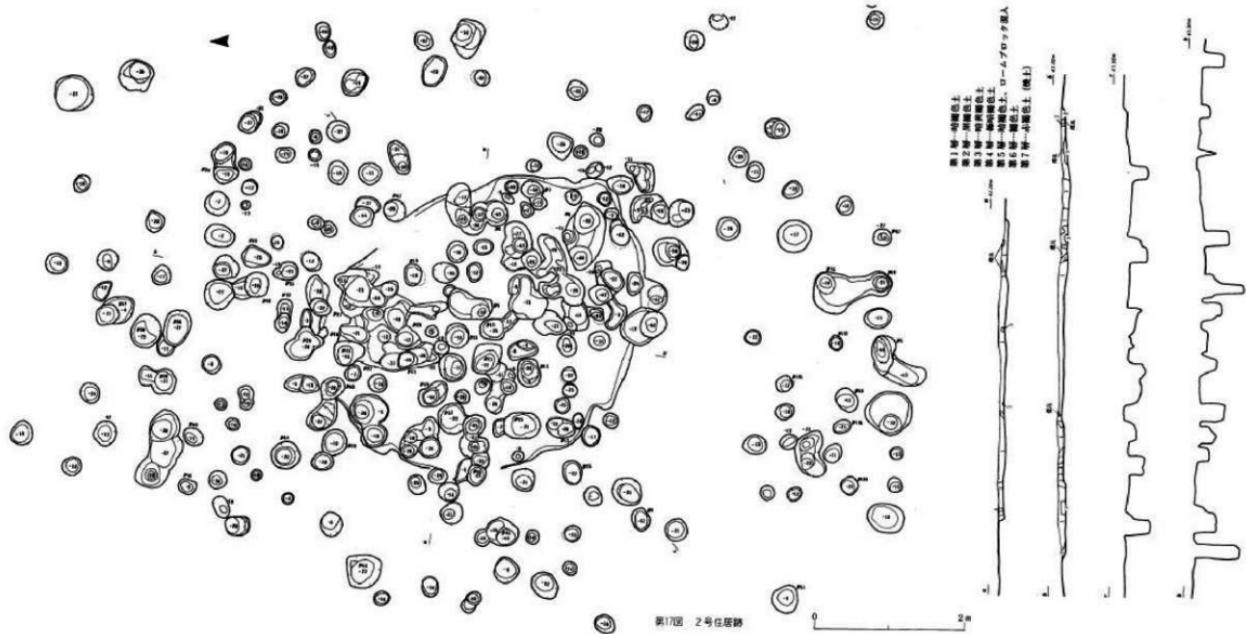
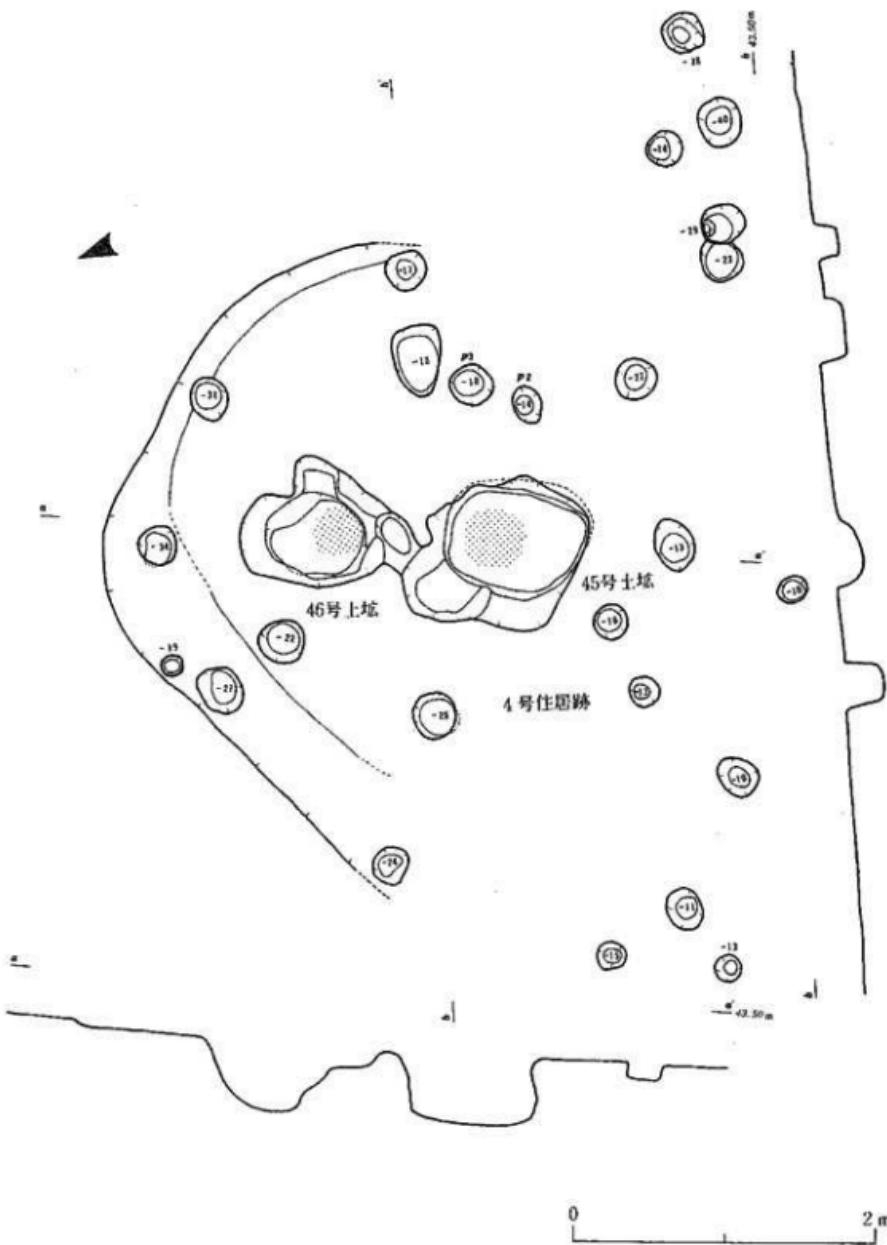
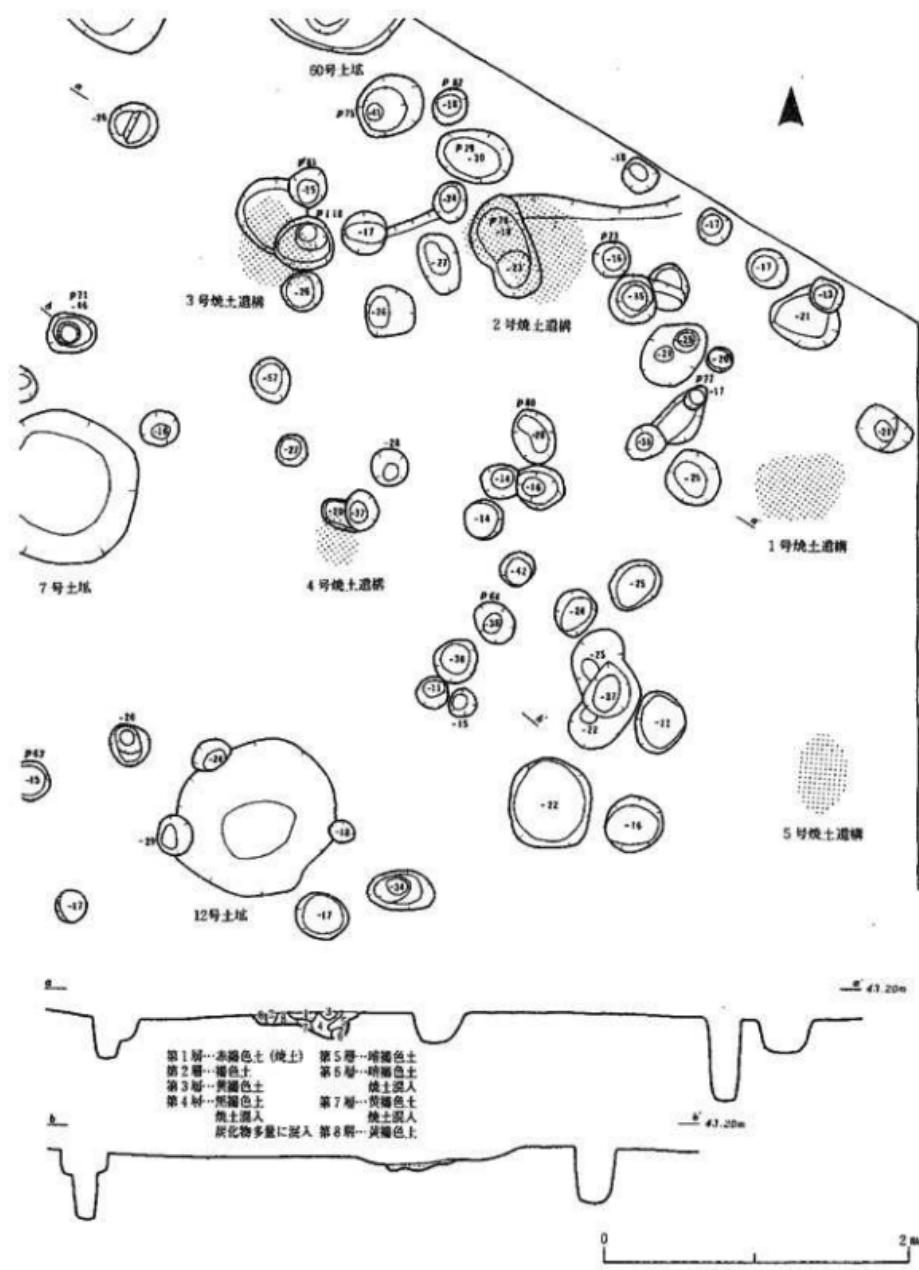


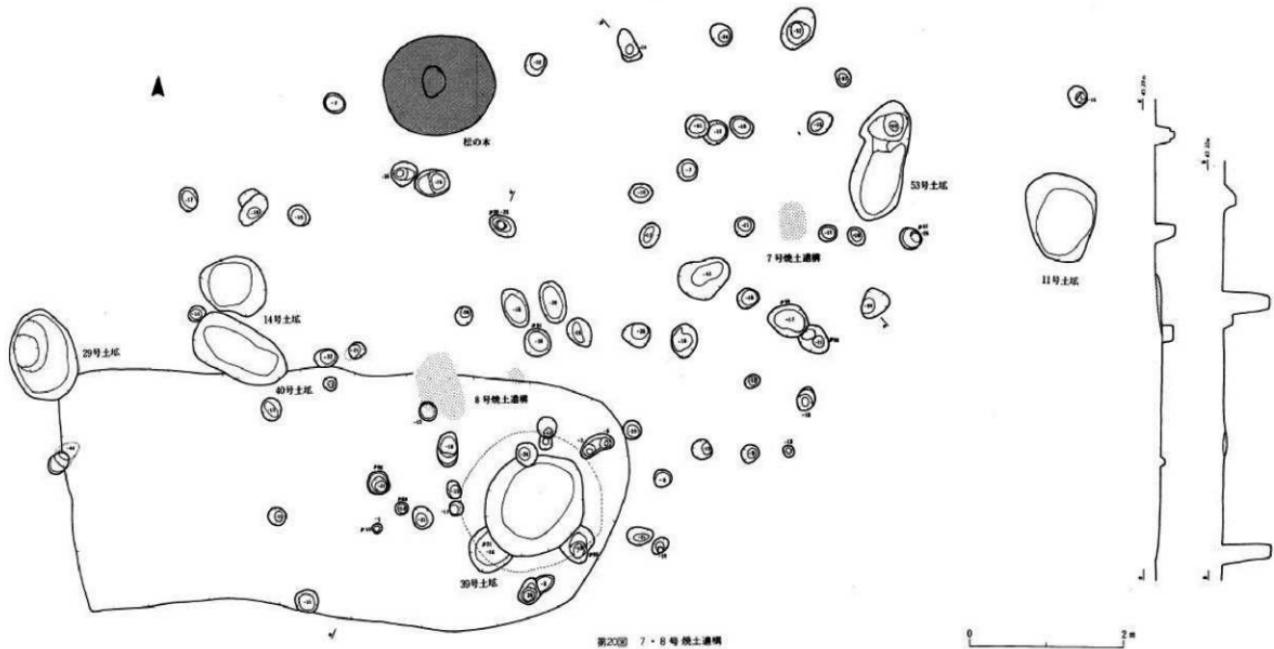
図17 2号住居跡



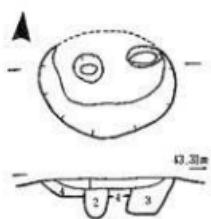
第18図 4号住居跡



第19図 1~5号焼土遺構

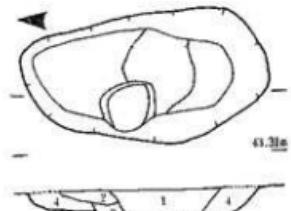


第20圖 7・8号 土塚遺構



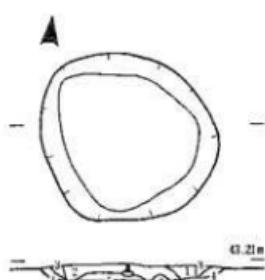
第1層…赤褐色土
第2層…暗褐色土、ローム粒子多量に混入
第3層…暗褐色土、ローム粒子混入
第4層…暗褐色土

1号生地



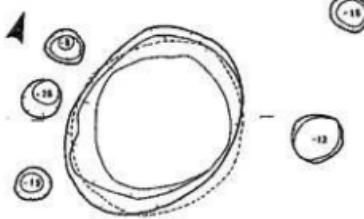
第1号…深褐色土
第2号…暗褐色土
第3号…黄褐色土
第4号…暗棕褐色土

3号土忙



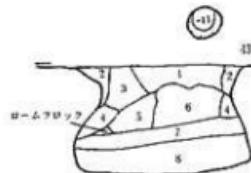
第1層…黒褐色土、炭化物混入
 第2層…黒褐色土
 第3層…黒褐色土、炭化物混入・かたくしまっている
 第4層…暗黃褐色土
 第5層…暗褐色土、ロールブロック混入

卷之四



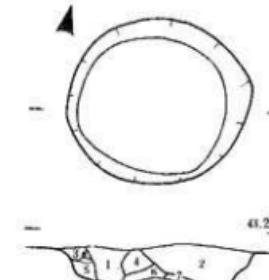
第1带—黑色土
第2带—消焰色土
第3带—暗消焰色土
第4带—灰消焰色土
第5带—深消焰色土
第6带—深的褐色土， Fe^{2+} 粒子很大
第7带—暗的黑色土，黑色带 Fe^{2+} 氧化物带入
第8带—暗的褐色土，凹凸带 Fe^{2+} 氧化物带多量于砾石带

2号店



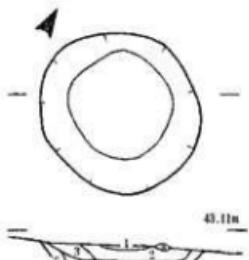
- 第1层：粘质土，灰化物混入
- 第2层：粘质褐色土
- 第3层：粘质褐色土
- 第4层：褐色土
- 第5层：粘质褐色土
- 第6层：粘质褐色土
- 第7层：粘质褐色土，—二粒子混入
- 第8层：粘质褐色土

48

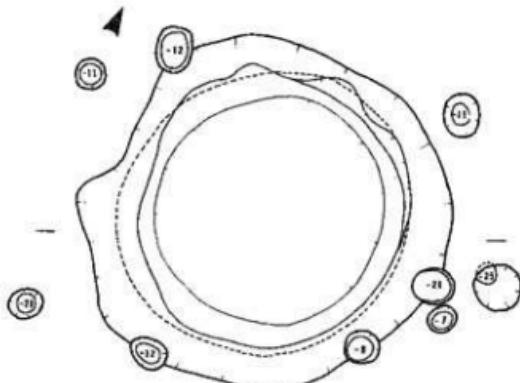


第1種—暗紅色上、鐵土-氧化物混入
第2種—暗褐色上
第3種—暗褐色上
第4種—褐色上
第5種—暗黃褐色上
第6種—黑色上、灰化物混入
第7種—暗藍褐色上
第8種—暗褐色上、鐵土-氧化物混入
第9種—暗褐色上、鐵土-氧化物混入
第10種—暗褐色上
第11種—暗褐色上
第12種—黃褐色上
第13種—褐色上、次氯酸鉀-エビソード-ト呑入
第14種—暗褐色上、鐵土-氧化物混入
第15種—暗褐色上、灰化物混入

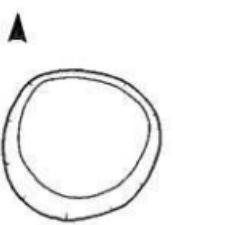
八月三十日



第1層…黒色土、焼土混入
第2層…暗褐色土、炭化物混入
第3層…暗褐色土、焼土・炭化物混入
第4層…暗褐色土
第5層…暗褐色土、ローム粒子混入
7号土壤

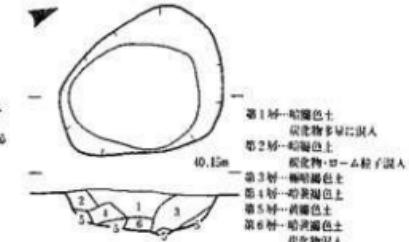


第1層…暗黄赤褐色土
第2層…褐色土
第3層…褐色土、炭化物混入
第4層…暗黄赤褐色土、炭化物混入
第5層…暗褐色土
第6層…褐色土、焼土・炭化物混入
第7層…暗褐色土
第8層…暗褐色土
第9層…褐色土、焼土・炭化物混入
第10層…暗褐色土、焼土・炭化物混入
第11層…赤褐色土(焼土)
第12層…暗黄褐色土
第13層…暗褐色土
第14層…褐色土、焼土・炭化物混入
第15層…赤褐色土(焼土)
第16層…暗褐色土、焼土混入
第17層…褐色土、ロームブロック混入
第18層…暗褐色土、粘性小まい
第19層…褐色土、炭化物・ロームブロック混入
第20層…赤褐色土
第21層…褐色土、炭化物混入
8号土壤



9号土壤

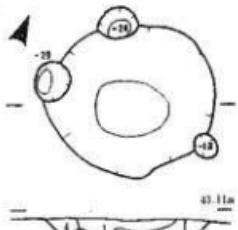
第1層…暗黄褐色土
第2層…暗褐色土、粘性小まい
第3層…黄褐色土、かたくなりまっている
第4層…暗褐色土、しまっている
第5層…暗褐色土
第6層…黒色土
第7層…黄褐色土
43.26m
ロームブロック ロームブロック
10号土壤



11号土壤



第22図 2地区土壤

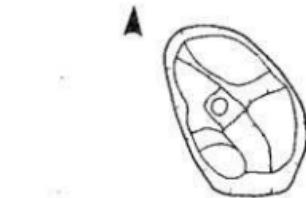


12号土壤

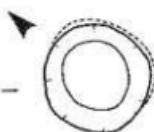
- 第1剖…暗褐色土、炭化物混入
第2剖…暗褐色土、ロームブロック混入
第3剖…暗褐色土、炭化物混入
第4剖…暗褐色土、ロームブロック混入
第5剖…暗褐色土
第6剖…暗褐色土、炭化物混入
第7剖…暗褐色土、ローム粒子混入
第8剖…暗褐色土
第9剖…暗褐色土

- 第1剖…暗褐色土
第2剖…暗褐色土
第3剖…暗褐色土
第4剖…暗褐色土、ローム粒子混入
第5剖…暗褐色土、ローム粒子・ブロック混入
第6剖…暗褐色土

14号土壤

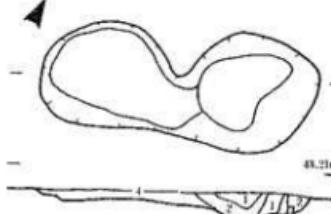


13号土壤



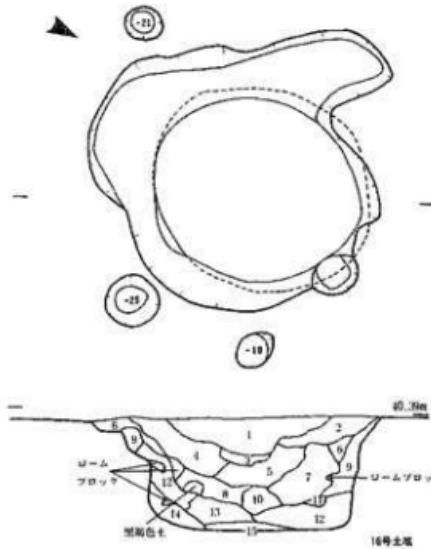
15号土壤

- 第1剖…暗褐色土
第2剖…暗褐色土、ロームブロック混入
第3剖…暗褐色土
第4剖…暗褐色土
第5剖…暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第6剖…暗褐色土、ロームブロック混入
第7剖…暗褐色土、炭化物混入

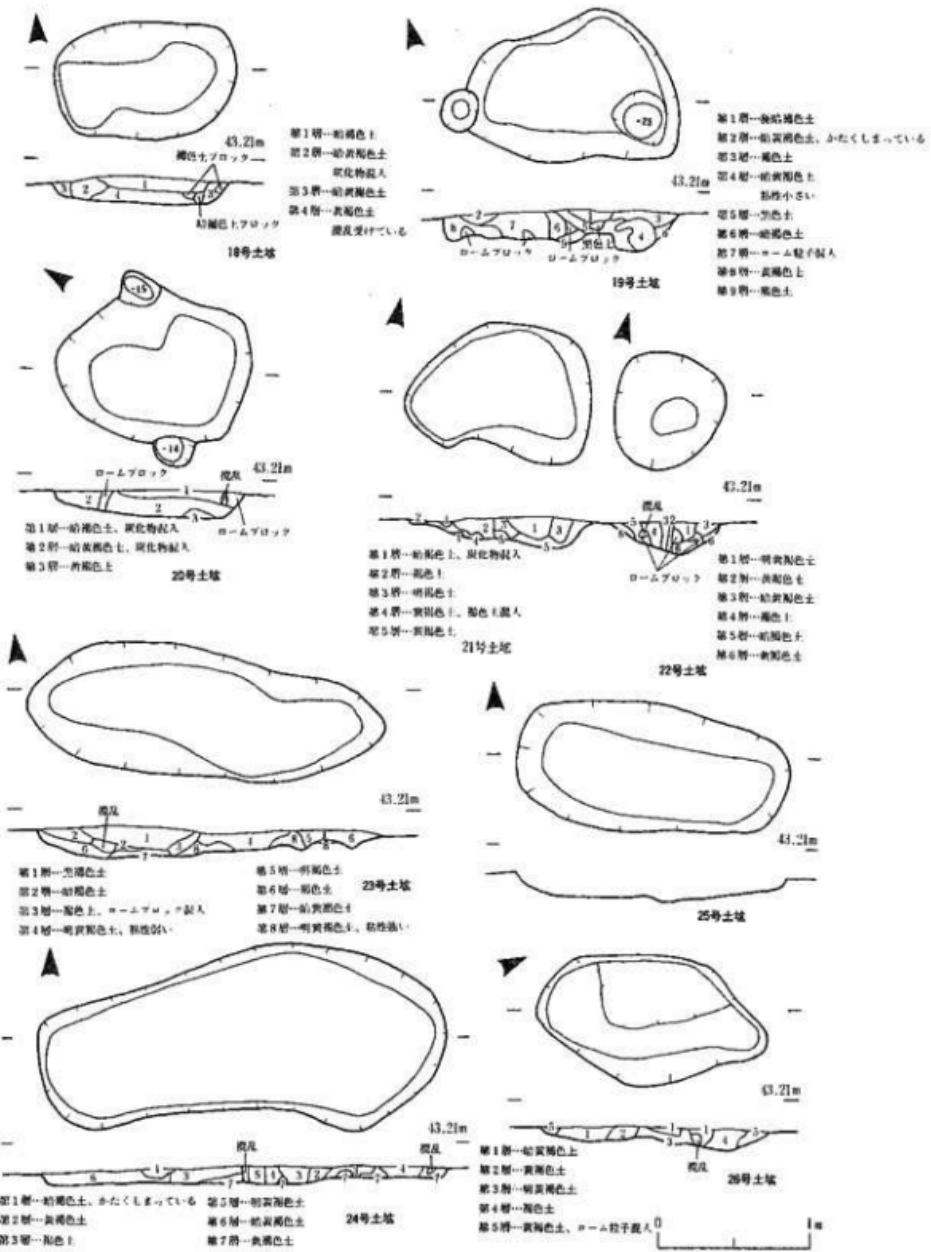


17号土壤

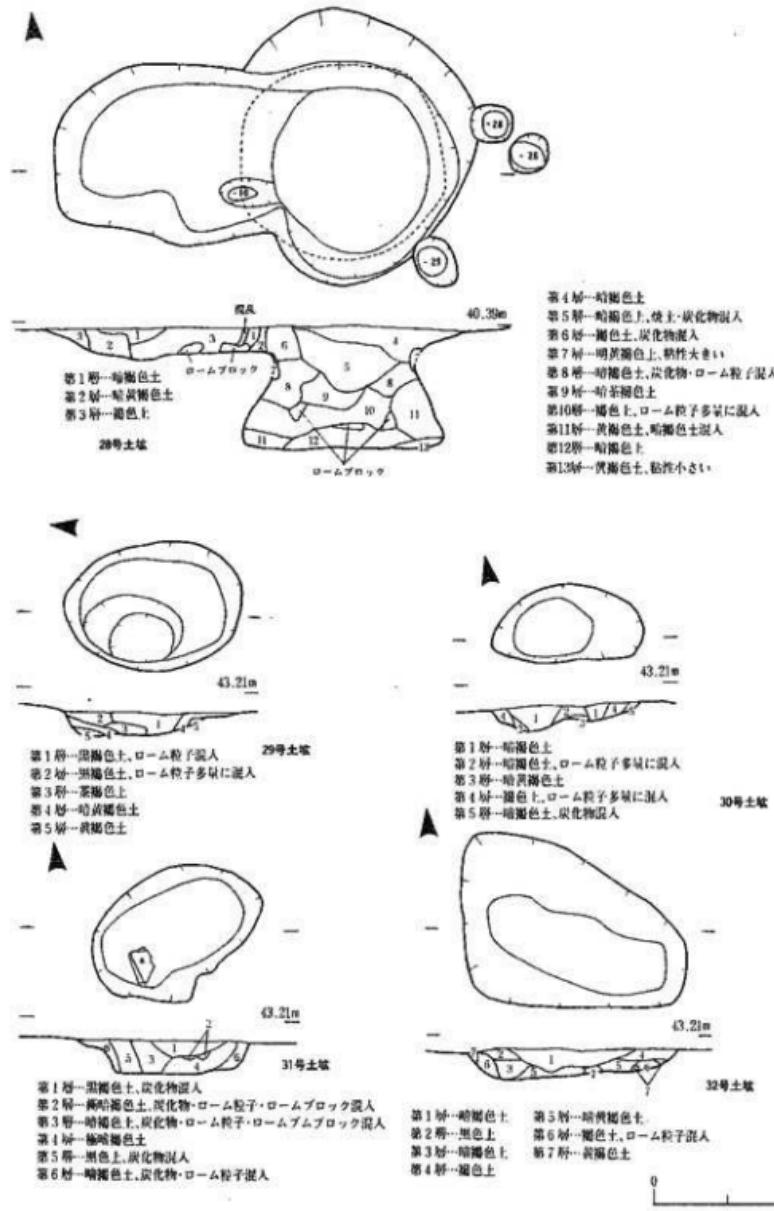
- 第1剖…暗褐色土、炭化物混入
第2剖…暗褐色土、炭化物混入
第3剖…暗褐色土、炭化物混入
第4剖…暗褐色土、炭化物混入
第5剖…暗褐色土、炭化物混入
第6剖…暗褐色土、炭化物混入
第7剖…暗褐色土、壁上・炭化物・ロームブロック混入
第8剖…暗褐色土、炭化物混入
第9剖…暗褐色土
第10剖…暗褐色土、炭化物混入
第11剖…暗褐色土、地上を茎に混入、炭化物混入
第12剖…暗褐色土、炭化物混入、粒度大きい
第13剖…暗褐色土、炭化物混入
第14剖…暗褐色土、粒度大きい
第15剖…暗褐色土、粒度大きい



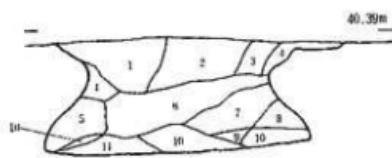
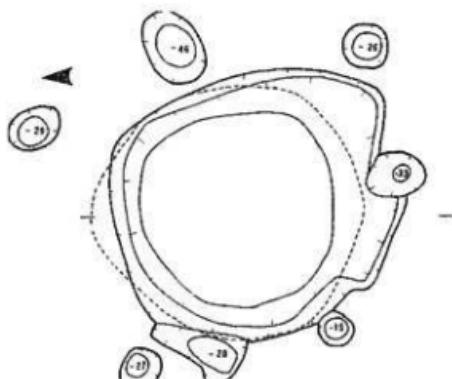
第23図 2地区土壤



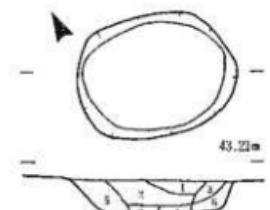
第24図 2地区土塚



第25図 2地区土壤

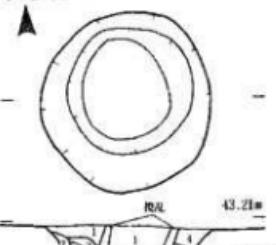


- 第1層…明褐色土
第2層…暗褐色土
第3層…暗黃褐色土
第4層…暗黃褐色土, 塵化物混入
第5層…暗褐色土, ローム粒子多量に混入
第6層…褐色褐色土, 塵化物多量に混入
第7層…褐色褐色土, 塵化物混入, しまってない
第8層…灰褐色土
第9層…暗褐色土
第10層…黃褐色土, 粘性大きい
第11層…暗褐色土, 粘性小さい



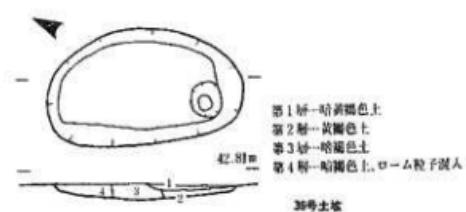
- 第1層…暗黃褐色土
第2層…暗褐色土, 塵化物・ローム粒子混入
第3層…黃褐色土
第4層…褐色土
第5層…褐色土, 塘化物混入
第6層…黃褐色土

34号土壤



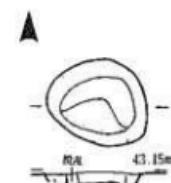
- 第1層…黑褐色土
第2層…明褐色土
第3層…深褐色土
第4層…深褐色土
第5層…暗褐色土, 塘化物・ローム粒子混入
第6層…暗褐色土, 塘化物・ローム粒子混入
第7層…暗黃褐色土

35号土壤

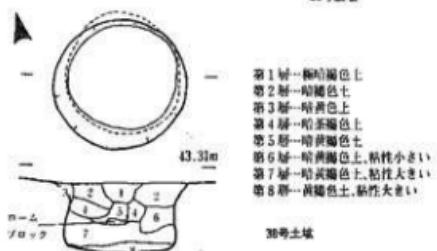


36号土壤

- 第1層…暗黃褐色土
第2層…黃褐色土
第3層…暗褐色土
第4層…暗黃褐色土, ローム粒子混入



37号土壤

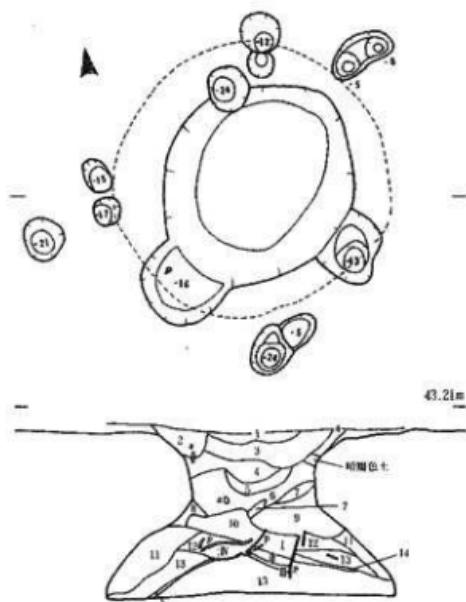


38号土壤

- 第1層…褐色褐色土
第2層…暗褐色土
第3層…暗黃褐色土
第4層…暗黃褐色土
第5層…暗黃褐色土
第6層…暗黃褐色土, 粘性小さい
第7層…暗黃褐色土, 粘性大きい
第8層…黃褐色土, 粘性大きい



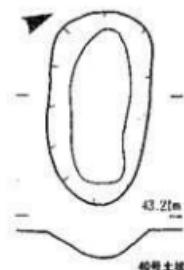
第26図 2地区土壤



第1解…暗茶褐色土、かたくしまっている
第2解…暗褐色土、かたくしまっている
第3解…褐褐色土
第4解…暗褐色土
第5解…黑褐色土
第6解…褐褐色土
第7解…黄褐色土
第8解…褐褐色土
第9解…暗褐色土、ローム粒子混入
第10解…暗褐色土、ロームブロック混入
第11解…暗褐色土、灰化物多量に混入
第12解…黄褐色土、粘性大きい
第13解…黒褐色土、灰化物多量に混入
第14解…黄褐色土、粘性大きい

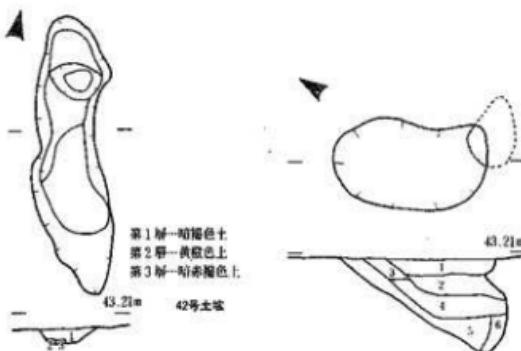
T…暗褐色土、炭化物混入
II…黑色土、ほとんど炭化物
III…暗褐色土、炭化物多量に混入
ローム粒子混入
IV…灰白色粘土

39号土塚

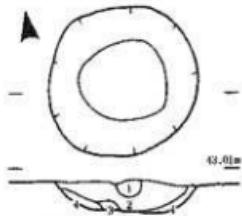


第1解…褐褐色土
第2解…黄褐色土、暗褐色土混入
第3解…暗褐色土
第4解…黄褐色土
第5解…明褐色土

41号土塚

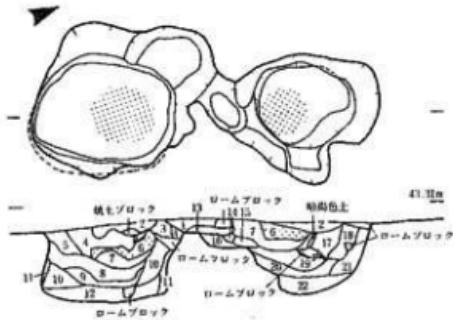


第27図 2地区土塚



第1剖面…暗褐色土
第2剖面…褐色土、ロームブロック混入
第3剖面…暗褐色土
第4剖面…明黄色土

44号土壌



第1剖面…暗褐色土
第2剖面…褐色土、かたくしまっている

第3剖面…暗褐色土、ロームブロック多量に混入

第4剖面…黒褐色土

第5剖面…暗褐色土、あまりしまっていない

第6剖面…赤褐色土上(地表)

第7剖面…暗褐色土

第8剖面…暗褐色土、炭化物のかたまり混入

第9剖面…明黄色土上、炭化物のかたまり混入

第10剖面…赤褐色土

第11剖面…黄褐色土

第12剖面…暗褐色土、たいくんかたくしまっている

第13剖面…黒褐色土

第14剖面…暗褐色土、ロームブロック多量に混入

第15剖面…暗褐色土、たいくんかたくしまっている

第16剖面…黒褐色土

第17剖面…黒褐色土、たいくんかたくしまっている

第18剖面…暗褐色土、たいくんかたくしまっている

第19剖面…暗褐色土、後半のかたまり多量に混入

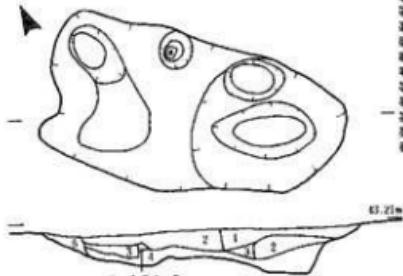
第20剖面…暗褐色土

第21剖面…暗褐色土、かたくしまっている

第22剖面…黄褐色土、撻打・炭化物混入

たいくんかたくしまっている

45号土壌



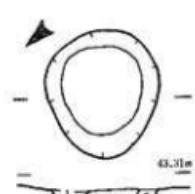
第1剖面…暗褐色土上、块状干裂人
第2剖面…暗褐色土、ロームブロック混入
第3剖面…褐色土
第4剖面…暗褐色土
第5剖面…明黄色土

47号土壌



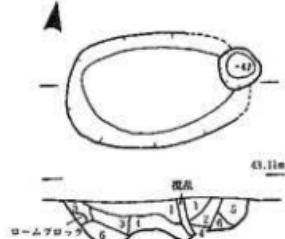
第1剖面…暗褐色土、块土、炭化物混入
第2剖面…暗褐色土
第3剖面…暗褐色土

48号土壌



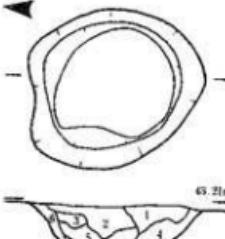
第1剖面…暗褐色土
第2剖面…暗褐色土、炭化物混入
第3剖面…暗褐色土
第4剖面…暗褐色土
第5剖面…褐色土
第6剖面…褐色土、ロームブロック混入

49号土壌



第1剖面…暗褐色土
第2剖面…暗褐色土
第3剖面…暗褐色土
第4剖面…暗褐色土
第5剖面…褐色土
第6剖面…暗褐色土
第7剖面…暗褐色土

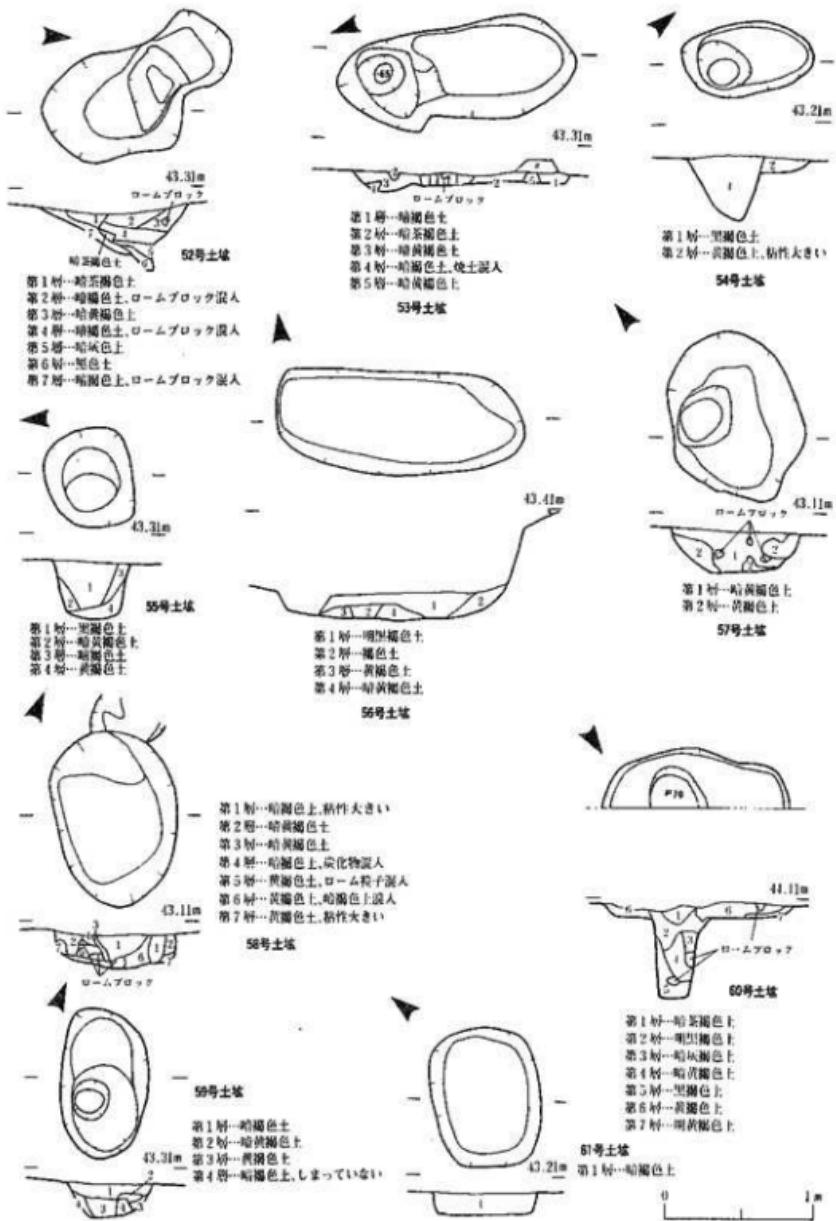
50号土壌



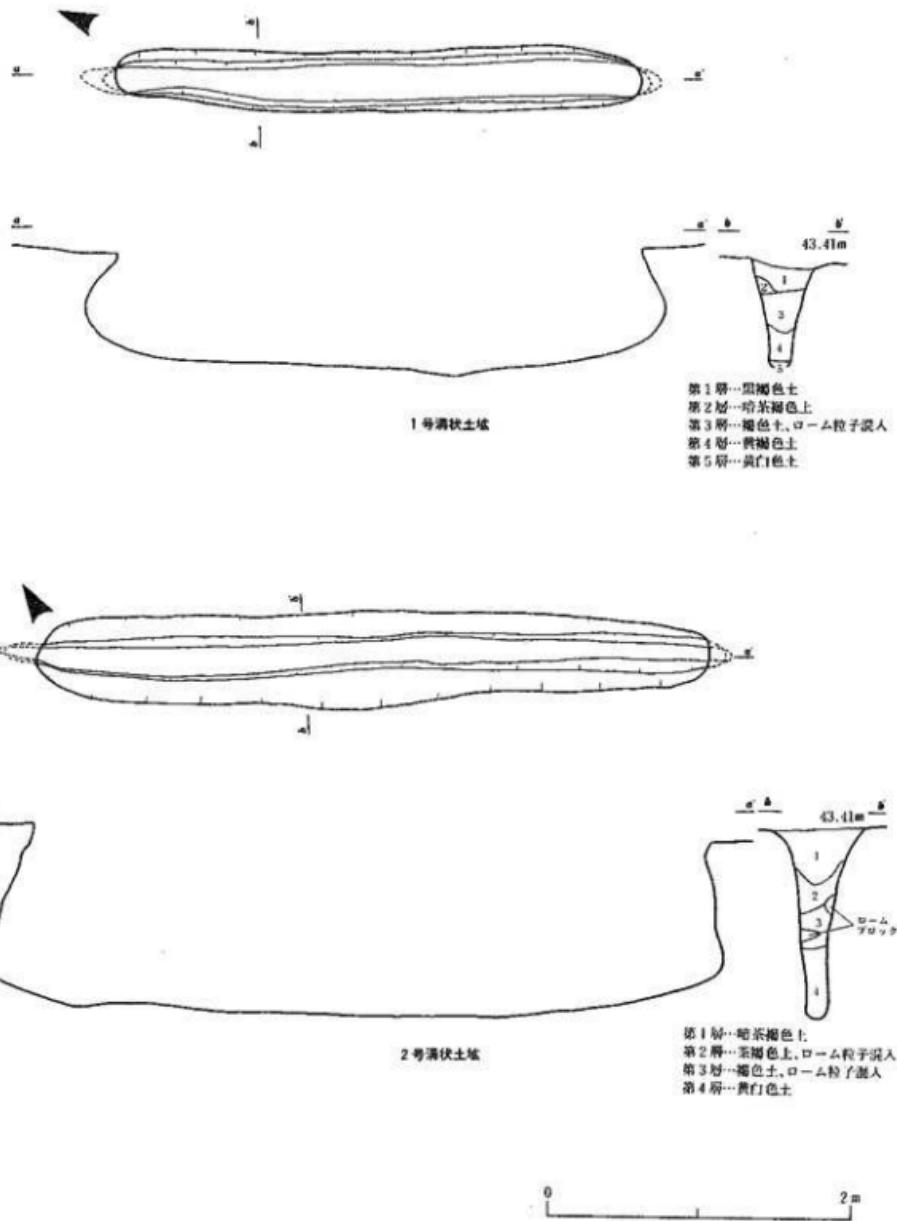
第1剖面…暗褐色土
第2剖面…暗褐色土、炭化物混入
第3剖面…暗褐色土
第4剖面…暗褐色土
第5剖面…暗褐色土、ロームブロック混入
第6剖面…暗褐色土
第7剖面…暗褐色土

51号土壌

第28図 2地区土壌



第29図 2地区土塙



第30図 溝状土塙

上 塚 一 覧 表 (1)

1 地 区					
土塚番号	平 面 形	底口部(cm)	長軸方向	出 土 遺 物	備 考
1	円 形	86×82		土器(晚期)	
2	円 形	95×95		土器	上部に焼土遺構
3	円 形	96×96			
4	楕 円 形	64×54	N 4° W		上部に焼土遺構
5	楕 円 形	129×114	N 140° W	土器(後期)、石器(石皿)	ビーカー状、上部に焼土遺構
6	楕 円 形	172×125	N 130° W		
2 地 区					
1	楕 円 形	91×71	N 93° W	土器(晚期)	Ⅱ層上面にて確認
2	楕 円 形	135×102	N 158° W	土器(前期)、剝片	袋状
3	不 整 長 形	163×86	N 10° W		
4	楕 円 形	111×105	N 110° W	土器	
5	楕 円 形	123×111	N 50° W	土器(晚期)、石器(凹石、磨石)	
6	不 整 形	194×157	N 25° W	土器(晚期)、石器(磨石)、剝片	
7	楕 円 形	111×98	N 68° W	土器	
8	楕 円 形	229×223		土器(晚期)、石器(凹石)、剝片	袋状、多量の燒土検出
9	円 形	106×103		土器	
10	楕 円 形	133×104	N 55° W	土器	
11	楕 円 形	109×97	N 156° W	土器(前期)、剝片	
12	楕 円 形	113×102	N 117° W	土器、剝片	
13	長 楕 円 形	128×79	N 36° W		
14	楕 円 形	90×75	N 68° W	土器(前期)	
15	円 形	74×72		土器(晚期)、石器(石皿)	袋状、炭化物出土(タル:?)
16	不 整 円 形	201×188	N 10° W	土器(前期)、剝片	袋状、炭化物出土(タル:?)
17	不 整 長 形	183×42	N 110° W		
18	長 楕 円 形	120×78	N 95° W		
19	不 整 形	136×90	N 71° W		
20	楕 円 形	128×104	N 28° W		
21	不 整 形	124×85	N 101° W		
22	楕 円 形	78×70	N 50° W		
23	不 整 長 形	237×83	N 80° W	土器	
24	不 整 長 形	270×107	N 93° W		
25	隅丸長方形	179×87	N 78° W		
26	不 整 形	155×89	N 148° W		
27	楕 円 形	184×164		土器(前期)	袋状、第28号土塚と重複
28	隅丸長方形	270×120	N 83° W		第27号土塚と重複
29	楕 円 形	117×85	N 5° W	土器、剝片	
30	長 楕 円 形	101×51	N 86° W		
31	長 楕 円 形	119×74	N 110° W	石器(石皿)	
32	不 整 形	158×110	N 70° W		
33	楕 円 形	197×180		土器(前期)、剝片	袋状
34	楕 円 形	104×82	N 81° W		
35	楕 円 形	120×110	N 177° W	土器、石器(石皿)、剝片	
36	長 楕 円 形	129×76	N 27° W		
37	扇 円 形	70×56	N 63° W		
38	円 形	88×85		土器	袋状
39	不 整 円 形	144×123	N 131° W	土器(前期)、剝片	袋状

土 坡 一 覧 表 (2)

土坡番号	平面形	坡口部(cm)	長軸方向	出土遺物	備考
40	小判形	130×67	N 65° W	剝片	
41	不整長形	246×60	N 133° W	土器	
42	不整長形	185×49	N 19° W	土器	
43	不整形	102×54	N 34° W		
44	円形	98×97		土器(前期)	
45	不整形	101×95	N 156° W	土器	袋状
46	不整形	99×85	N 154° W	上器	袋状
47	不整形	200×104	N 47° W	土器、剝片	
48	長椭円形	106×63	N 165° W	土器、剝片	
49	椭円形	85×75	N 46° W		
50	小判形	120×75	N 100° W	土器	
51	椭円形	122×103	N 30° W	土器、剝片	
52	不整形	135×72	N 45° W		
53	不整長形	159×63	N 163° W		
54	長椭円形	88×47	N 137° W		
55	椭円形	67×58	N 100° W		
56	長椭円形	165×69	N 78° W		
57	椭円形	116×84	N 162° W	上器(晚期)	
58	長椭円形	118×69	N 40° W	土器、剝片	
59	長椭円形	100×58	N 26° W	土器(晚期)	
60	長椭円形	124×70	N 65° W	土器	
61	隅丸長方形	93×72	N 136° W		
3 地区					
1	椭円形	127×103	N 53° W	土器	
2	円形	59×55			
3	円形	113×111			袋状
4	椭円形	109×106	N 89° W	土器、剝片	ビーカー状
5	椭円形	88×72	N 99° W		ビーカー状
6	円形	97×95			
7	長椭円形	85×59	N 39° W		
8	不整形	73×43	N 47° W		
9	不整形	83×53	N 40° W		
4 地区					
1	小判形	290×151	N 12° W		
2	椭円形	99×79	N 135° W		
3	小判形	125×61	N 13° W		
4	小判形	136×85	N 30° W		
5	椭円形	100×98			日暮上面にて確認
6	不整長形	164×60	N 4° W		
7	椭円形	100×62	N 98° W		
8	隅丸長方形	91×58	N 31° W		
9	椭円形	65×52	N 93° W		
10	椭円形	64×50	N 17° W		
11	椭円形	50×44	N 10° W		
12	椭円形	67×62	N 53° W		埋土上面に石
13	椭円形	61×58	N 120° W		埋土上面に石
14	椭円形	45×45			埋土上面に石

ケルミの炭化物や同一個体になると思われる土器片の出土が顕著である。また中央部においてもピットが集中しており、7号焼土造構周辺のピットからは前期の土器片が出土し、8号焼土造構周辺では特に深いピットが検出されている。これらの焼土造構が検出された場所はローム層にまで擾乱が及んでいるため、職こそ検出できなかったものの住居跡である可能性が高いと考えられる。

遺 物

I 粘土器 (第31~44回)

a 類 (18、19、52、53、73~75、82、83、123、127、145、170、171、203)

細い粘土組を貼り、直線、鋸歯状文など幾何学的文様を構成するもので、平行する隆線の間を半截竹管状工具（外面）でなでているものがある。地文は無文、縦文で鉢形の土器が多い。203は4個の山形口縁をもつ鉢形の土器で、口径約24.5cm、器高約22cmを測る。地文はL R 単節斜縦文（横位回転）である。

b 類 (1、2、15、16、43~49、61、62、69、70、84、85、101、135、156、172~175、177、200、201、204)

a 類同様、細い粘土組を貼り付け、幾何学的文様を作り、細隆線文に半截竹管状工具の内面側を刺し引いて爪形文を施文するもので、平行しない鋸歯状文に爪形文を施文するものはほとんどない。（135、一点に見られるがモチーフの相違であろうか）。地文は単節斜縦文が多く、深鉢、鉢形土器である。43は薄手の鉢形土器で、折り返し口縁の内面に一条、口縁部に二条の円形細隆線文をめぐらしている。47は半截竹管状工具を刺突した爪形文である。202は深鉢形土器の口縁部であり、4箇の中空で手のこんだ把手をもつと思われる。外面に6つ内面に3つの三角形透しが作られ、爪形文施文の隆線で幾何学的（対称形）文様構成がなされる。把手を上から見るとこわい顔つきの動物相を観察できる。口唇部は「く」の字に極端に内湾し、2つの連続する山形突起を4個もつと思われる。地文R L 単節斜縦文（横位回転）の土器である。204は202と同器形の土器で、口がやや大きく開く。口唇部は「く」の字状に内湾する。地文はL R 単節斜縦文（横位回転）である。

c 類 (50、87、179~181)

半截竹管状工具内面による平行沈線文施文の土器である。

d 類 (71、92、183、198)

口唇部に刻目文、口縁部に撲糸、單軸絡条体压痕の施文されるもので、隆帶のめぐるものとそうでないもの（92）があり、器形は円筒深鉢形である。198は口径35cm、器高48cm（推定）を測り、口唇部、隆帶上に半截竹管状工具による連続刺突文が施され、口縁部は单軸絡条体压痕の施文で、脚部は原体の一方に結節のあるL R 原体の横位回転で綾絡文が認められる。

e 類 (55~57、86)

半截竹管状工具内面を押し引いて施文し、隆起線を表現する（半隆起線）グループで、半隆起線

文は口縁部、胴部に施文される。86は蓮華文の施文がみられる。

f類 (194、195、197、199)

a～e類以外の土器で、194は口径15cm、器高16.5cmの深鉢形土器で、4個の突起をもち、折り返し口縁で、外反する。山形口縁下に隆帯が垂下し、口頸部隆帯に重なる。折り返し口縁には二条の連續刺突文、口縁部は単軸絞条体压痕文、口頸部隆帯は単節斜縫文の圧痕文がめぐる。胴部は羽状縫文（横位回転）である。195は口径16cm、器高20cm（推定）の深鉢形土器で、口縁は外反する。口唇部、口頸部半隆帯及び口縁部三角形隆帯に半截竹管状工具による連續刺突文（爪形文）が施文され、その間を縦位に半截竹管状工具内面で沈線を施し、次に横位に三条の平行沈線をめぐらしている。施文に用いた半截竹管状工具は同一のものである。胴部はL R 単節斜縫文（横位回転）で、末端は結節し縫絡文がみられる。197は口径33.5cm、器高40.5cmの深鉢形土器で、口縁はやや外反する。口縁部はL R 単節斜縫文（横位回転）を施し、半截竹管状工具内面による縦位、横位の半隆起線文を施文し、横位半隆起線文（二条）に半截竹管状工具で爪形文を施す。縦位に貼り付けられた4個の隆帯（三日月状隆帯を付す）は、頸部の隆帯と接する。胴部は木目状撚糸文の施文で、左右交互に施文するものである。199は口径10.5cm、器高14.5cmの小形の深鉢形土器である。4個の山形口縁をもち、隆帯が垂下する。L R 単節斜縫文（縦位回転）を施し、口縁部に単節斜縫文を圧痕している。

I群土器（第36図 112）

1号溝状土塙壙土上部からの出土で、R L 単節斜縫文（縦位回転）で、平行沈線の間は磨消である。

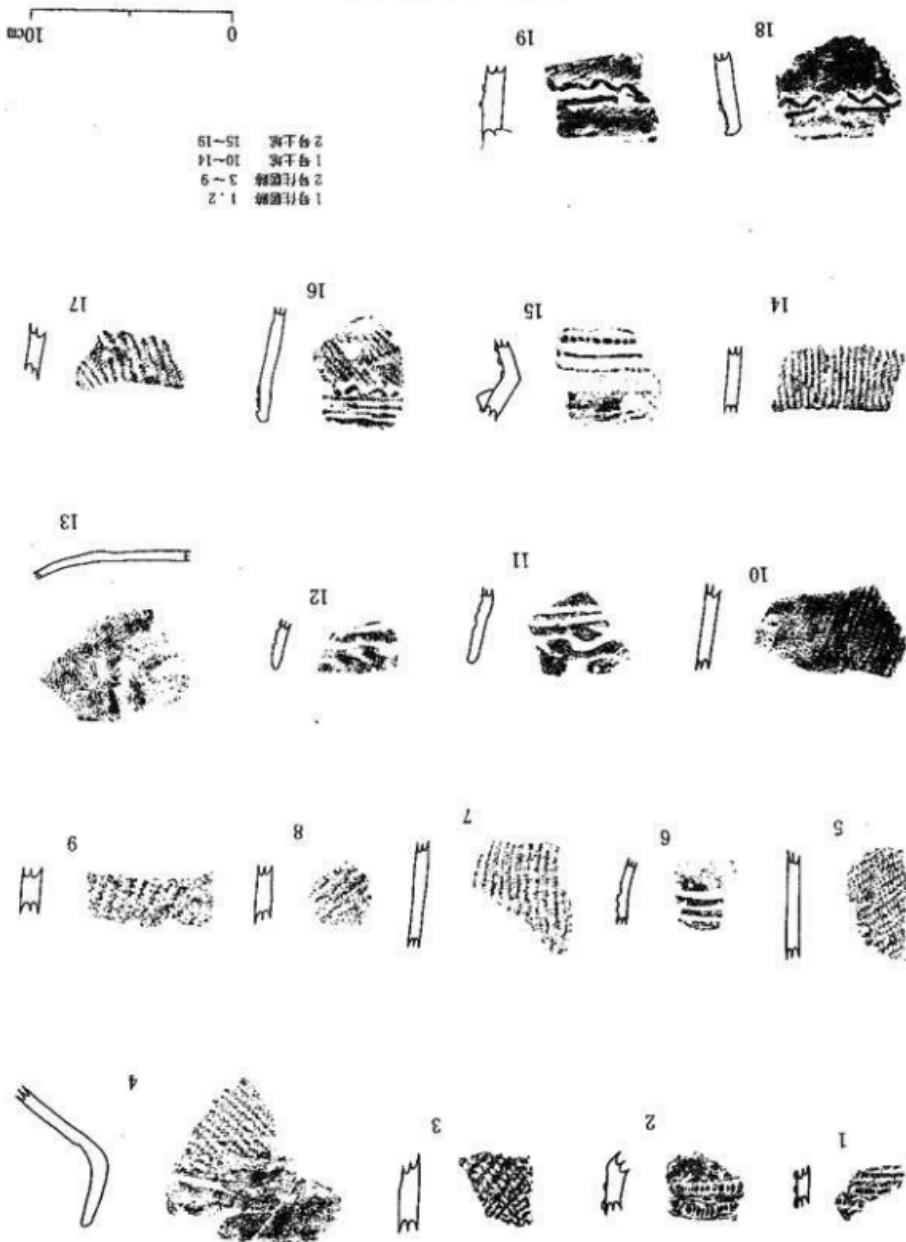
II群土器（第38図 163～165）

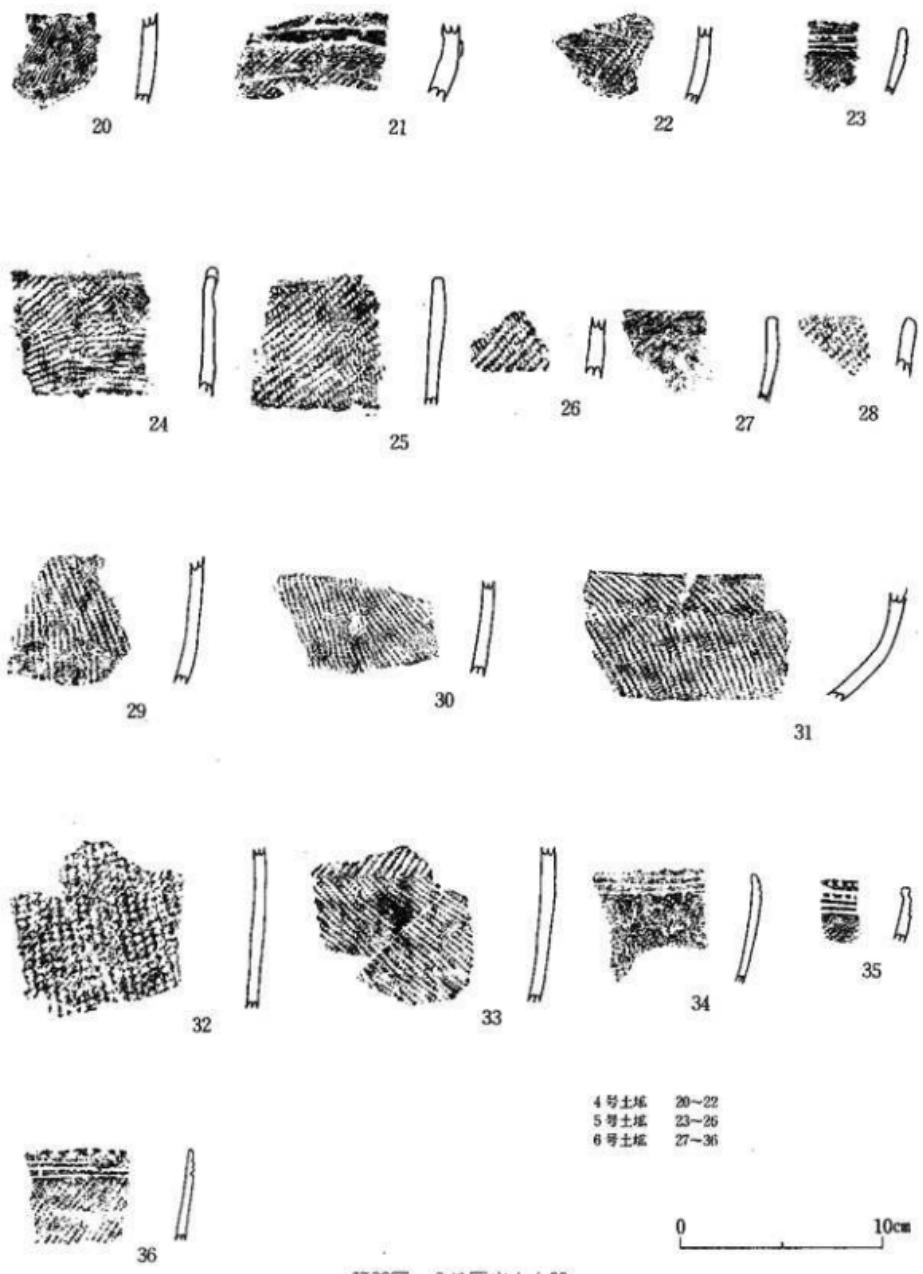
沈線による幾何学的文様構成を作るもので165の地文は撚糸文である。

IV群土器（第31図 6、11～13、第32図23、34～36、第33図37、38、40、41、第34図68、第36図109、116、118、第37図126、129、132、143、第38図149、第39図185～187）

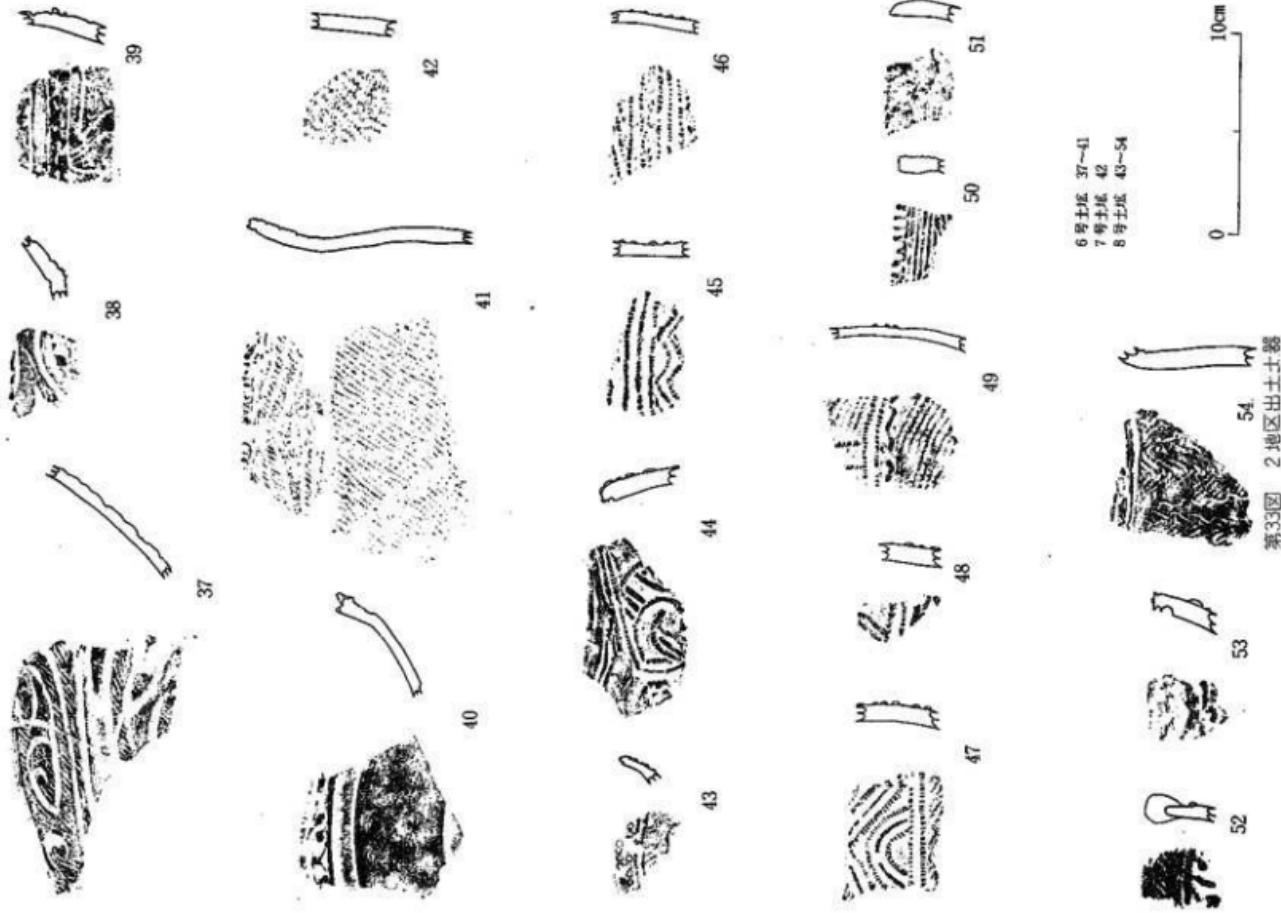
口唇部に刻口文、沈線をめぐらすもの、突起をもつものがある。口縁部は三叉状文、刻口文、平行沈線文、沈線文、磨消手法などにより文様を作り出す。地文は単節斜縫文が多く、ヘラ状工具により研磨され、光沢のみられるものがある。

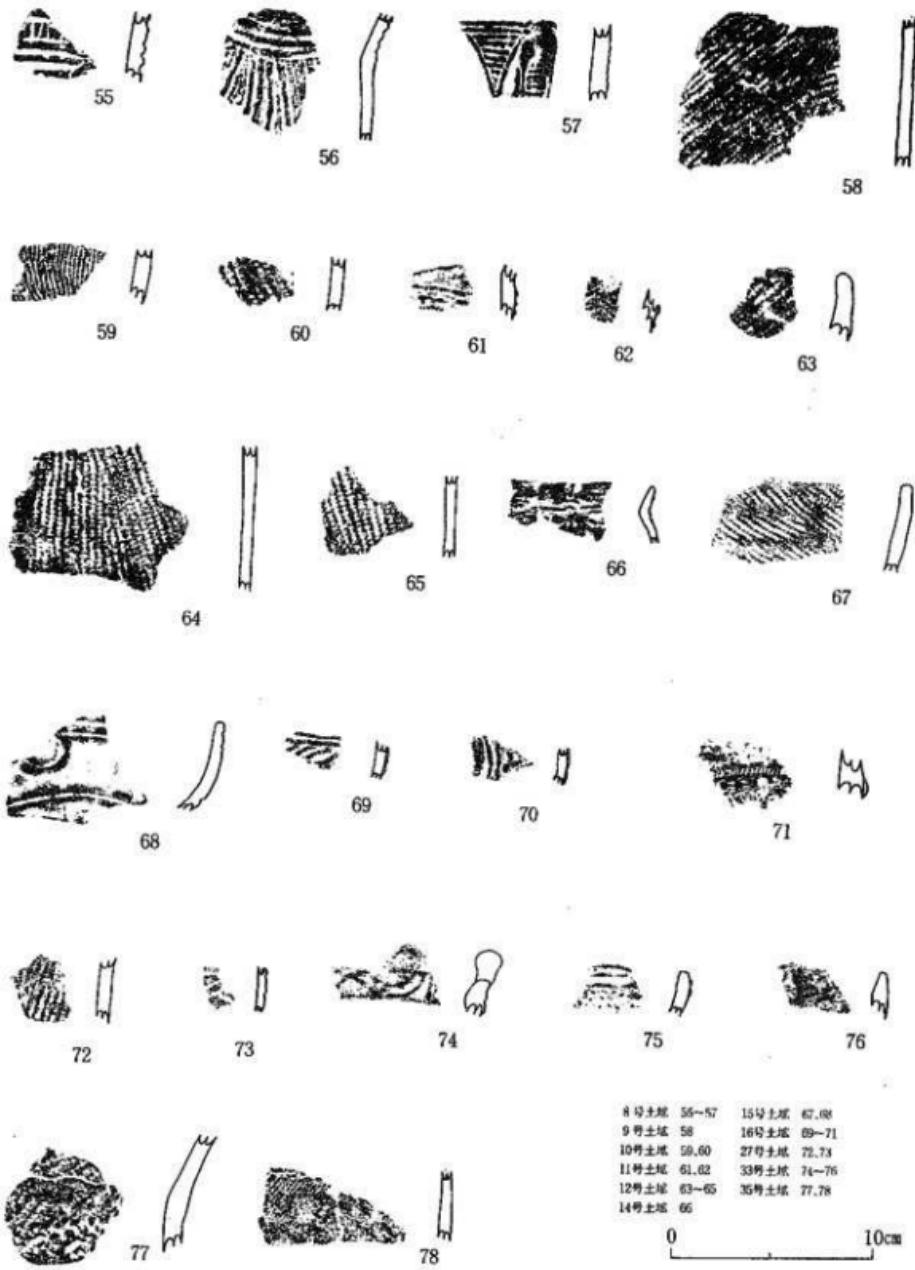
第31图 2地区出土土器



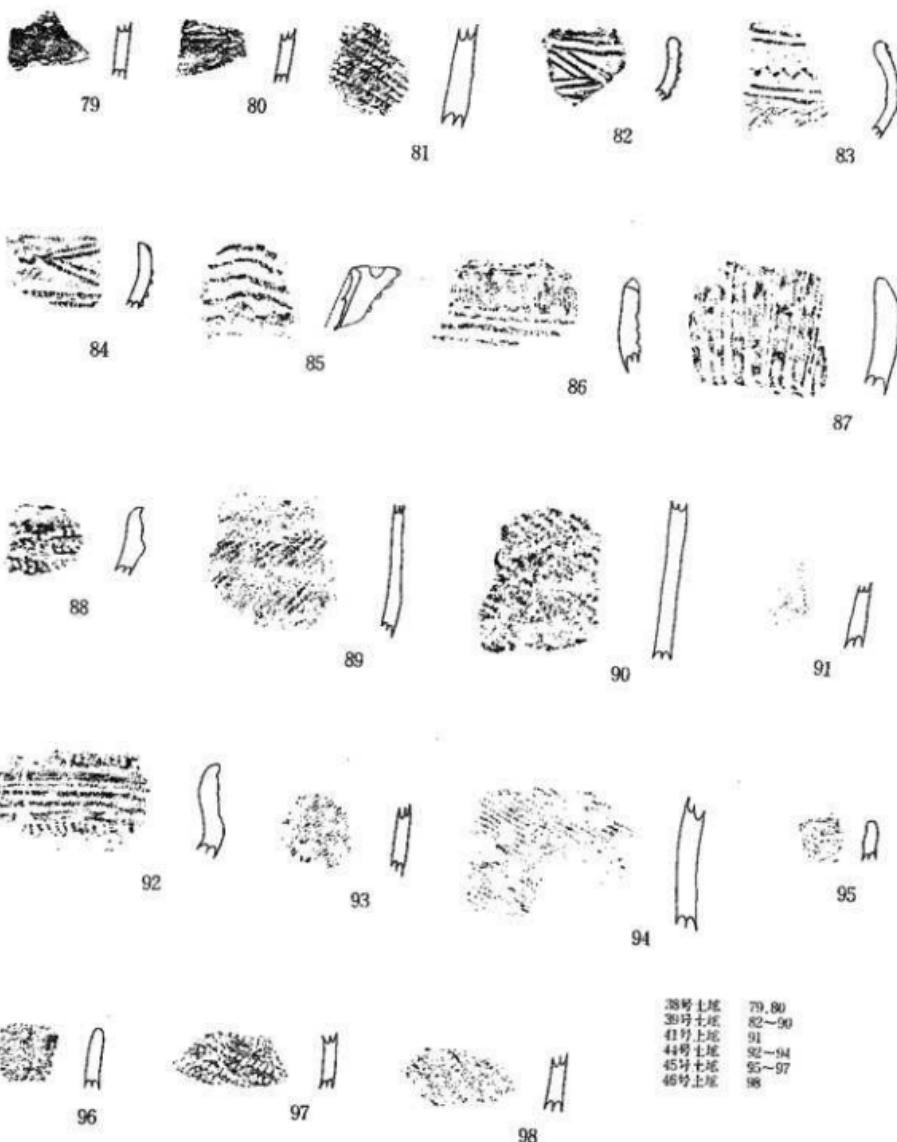


第32図 2地区出土土器



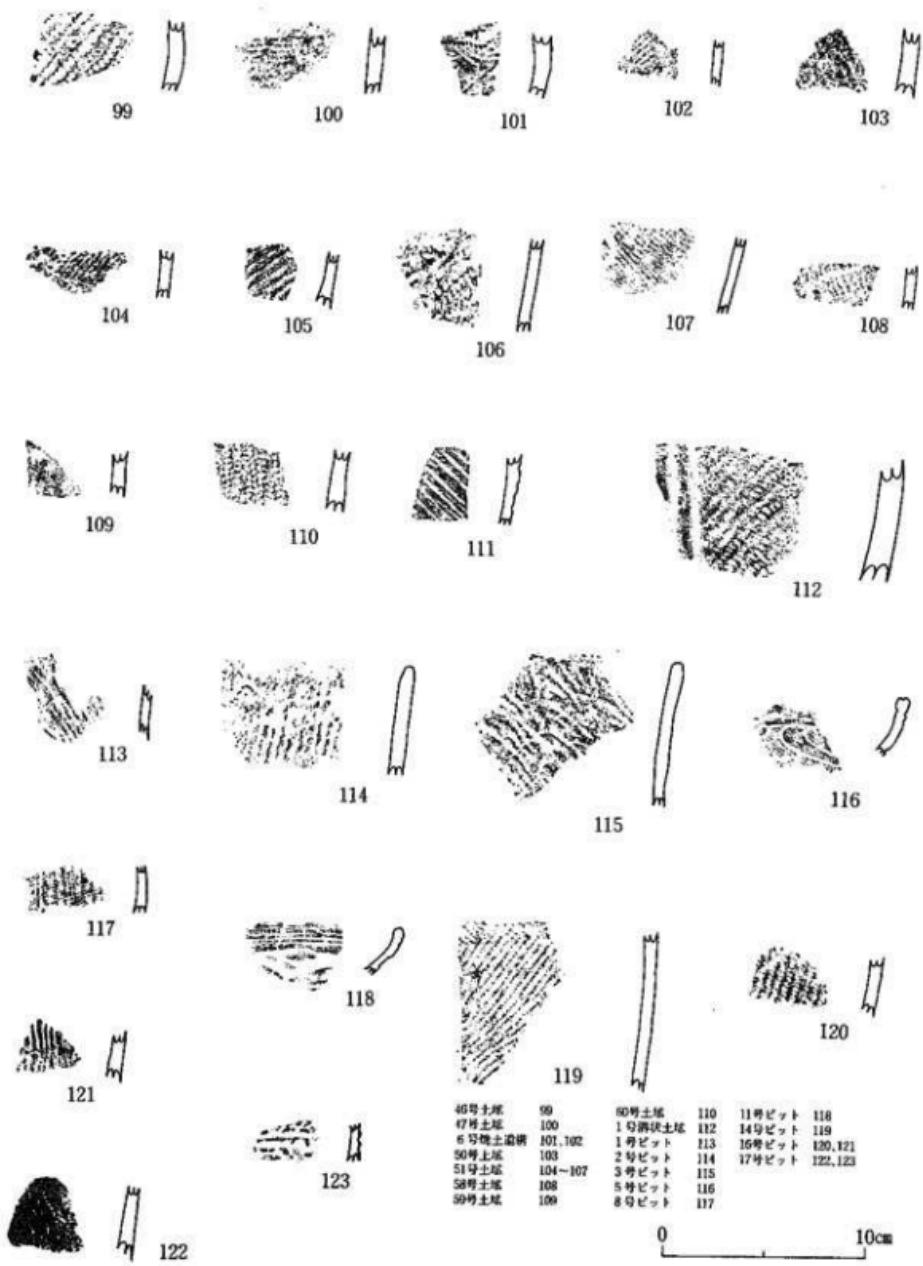


第34図 2地区出土土器

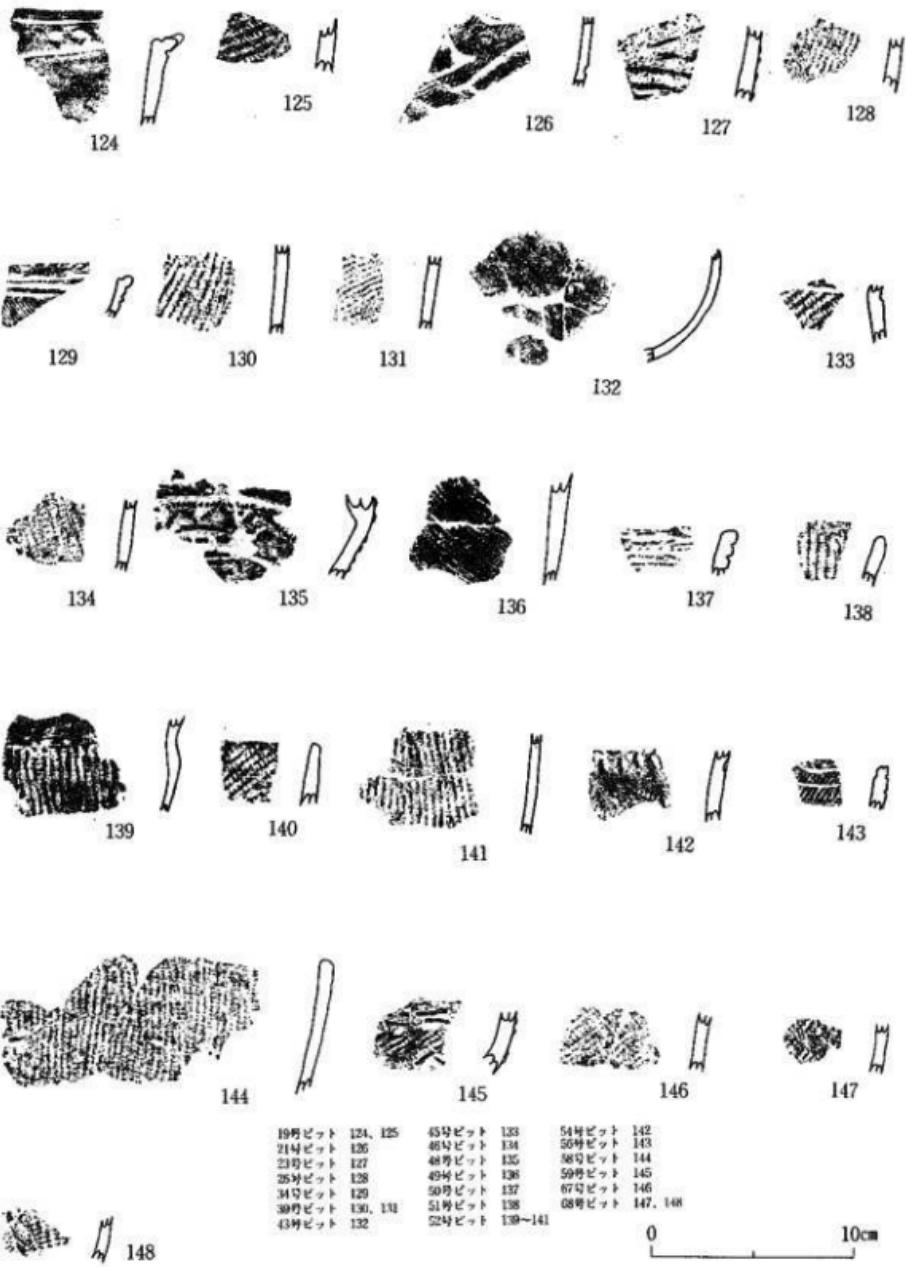


0 10cm

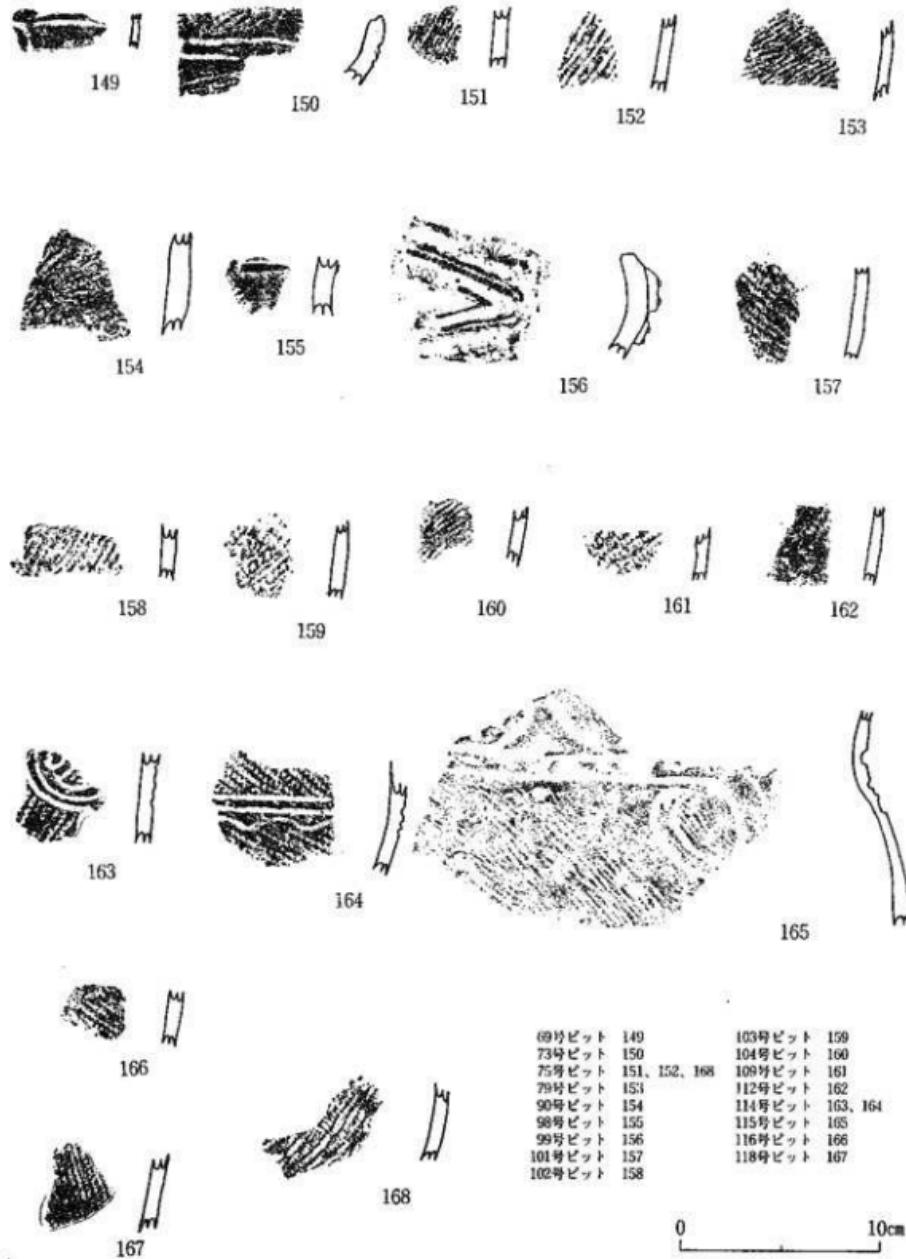
第35圖 2 地區出土土器



第36図 2地区出土土器



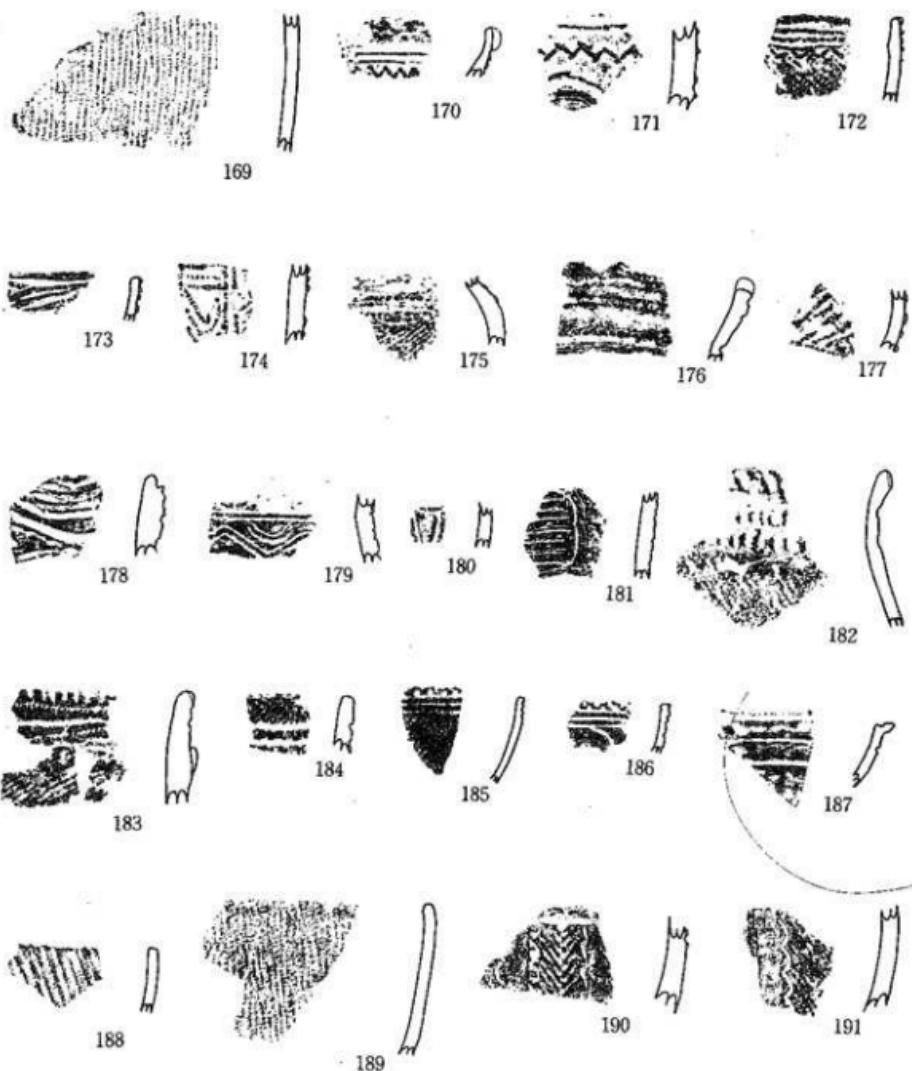
第37図 2地区出土土器



第38図 2地区出土土器

69号ピット	149	103号ピット	159
73号ピット	150	104号ピット	160
75号ピット	151, 152, 168	109号ピット	161
79号ピット	153	112号ピット	162
90号ピット	154	114号ピット	163, 164
98号ピット	155	115号ピット	165
99号ピット	156	116号ピット	166
101号ピット	157	118号ピット	167
102号ピット	158		

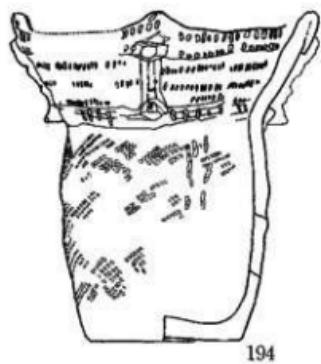
0 10cm



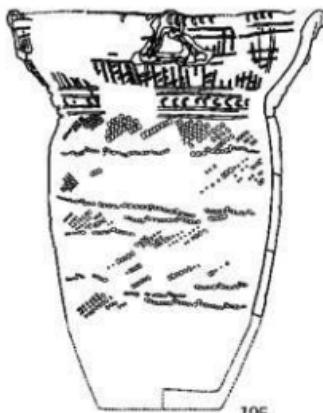
造構外 169~193

0 10cm

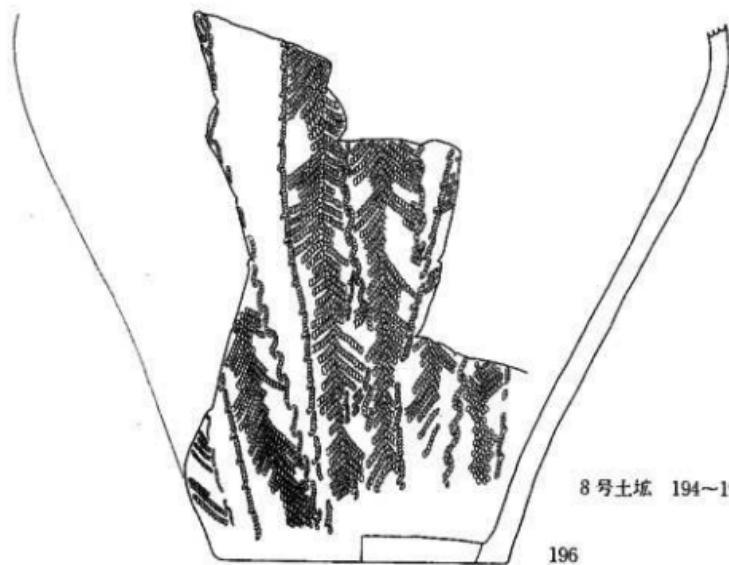
第39圖 2 地區出土土器



194



195

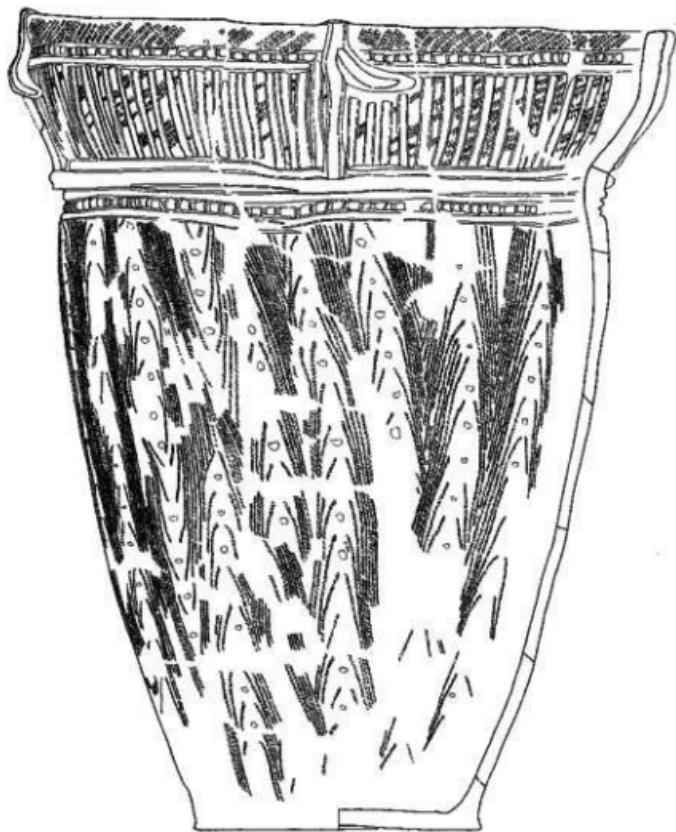


8号土器 194~196

196

0 10cm

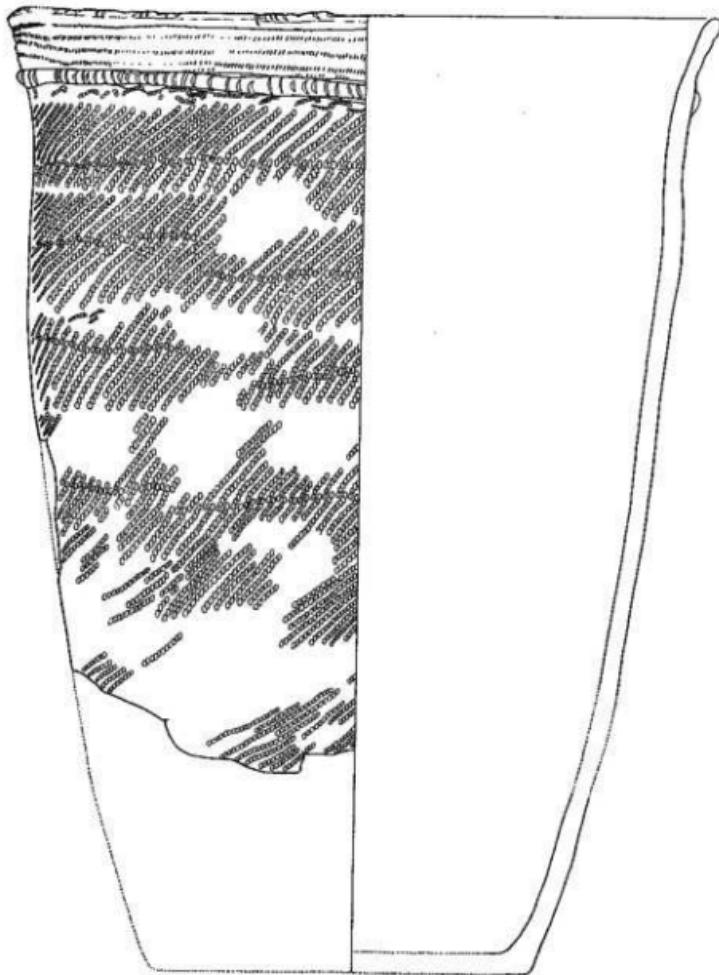
第40図 2地区出土土器



39号土器 197

0 10cm

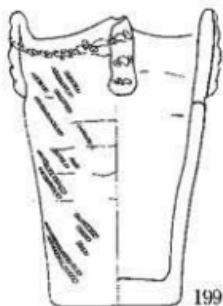
第41図 2地区出土土器



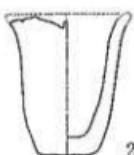
39号土器 198

0 10cm

第42図 2地区出土土器



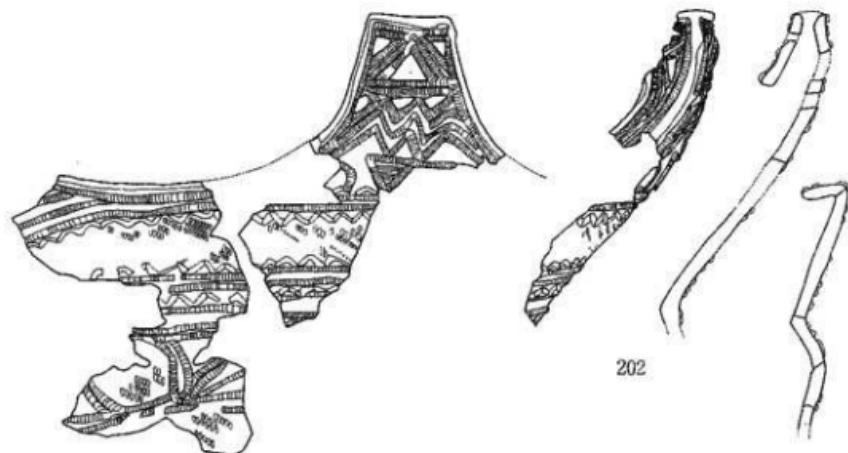
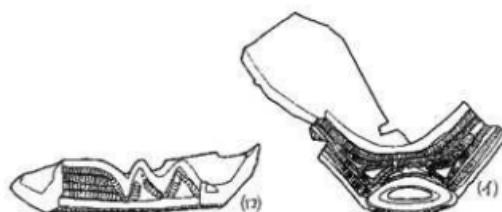
199



200



201



202

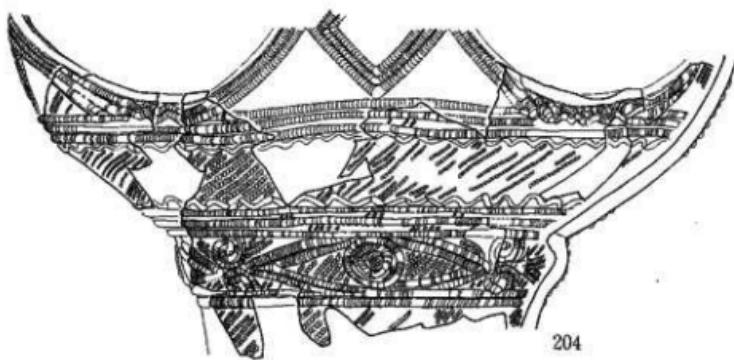
39号土壙 199
31号ピット 200
遺構外 201
6号焼土遺構 202

0 10cm

第43図 2地区出土土器



203



204

6号焼土造構 203、204

0 10cm

第44図 2地区出土土器

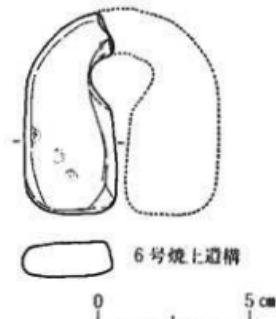
土製品 土製块状耳飾（第45図）

6号焼土遺構から出土したもので、半欠品で、焼成は良く、
第I群土器と併出していることから、縄文前期のものである。

(3) 3地区

遺構

3地区的検出遺構は、堅穴住居跡3軒、土塙9基、溝状土塙2基で、土塙からの出土遺物はなく時期は不明である。3地区的北、北西の台地端に広がりをもつと思われる住居跡については、杉林、雜木林等の問題で調査は出来なかった。



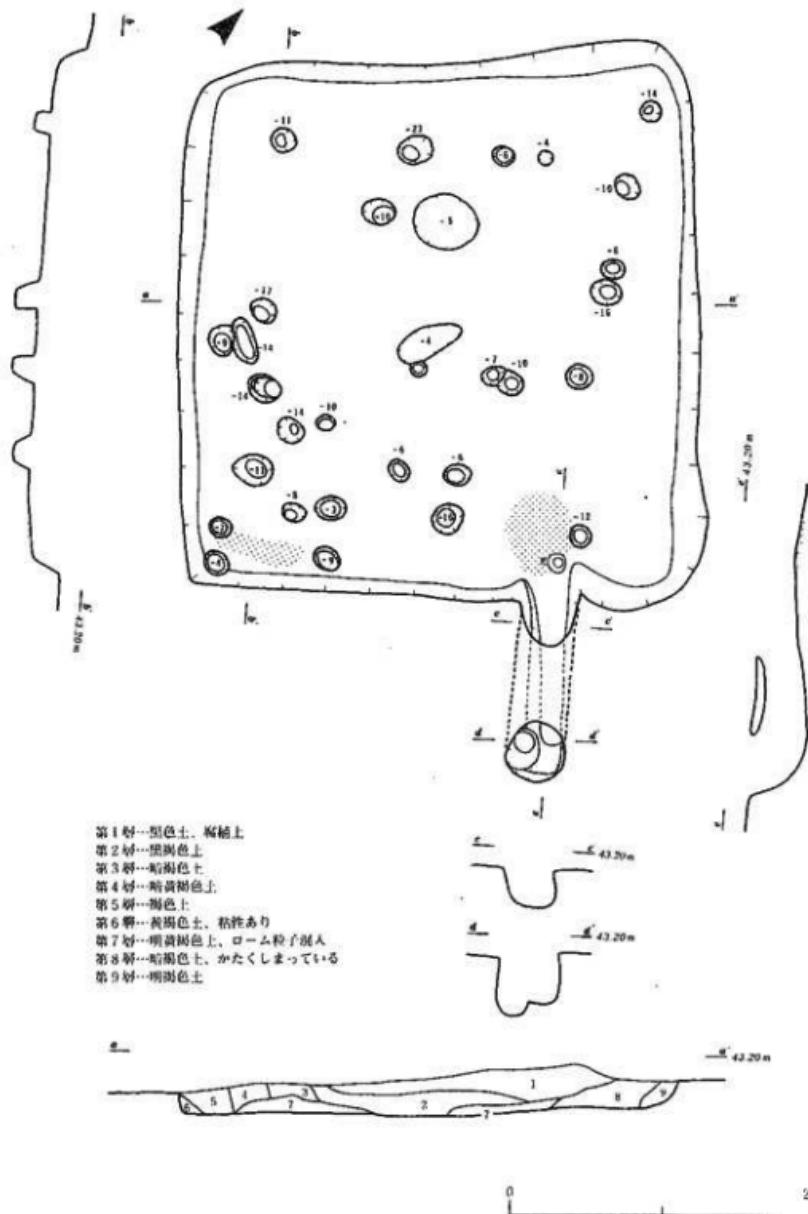
第45図 2地区出土土製品

1号住居跡（第46図）

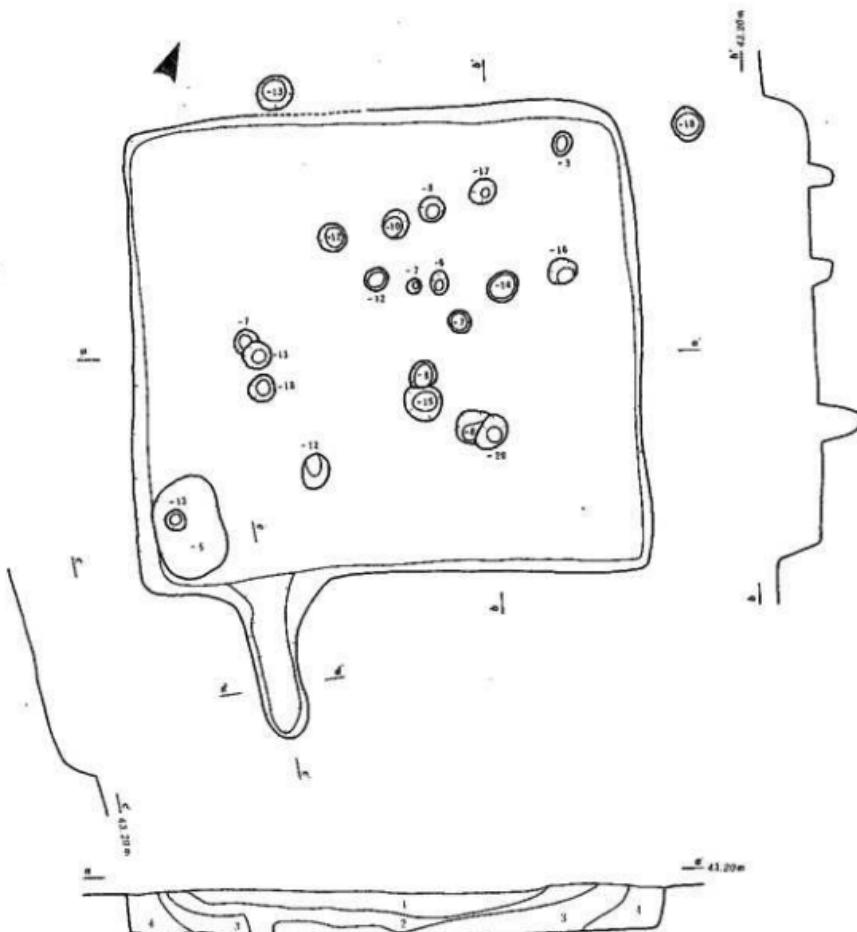
西側の最も沢寄りに位置する堅穴住居跡で、1辺が3.4mの方形を呈する。主軸はN47°W。壁はしっかりしており、垂直に近い急な立ち上がりをみせる。床は若干起伏があるが、かたくしまっている。ピットは床全体に検出されたが、大部分のものは埋土の状態、他の住居跡などとの比較から柱穴とは考えられない。ただし、中央部の浅いピット2個については、やや北寄りのピットに炭化物や焼土が多量に混入した上が入り込み、中央のピットには多量の炭化物とともに荒い砂粒が混入し底面が焼けたような状態を呈していた点などから、本遺構に付属するものと考えられる。カマドは南東壁に中央から東寄りに構築され、3軒の住居跡のうち一番しっかり残っていた。支脚として使用された赤褐色土器坏も焚き口部焼土の上にかなり火をうけた痕跡で伏せられていた（第52図6）。煙道部はトンネル状に残ってはいるものの、天井部はしっかりしたロームではなく、おそらくある程度けずりとられてしまったものと思われる。埋土には焼土の混入がみられた。そでは検出できなかつたが、前庭部の焼土上にはさらに炭化物や焼土が混在して堆積していた。また、これらの堆積物が埋土として入り込んだ状態のピットが、焼土の下から検出されている。南隅の焼土は埋土上面から確認されていたものだが、埋土には薄く焼土粒子が混入する程度である。また、北隅に床面から若干浮いて小形の土師器甕の破片が散在した状態で出土した（第52図7）。

2号住居跡（第47図）

西側の1号住居跡よりもやや南東に位置する堅穴住居跡で、3.2m × 3mの若干長方形がかたったプランを呈する。主軸はN28°Wを示す。壁はしっかりとはほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約30cmを測る。北西壁の一部を後世の擾乱でけずりとられている。床はかたくしまり、平坦である。ピットは中央付近に集中して検出されてはいるが、本遺構に付属するものとは考え難い。カマドは南東壁中央から南寄りに構築されているが、焼土等火を焚いた痕跡はみられず、そこでや天井部も崩れ、残っていない。遺物も出土していない。



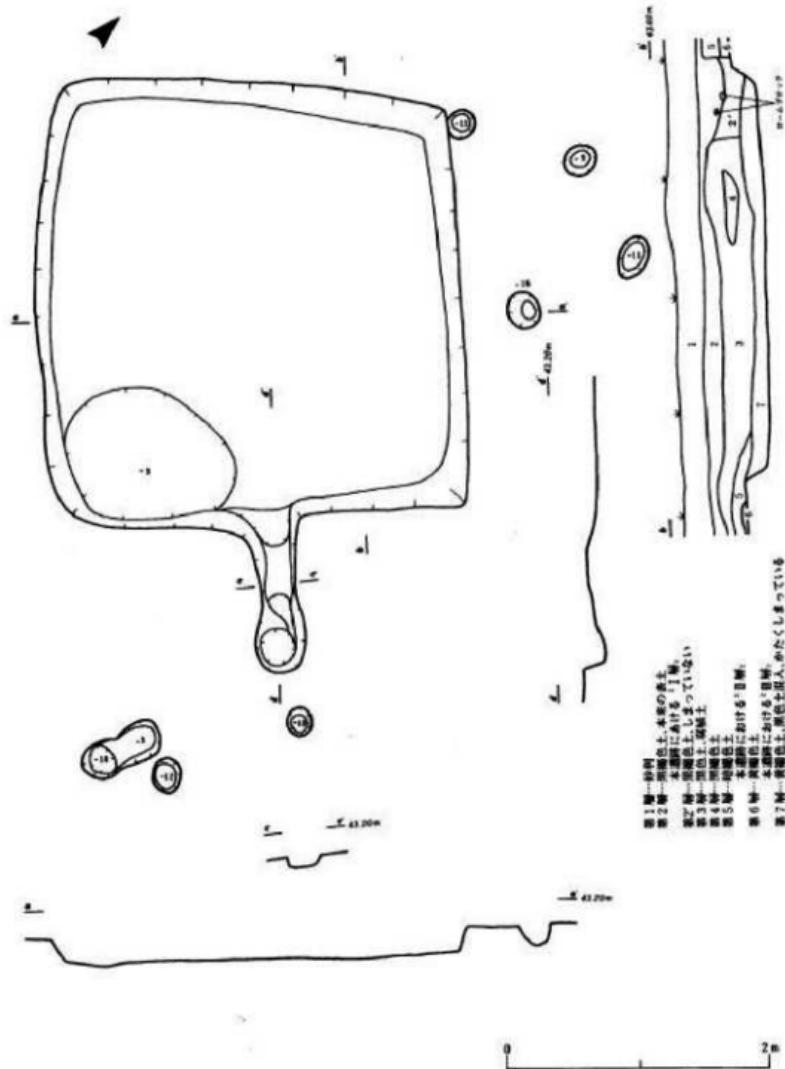
第46図 1号住居跡



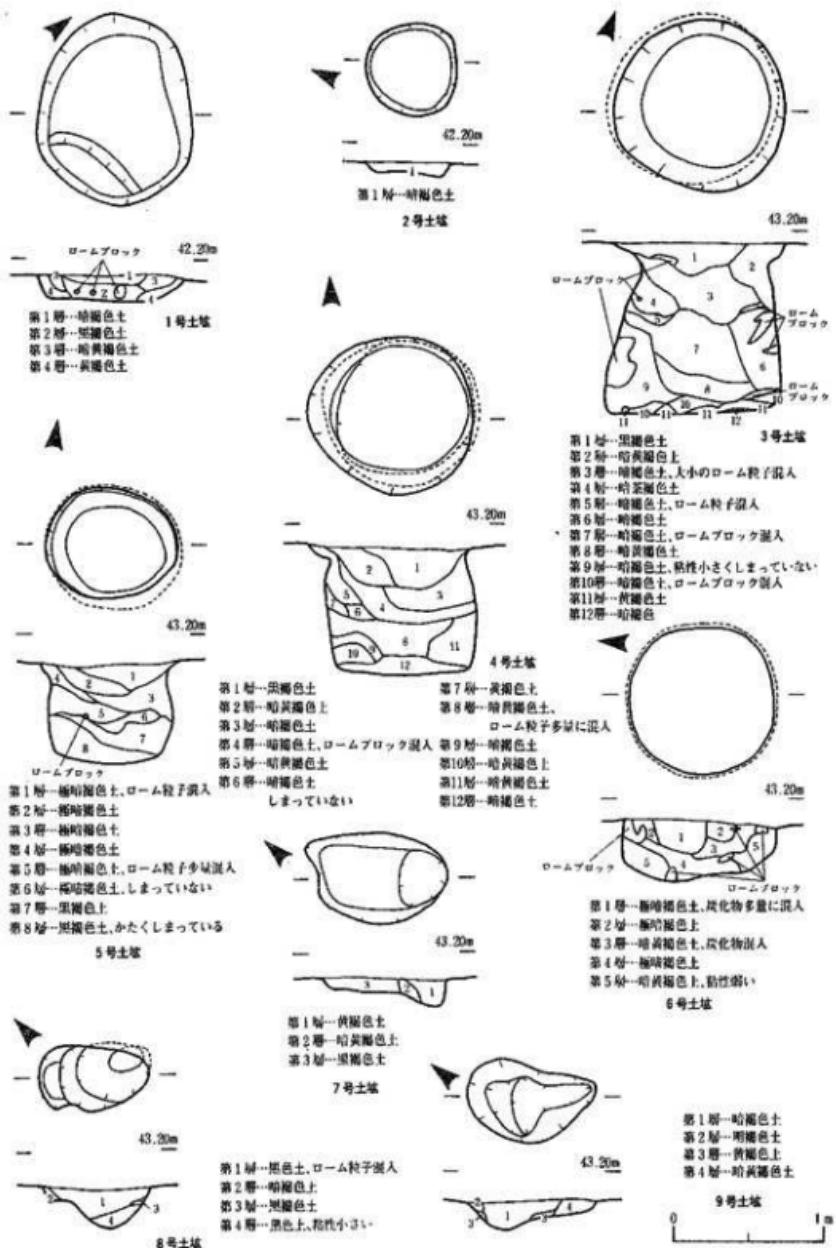
第1層…褐色土、腐植土
 第2層…黒褐色土、腐植土
 第3層…暗黃褐色土、炭化物・ローム粒子混入
 第4層…暗褐色土、粘性小さく



第47図 2号住居跡



第48図 3号住居跡

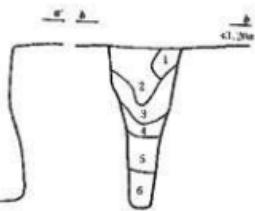
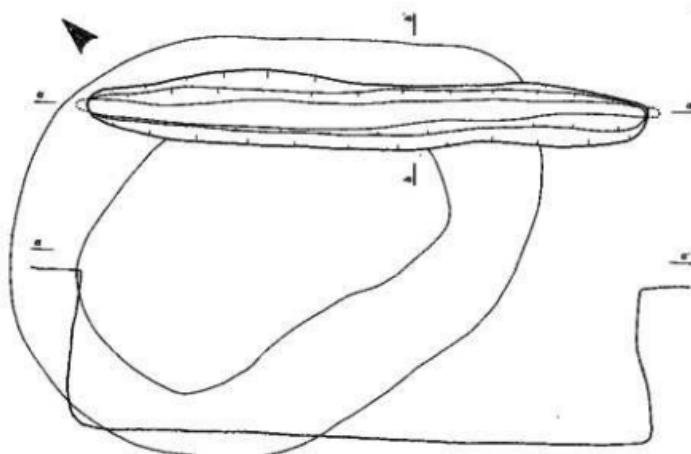


第49図 3地区土壤



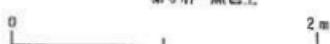
1号溝状土壠

第1層…暗褐色土
第2層…暗褐色土
第3層…暗褐色土
第4層…暗褐色土
第5層…黃褐色土
第6層…黃褐色土
第7層…暗褐色土



2号溝状土壠

第1層…黒褐色土
第2層…褐色土
第3層…暗褐色土
第4層…暗黃褐色土
第5層…黃褐色土
第6層…黑色土



第50図 溝状土壠

3号住居跡（第48図）

東側に他の2軒と少し離れて位置する竪穴住居跡で、1辺が3mの方形を呈する。主軸はN47°Wを示す。壁はしっかりと立ち上がり、床は若干起伏がみられるがかたくしまっている。ピットは住居跡内では検出できず、屋外のピットも柱穴としてはとらえ難い。カマドは、南東壁中央に構築されているが、やはり、そで、天井部は残存しない。また、南隅から少し中央寄りの埋土中に床面から少し浮いて、焼土や炭化物が顕著にみられる一隅があったが、床面で火を焚いた跡は確認できなかった。遺物は出土していない。

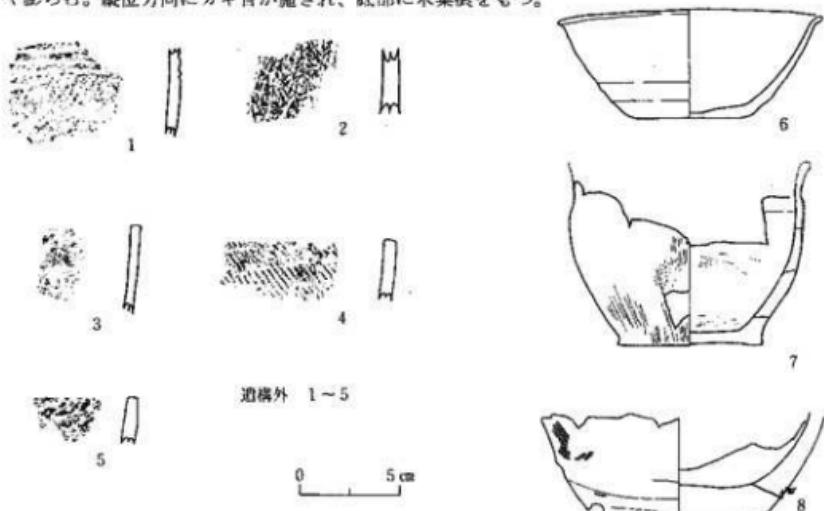
遺 物

Ⅲ群土器（第51図1、2）

1は平行沈線文を施し、胴部はLR単節斜縦文（横位方向回転）である。2は網目状撚糸文の施文である。

平安時代の土器（第52図6、7）

6は赤褐色土器壺で、口径約13cm、器高約5.5cmを測る。底部切り離しは回転糸切り、無調整である。カマド支脚として使用されていた為に剥落が著しい。7は口縁部欠損の小形土器壺で、推定口径12cm、推定器高9cmを測る。ロクロは使用されていない。口縁部に稜が作り出され、胴部がやや膨らむ。縦位方向にカキ目が施され、底部に木葉痕をもつ。



第51図 3地区出土土器

1号住居跡、カマド支脚
1号住居跡
トレンチV

0 5 cm

第52図 3地区出土土器

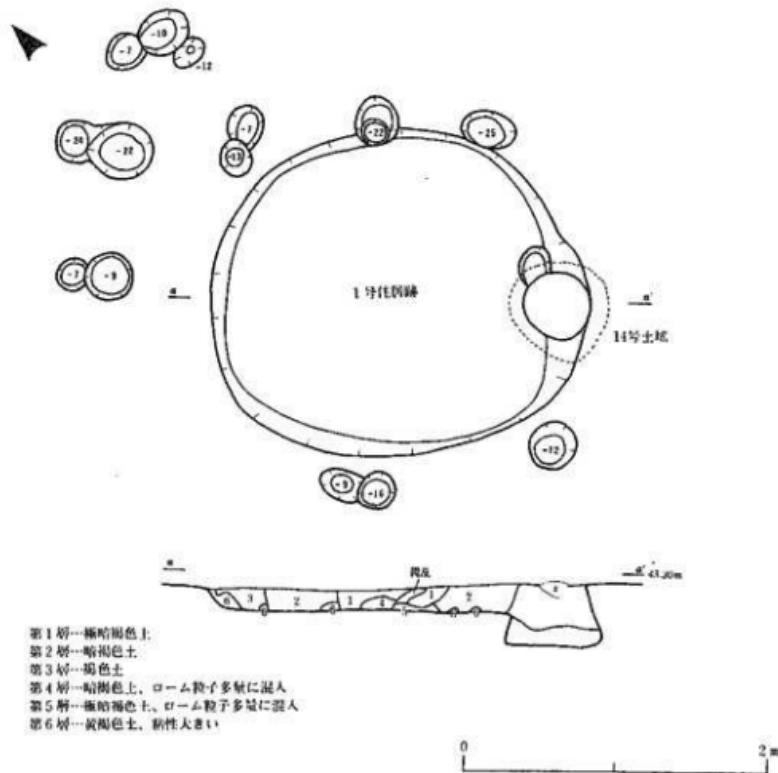
(4) 4 地区

遺構

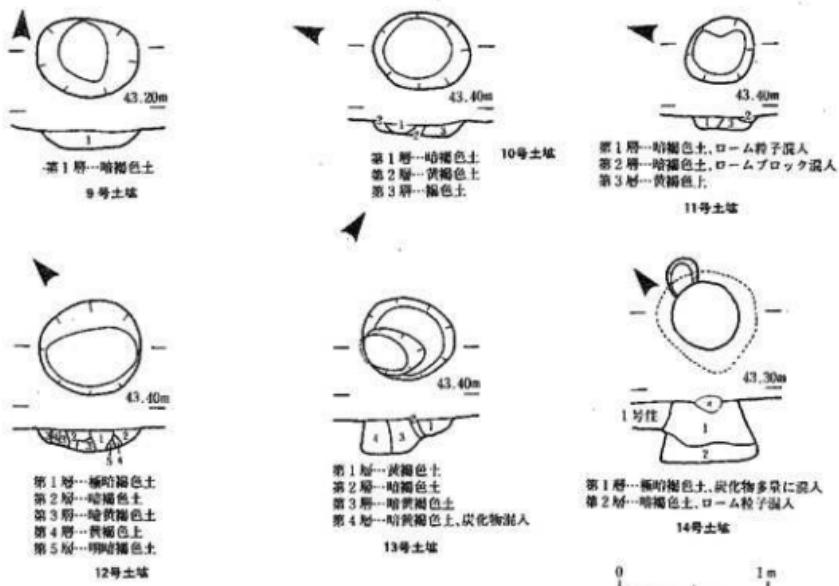
4地区の検出遺構は堅穴住居跡1軒、土塙14基、焼土遺構2ヶ所で、住居跡内、焼土遺構付近から遺物が出土し、土塙からの出土遺物はない。

1号住居跡（第53図）

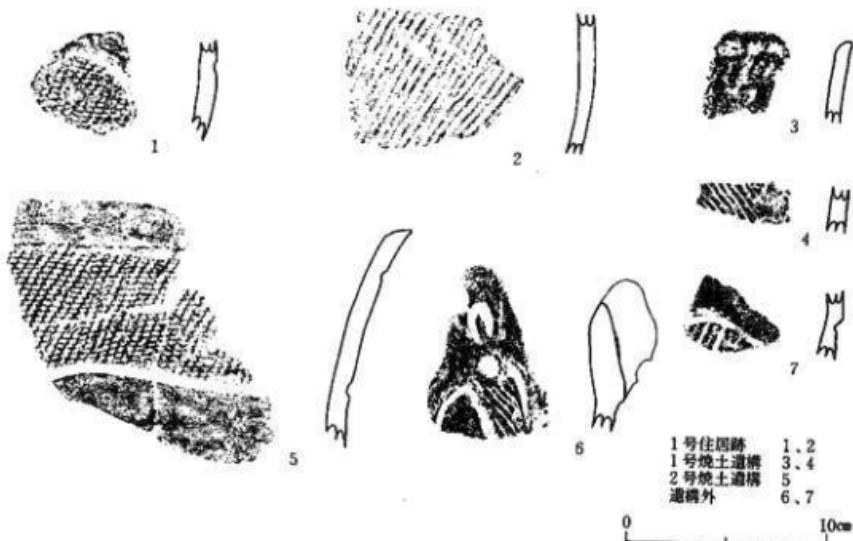
北側の沢に面して構築された堅穴住居跡で、 $2.4m \times 2m$ のやや椭円形のプランを呈する。南側の壁を14号土塙によって切られている。長軸方向はN $45^{\circ}W$ を示す。壁は緩く立ち上がり、床は平坦でしまっている。ピットは住居跡内部にはみられず、壁にそって外側に検出された。おそらく柱穴になるものと思われる。焼土は検出できなかった。



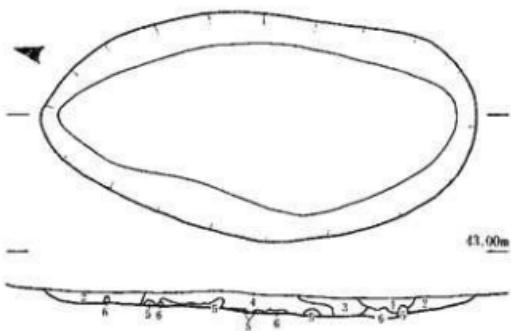
第53図 1号住居跡



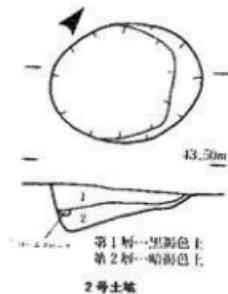
第55図 4地区土坡



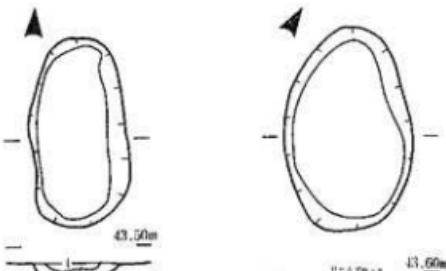
第56図 4地区出土土器



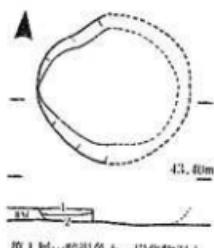
第1刷…暗茶褐色土
第2刷…暗黃褐色土
第3刷…暗褐色土
第4刷…黑褐色土
第5刷…暗黃褐色土
第6刷…黃褐色土



第1刷…黒褐色土
第2刷…暗褐色土
2号土壤



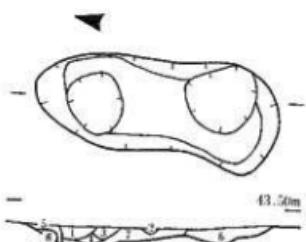
第1刷…黃褐色土
第2刷…黒褐色土
3号土壤



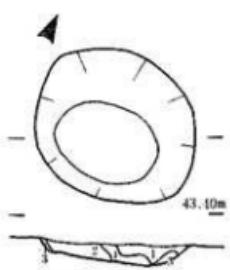
第1刷…暗褐色土、炭化物混入
第2刷…暗黃褐色土
5号土壤



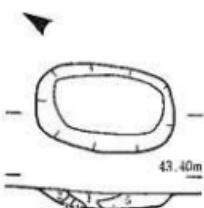
第1刷…暗褐色土
第2刷…黃褐色土
第3刷…明褐色土
第4刷…黒褐色土
第5刷…黃褐色土
第6刷…黃褐色土、しまってない
4号土壤



第1刷…暗黃褐色土
第2刷…明褐色土
第3刷…黒褐色土
第4刷…暗褐色土上、バサバサしている
第5刷…暗褐色土上
第6刷…暗褐色土上、粘性大きい
第7刷…黃褐色土
第8刷…明褐色土
6号土壤



第1刷…黒褐色土
第2刷…明褐色土
第3刷…黃褐色土、粘性大きい
第4刷…黃褐色土
7号土壤



第1刷…暗褐色土
第2刷…暗黃褐色土
第3刷…黃褐色土
第4刷…暗褐色土、かたくしまっている
第5刷…黃褐色土、粘性大きい
8号土壤



第54図 4地区土壤

遺物

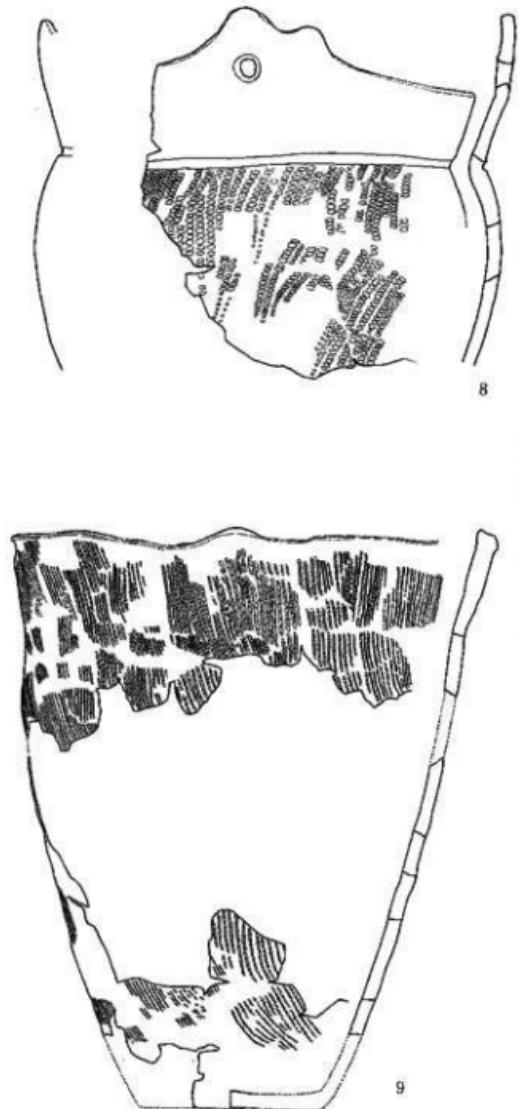
II群土器（第56図1、2、5、7）

縄文を施した後に、沈線で区画して磨消しているものである。2はR L 単節斜縄文（横位方向回転）、他はR L 単節斜縄文（縦位方向回転）である。

III群土器（第56図6、第57図8、9）

6は把手部である。沈線及び円文が旋され、幾何学的な文様構成となるものであろう。地文は燃糸文の施文である。

9は口径約24cm、推定器高約29cmを測る。3個の小突起をもち、地文は全面に燃糸文を施文する。



造構外出上 8、9



第57図 4地区出土土器

石器、石製品

石鐵（第58図1～4）

有茎、無茎のものがあり、3の基部両面にアスファルト状の付着物がみられる。

石匙（第58図5～12）

縦型のものが多い、12は横型で、つまみ部にアスファルト状の付着物がみられる。11は両面加工が施され、つまみ部も大きく、石匙に分類されるかはっきりしない。

石槍（第58図14～16）

断面の厚いもの薄いものがあり、14、15はポイントである。

ヘラ状石器（第58図13、17～21、第59図22～29）

片面、両面加工のものと、両面加工の中には主要剝離面の側縁部に加工するものなどがある。片面加工のものは搔器、削器としての機能が考えられる（17、25）。

磨製石斧（第59図30～33）

欠損部が多い。30は刃部の一部が欠損するが、ほぼ完形である。

石錐（第60図34、35）

34は河原石の両端を打ち欠いたもので、35は一端を大きく打ち欠き、一端は自然の凹部を利用したものである。

凹石（第60図36～41）

39は両面に、他は片面に1～3の凹部をもつ。

磨石・敲石（第60図42～47、第61図48～51）

河原石を利用したもので、石の表裏面は磨滅し、側面は敲打痕のあるものが多い。

石皿状石器（第60図52～55）

全て欠損しているが、磨石、敲石と対で使用されたものと思われる。中央部は磨滅し、くぼんでいる。石皿的機能が考えられる。

石皿（第62図56）

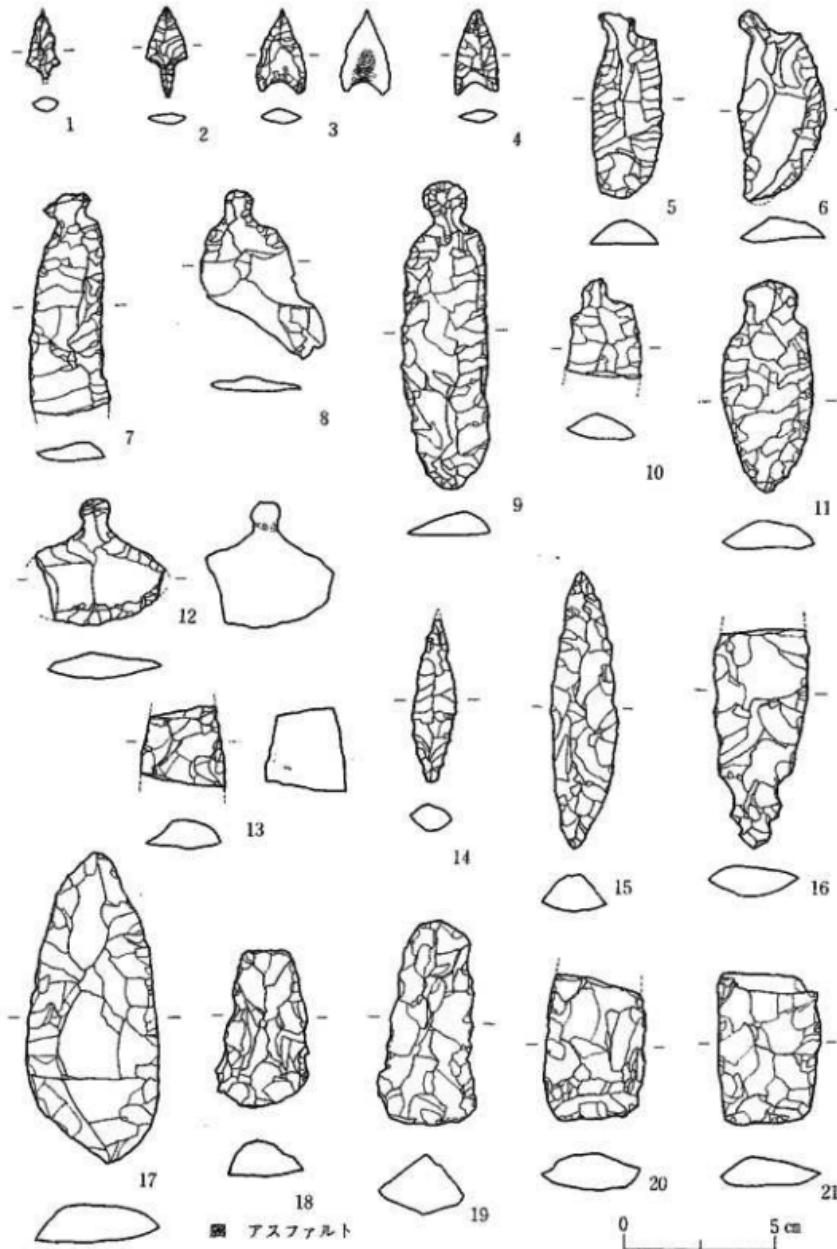
欠損品であるが、縁取りのあるしっかりしたものである。

その他の石器（第62図57）

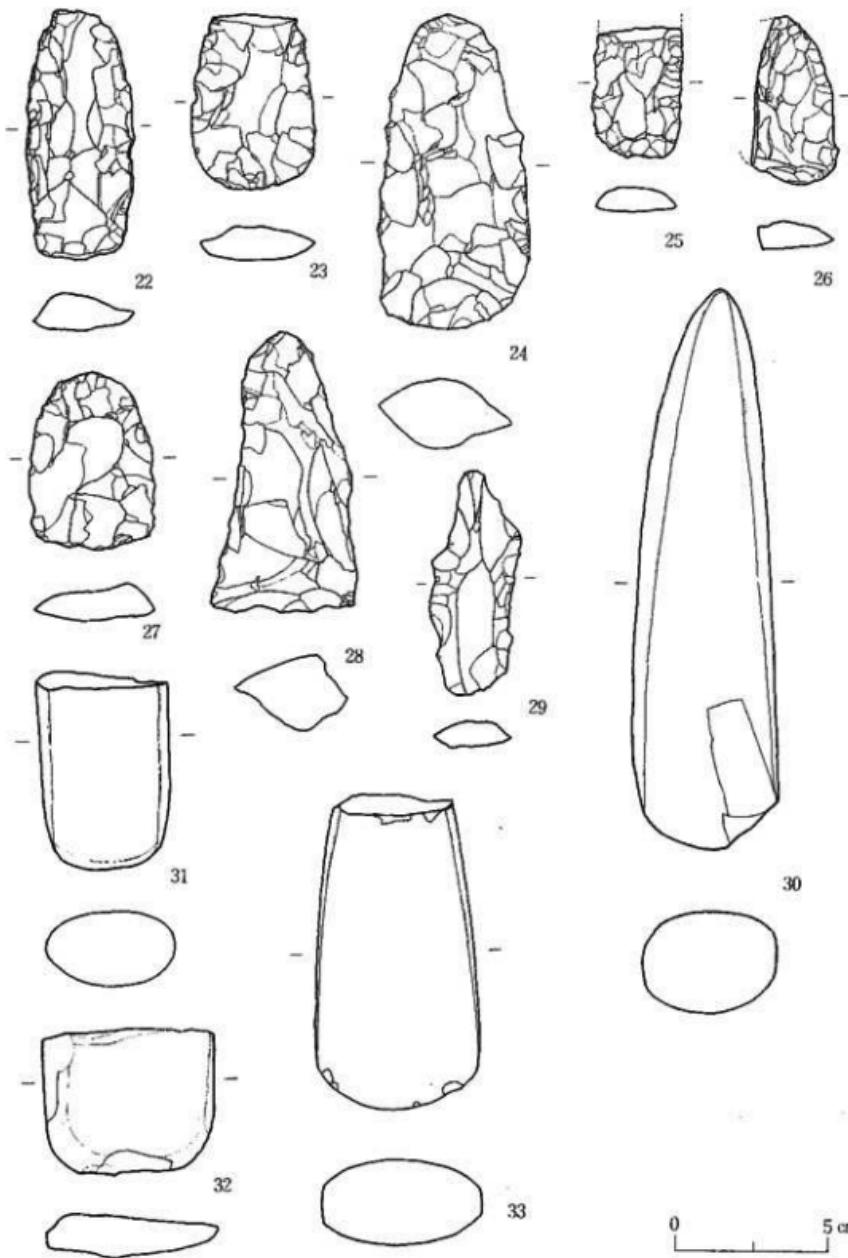
両面及び側面を磨ってある石器で、縦平のものである。

石製品（第62図58、59）

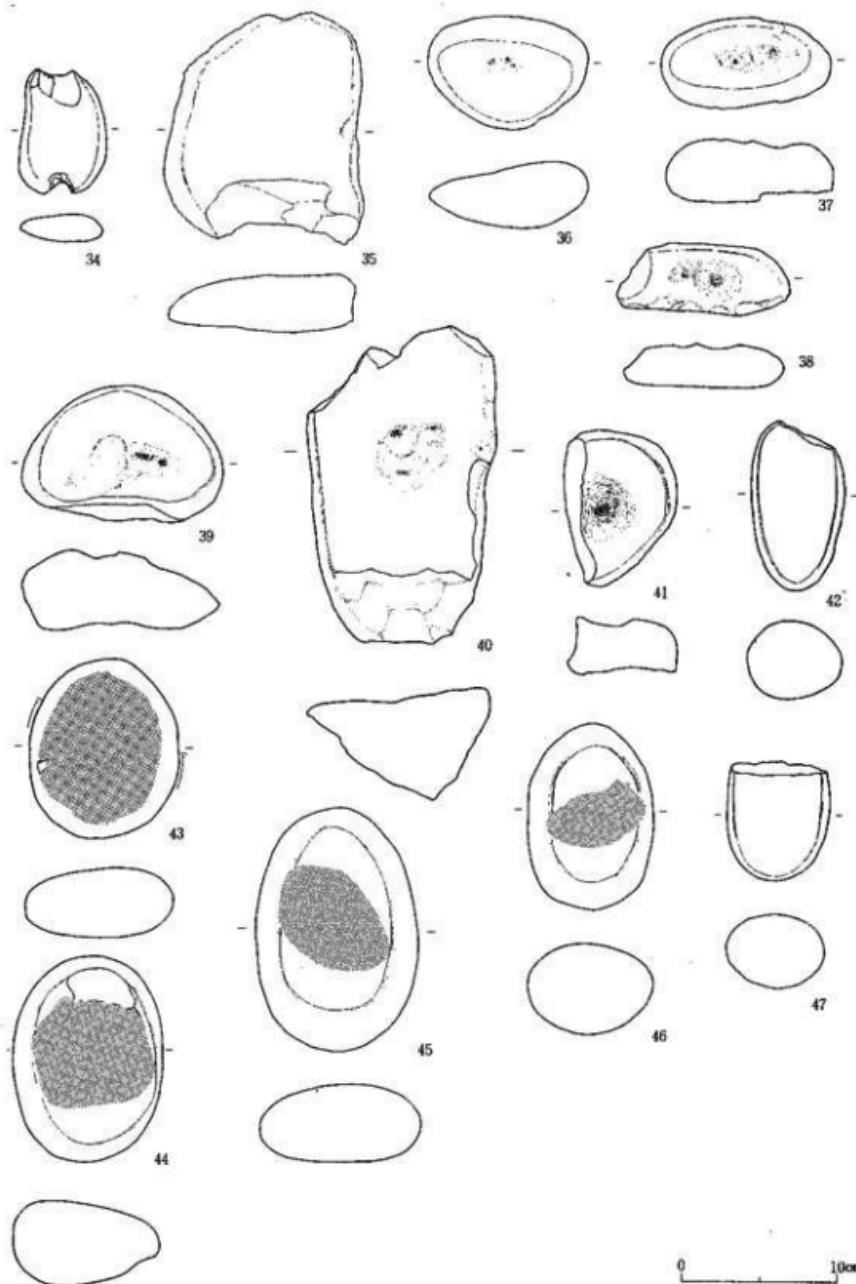
58は緑色凝灰岩製の柔らかいもので両面から孔を穿っているが、貫通はしていない。59は表採の勾玉で両面から穿孔され、全体に研磨され光沢がある。メノウ質のものである。



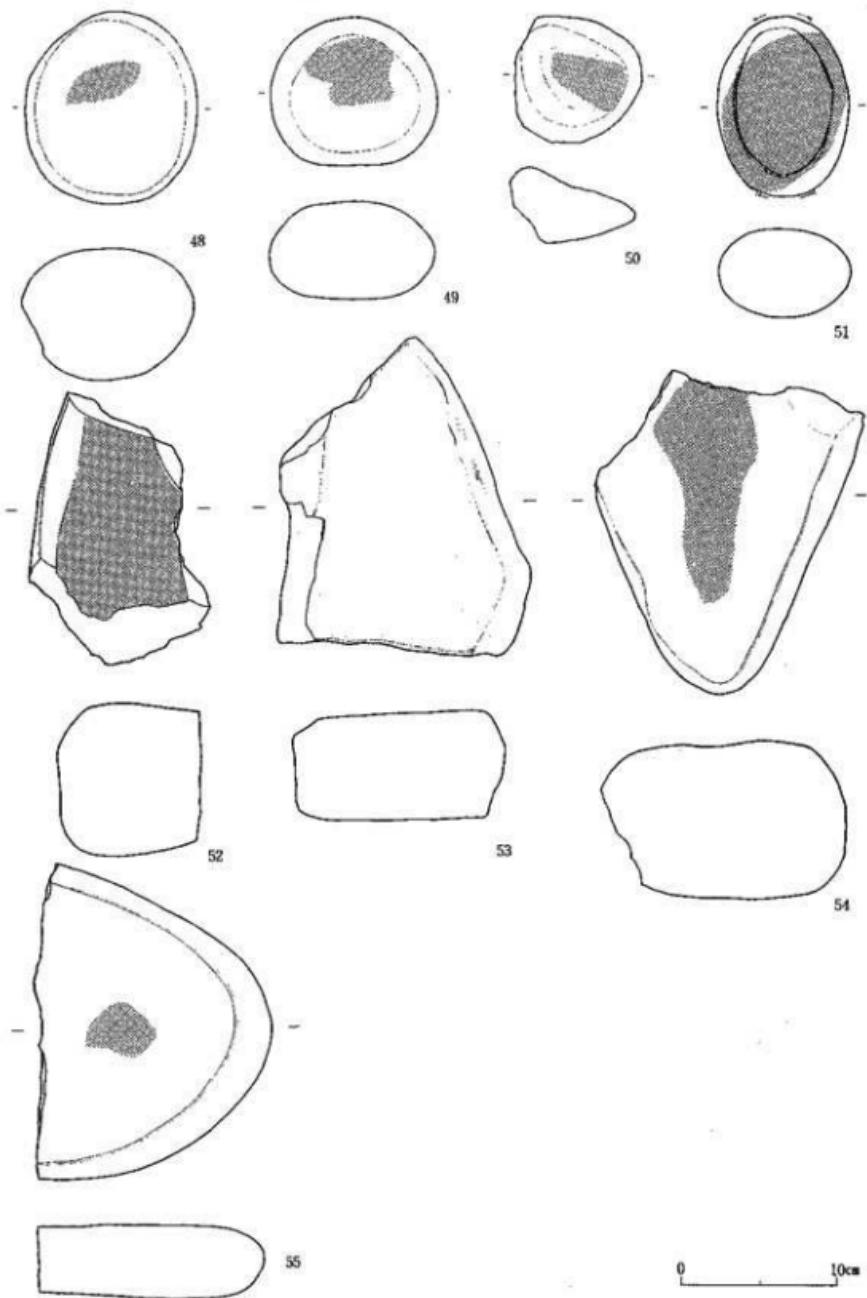
第58図 出土石器



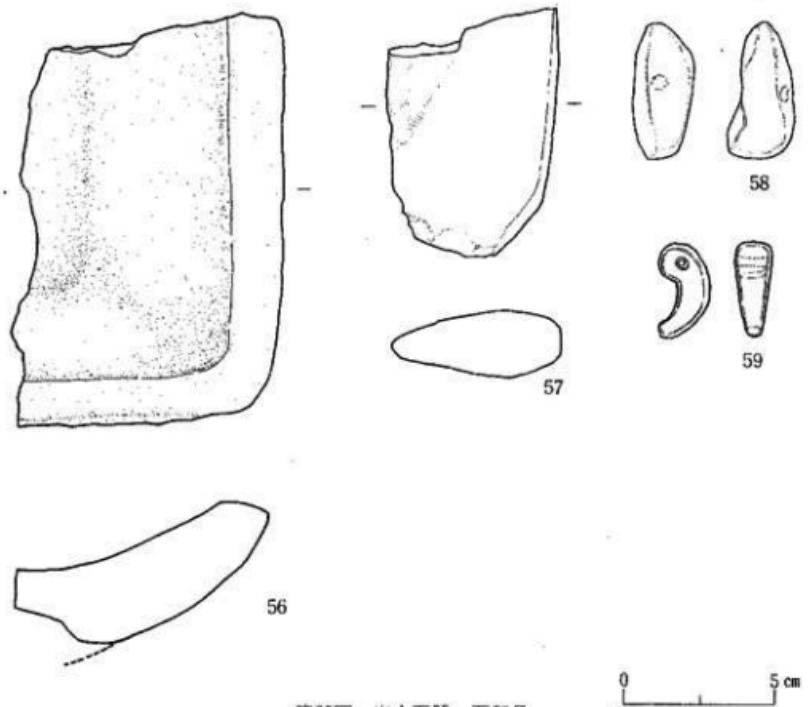
第59図 出土土器



第60図 出土石器



第61図 出土石器



第62図 出土石器、石製品

繩文時代石器一覽表

第V章 まとめ

遺構

1地区で検出された遺構は、堅穴住居跡1軒、土塙6基、焼土遺構16ヶ所である。これらの遺構の中で時期の明らかなものは5号土塙で、出土遺物から縄文時代後期のものである。その他の遺構からは時期の判別できる遺物は出土していない。1号住居跡は、しっかりした作りの住居跡で柱穴の深さに差がみられるが規則的に並ぶと考えられる(第11図)。

2地区で検出された遺構は、堅穴住居跡4軒、土塙61基(袋状土塙10基)、溝状土塙2基、焼土遺構8ヶ所である。1号、2号、4号住居跡は楕円形のプランを呈するもので、(3号住居跡は1号住居跡との重複でプランは不明)不確定な遺物出土状態(攪乱等による)で断言はできないが、周辺の遺構等のあり方から縄文時代前期の住居跡と考えられる。ただ、住居跡内に柱ではなく、点在する焼土遺構(3号、4号、7号、8号)等の関連や、袋状土塙との配置については、はっきりしない。土塙とした中で、底径が口径より大きく壁が外側へ掘り込まれている形のいわゆる袋状を呈するものが10基検出されている(第21図~第29図)。特に本遺跡における形態的な特徴として、口縁部が広くテラス部が大きい事、口縁部が広く短かいつまり頸部のくびれがあまり顕著でない事などがあげられる。また口縁部の広さの割にあまり深くではなく、1mを越えるものは39号土塙1基のみである。また上屋構築を考える上で重要なきめ手となっている周縁部のピットのあるものが6基(2号、8号、16号、27号、33号、39号)検出されている。しかし、配列はあまりよいとはいえない。埋土については、共通してみられる特徴は、底面周辺の壁ぎわに黄褐色土の堆積があり、これは人為的な土器の廃棄の認められる39号土塙を除いては、量の多少にかかわらず類似している点である。おそらく、頸部のくびれ部や胸部周縁のロームが剥落したものと思われる。8号土塙では、こうした黄褐色土の上に焼土が流れ込み土層中程に堆積している。埋土全体にも焼土や炭化物の混入が多くみられ、底面直上にもわずかながら堆積する。焼土が埋土中に堆積しているものとして他に45号土塙があげられる。焼土はみられないものの、炭化物の混入が顕著なものでは、39号土塙があり、胴下半部や投棄された土器の中にも多量の炭化物が認められた。比較的多量の遺物が出土している袋状土塙は、6号、8号、39号があげられるがすべて坪上からである。6号土塙では晩期の土器片が、8号土塙は前期の土器片が上層から中間にかけて出土し、このうちの1片は6号土塙上遺構附近から出土した土器と接合できた。39号土塙の場合は、埋土の堆積状態もそうであるが他の袋状土塙と多少異なり、上層からの前期土器片の他に人為的に廃棄された上層の上に2個体、同時に束てられ壁ぎわに転がり落ちたとみられる土器が1個体、合計3個体の土器が出土している。このうち、土塙断面図左側の土器(第41図)の中には灰白色の粘土が口縁部にまでつまっていた。これは廃棄する時すでに土

器の中につめられていたものと思われる。

また位置的にはこの39号上塙が、住居跡の可能性の高い、8号焼土遺構のすぐ北東に、45号下塙が4号住居跡内にあるものの、本遺跡においては、明確に住居跡との関連が考えられる袋状土塙はみられない。

溝状土塙は2地区、3地区で2基づつ確認された、いわゆるTピットと呼ばれるもので、縄文時代中期の土器片を出土した2地区1号を除いて長軸方向はN40°~60°Wである。

3地区で検出された遺構は、竪穴住居跡3軒、上塙9基、溝状土塙2基である。出土遺物のあるのは1号住居跡のみで、しかも、いわゆる赤褐色土器といわれる壊と土器破片で、住居跡の年代は明確でない。下塙C遺跡で確認された住居跡と比較すると、方向、規模、カマドの位置、柱穴のあり方等、共通性があり、下塙C遺跡と3地区は距離的に近く、関連性をうかがわせる。下塙C遺跡は出土遺物から9世紀後半頃とされ、3地区は10世紀以降と考えられる。住居跡の広がりを確認するため東側に5本のトレンチを設定し調査したが検出されなかった。

4地区で検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、土塙14基、焼土遺構2ヶ所である。住居跡は小さく梢円形を呈し、炉はない。出土遺物から縄文時代中期末葉（大木10式期）のもので、下塙B遺跡（縄文中期末）の住居跡のようすに小形である。

以上のように、下塙D遺跡は平坦な広い台地の割りに住居跡が少なく、台地を利用した時代は旧石器時代、縄文時代（前期～晩期）、平安時代であり、各々、占居する場所は異なる他、短期間で台地の利用を終っている。このことは、標高約40m前後の末戸台地の中にそれぞれ、中心的（本拠地）遺跡の存在を想定できるものである。

自然的環境なども含め、居住地選定の問題等と関連するものであろう。

下塙D遺跡の周辺遺跡編年表

旧石器時代	下塙D遺跡	
	草創期 早期	
縄文時代	前期	坂ノ上B遺跡 下塙D遺跡
	中期	下塙A遺跡 下塙B遺跡
	後期	坂ノ上A遺跡 坂ノ下遺跡（小阿地23遺跡）
弥生時代	晩期	地方遺跡 下塙D遺跡
		地蔵田遺跡（地蔵台遺跡）
古代		小阿地古墳群
		下塙C遺跡 下塙D遺跡

遺物

I 群土器について

I 群の土器は、縄文時代前期末葉から中期の過渡期の上器である。これらを大別して a 項～f 項に分けた。

- a 項 細い粘土組貼り付けによる細隆線文で施文するもの。
- b 項 細隆線文十半截竹管状工具による爪形文（c 型爪形文）を施すもの。
- c 項 半截竹管状工具内面で、沈線文を施文するもの。
- d 項 口唇、縁部に撫糸圧痕、単軸絡体圧痕などを施文するもの。
- e 項 半截竹管状工具内面を押し引いた、半隆起線文で文様構成するもの。
- f 項 a～e 項以外の上器。

これらの土器は層位的に調査することはできなかったが、2 地区 8 号土括（袋状土括）から第40回 194～196、39 号土括（袋状土括）から第41回 197、第42回 198、第43回 199、第6 号埴輪上遺構から第43回 202、第44回 203、204 の上器がそれぞれ共伴出土している。a 項、b 項は大木 6 式のいわゆる吹浦式土器の範疇に入る土器群であるが、202、204 の器形は異なるものである。d 項は円筒下層 d 式期の一一群である。e 項は石川、富山県方面に見られる土器群で、新保、新崎式といわれるものである。f 項は融合型式の土器群であり、問題のある土器群といえる。197 の深鉢形土器は、口縁が外反し、胴部がやや膨らみ、底部に自然にしづむもので、口縁部施文は半隆起線、半截竹管状工具による爪形文で北陸地方に多く見られる文様構成である。胴部は円筒下層式の木目状撫糸文施文である。195 についても器形は円筒深鉢形で、口縁部の文様構成は北陸的であり、194 は、口縁部に連続刺突文、単軸絡状体圧痕文、單節繩文の圧痕文が施文され、199 を除いては、いずれも頭部の隆帯を境に文様帶が分かれる。

秋田県内で北陸系の土器が出土している遺跡は、小坂町「二夕渡北方遺跡」、能代市「上ノ山遺跡」、八竜町「董刈沢貝塚」、若美町「中角境遺跡」、男鹿市「大烟台遺跡」、秋田市「下堤 A 遺跡」、「坂ノ上 A 遺跡」、本荘市「船岡台遺跡」⁶、「菖蒲嶺」⁷などがあげられる。これらは縄文時代前期後葉～後期前葉の時期の遺跡であり、日本海沿岸を南下し始める円筒下層 d 式～上層式土器を伴出する例が多い。北陸系の土器群が出土する時期は、縄文前期後葉～中期中葉までと考えられる（これは馬高式に伴う、三角形土器の出土時期と一致すると考えられる）。円筒土器文化と大木土器文化は、秋田市、田沢湖、宮古を結ぶラインを境にするという基本的な考え方を認め、特に秋田市を中心とする中央部においては、円筒、大木、北陸系の土器文化が雜居していた地域と言えるし、下堤 D 遺跡は縄文時代前期～中期の過渡期の様相を示し、文化圈の多様な動きを捉えている。北陸系の土器文化については、石川、富山、新潟、山形各県の日本海側にその範囲が認められる。土器文化の範囲は自然的条件に左右される事も見逃せないであろう。

資料不足なこと、分類の方法も臨時的であり、異論もあると思われる。今後、資料の増加を得ち、検討する必要を感じる。

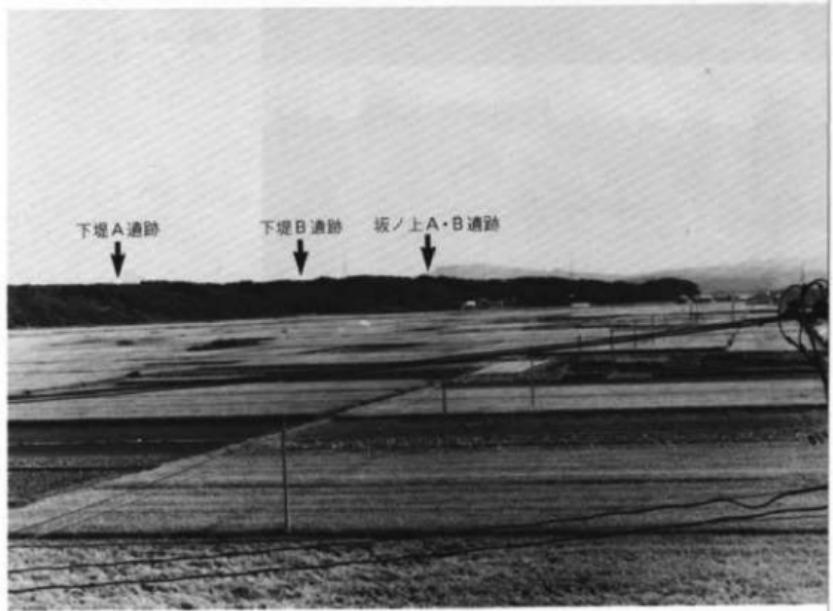
※富澤泰氏の御教示による。



参考文献

- 秋田県教育委員会：「片符沢遺跡Ⅰ発掘調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第72集 1980
- 秋田市教育委員会：「小阿地^{下見立井}発掘調査報告書」 1976
- 秋田市教育委員会：「上新城中学校遺跡発掘調査報告書」 1980
- 麻生 優 加藤晋平 藤本強他：「日本の旧石器文化 1 總論編」 雄山閣 1975
- 麻生 優 加藤晋平 藤本強他：「日本の旧石器文化 2 遺跡と遺物（上）」 雄山閣 1975
- 安保 彰 「小坂のあけぼの」 1975
- 岩手県陸前高田市教育委員会：「門前貝塚」 1974
- 江坂輝弥 「石神遺跡」 ニュー・サイエンス社 1970
- 小笠原好彦 「東北地方南部における前末期から中期初頭の縄文式土器」 仙台湾周辺の考古学的研究 宮城教育大学歴史研究会 1968
- 小林達雄 「日本の美術 第145号 縄文土器」 至文社 1978
- 小林達雄 「多摩ニュータウンの先住者一主として縄文時代のセトメント・システムについて」 月刊文化財 1973
- 協和町教育委員会：「米ヶ森遺跡発掘調査報告書」 1977
- 莊内古文化研究会：「吹浦遺跡発掘調査報告書」 1954
- 芹沢長介 坪井清足他：「縄文土器大成 第1巻早・前期」 講談社 1982
- 芹沢長介 坪井清足他：「縄文土器大成 第2巻中期」 講談社 1981
- 谷口重光 安田忠市：「中角境遺跡発見遺構の破壊と遺物について」 環状第4号 秋田県埋蔵文化財保護サークル「環状」 1982
- 富山県 「富山県史 考古編」 1972
- 滑川市教育委員会：「安田古宮遺跡発掘調査報告書」 1978
- 日本鉱業株式会社船川製油所：「大烟台遺跡発掘調査報告書」 1979
- 八竜町教育委員会：「置刈沢貝塚」 1979
- 本荘市教育委員会：「遺跡発掘調査報告書 沖沢海岸遺跡 船岡台遺跡」 1971
- 宮城県教育委員会：「長根貝塚」 宮城県文化財調査報告書第19集
- 財團法人宮城縣史刊行会：「宮城縣史34（資料篇11）」 1981
- 武藏野美術大学考古学研究会：「宮の原貝塚」 1972
- 山形県教育委員会 「郷の沢」遺跡 1981
- 山形県埋蔵文化財調査団 「日本先史土器の縄文」 先史考古学会 1979

図 版



図版1 遺跡遠景



1地区（南から）



2地区（南から）



3地区（南から）



4地区（東から）

図版2 調査前



図版 3 1 地区 上 全景 (南から)
下 (南東から)



図版4 1地区 上 (南西から)
下 旧石器時代の遺物出土状態 (南西から)



旧石器時代の遺物出土状態
(西から)

土層状態



細石刃出土状態



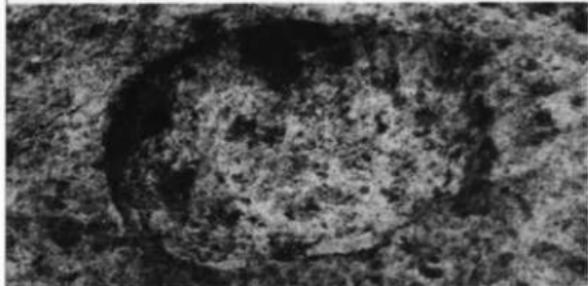
東側汎部
焼土・炭化物



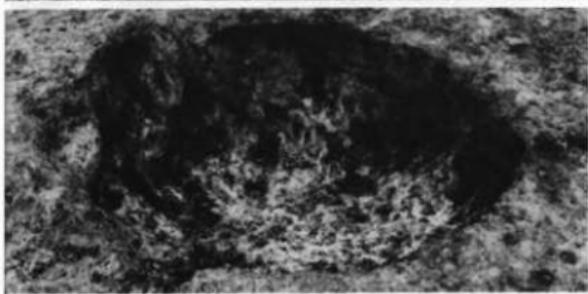
図版5 1地区



1号住居跡、6号土塁
(北から)

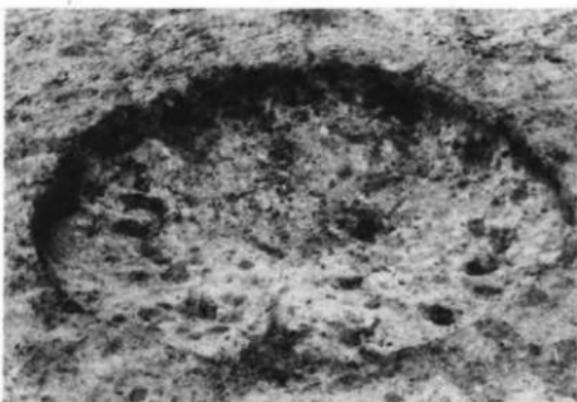


1号土塁 (南から)



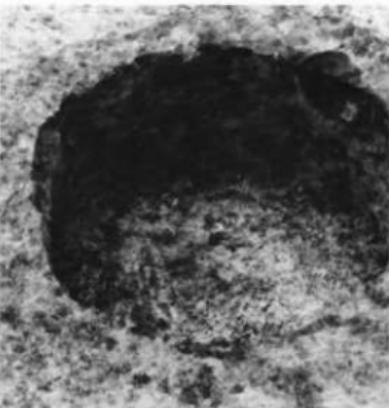
2号土塁 (南から)

3号土塙
(南から)

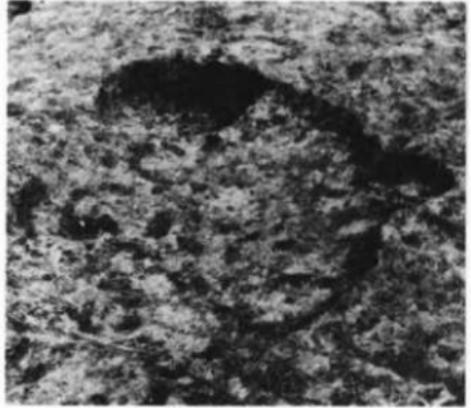


5号土塙(南から)

5号土塙土層断面
(南から)



6号土塙(西から)



遺物出土状態



図版8 2地区全景 上 (南から)
下 (西から)



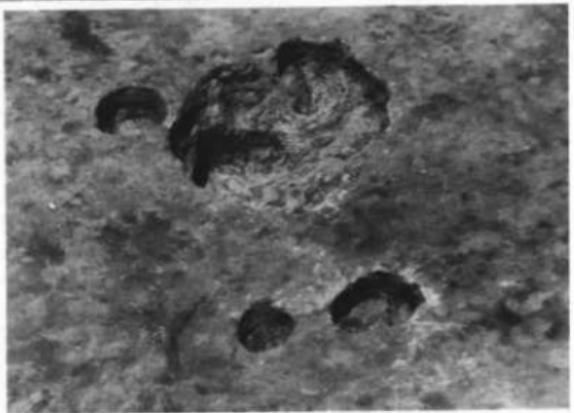
図版9 2地区 上 1号住居跡（南から）
下 1号住居跡周辺（南から）



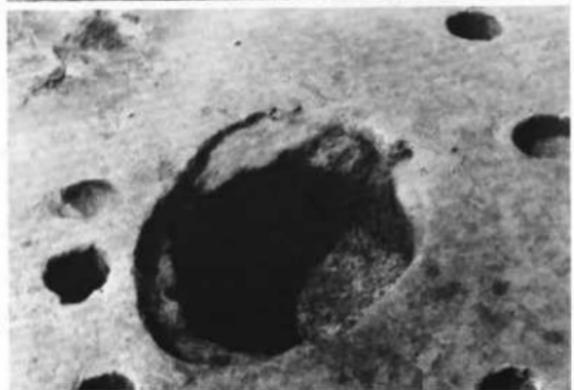
図版10 2地区 上 2号住居跡 (西から)
下 2号住居跡周辺 (北から)



4号住居跡
46号土塙
45号土塙
(南から)



57号土塙
1号土塙
(南から)

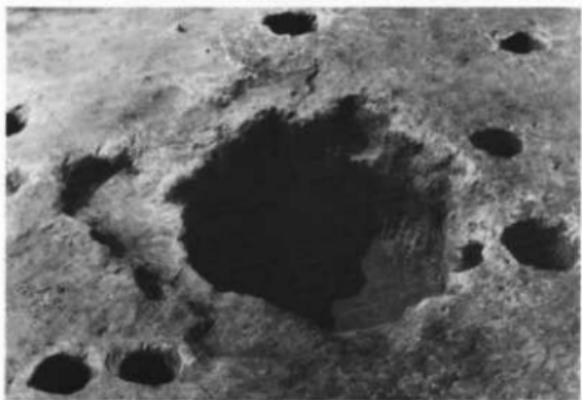


図版11 2地区

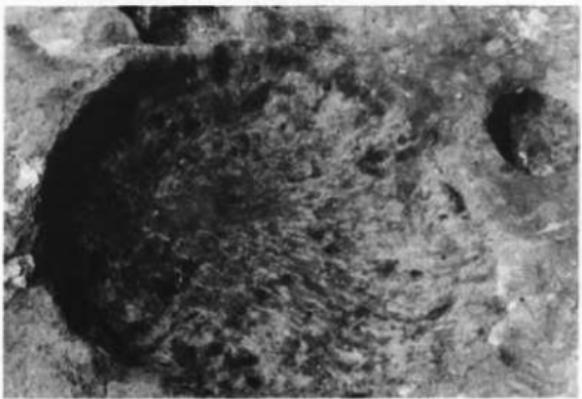
2号土塙
(南から)



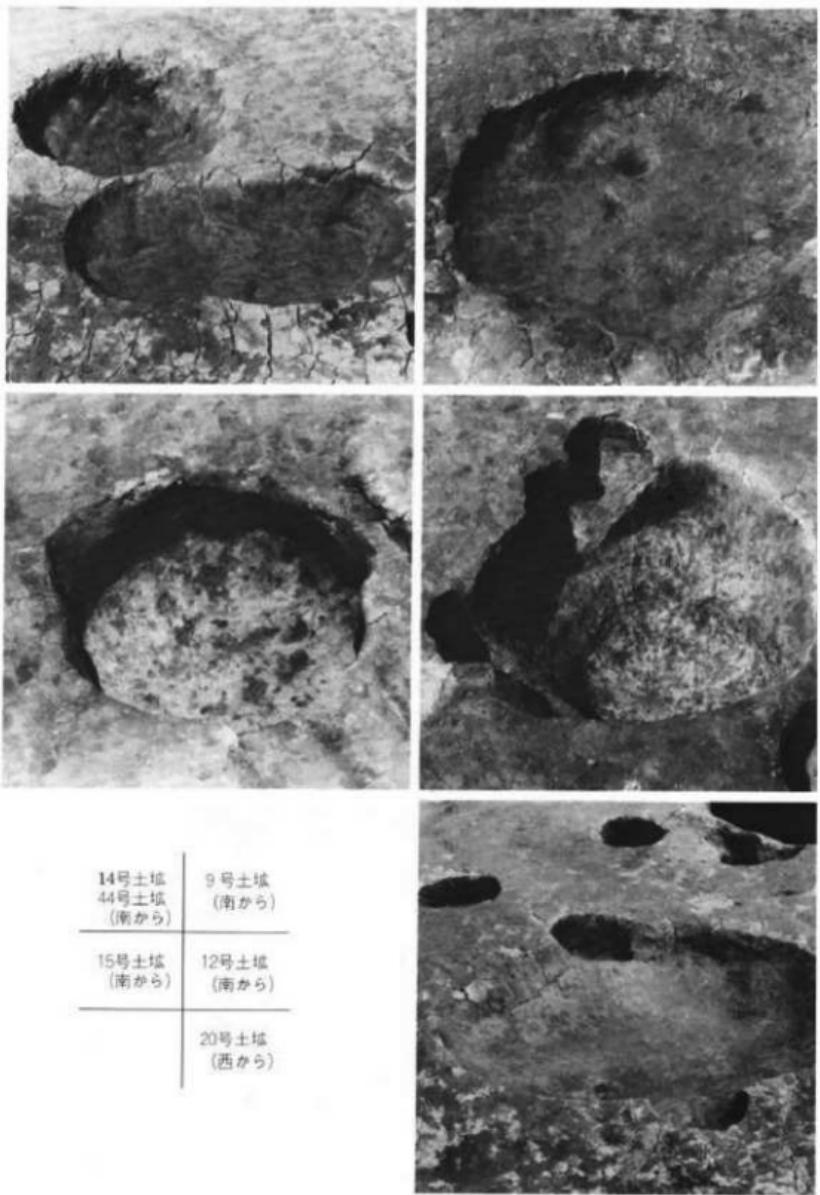
59・5号土壌 (南西から)



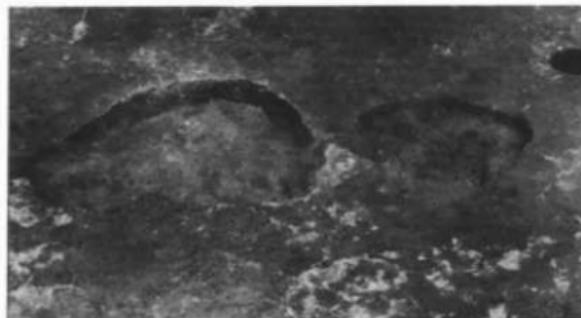
6号土壌 (西から)



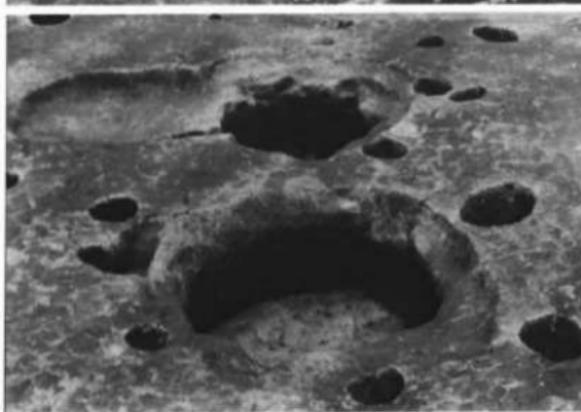
7号土壌 (南から)



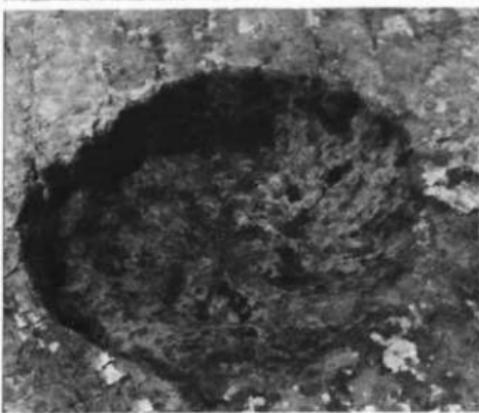
図版13 2地区



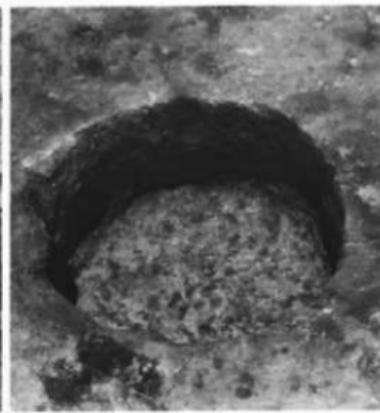
21・22号土塙 (南から)



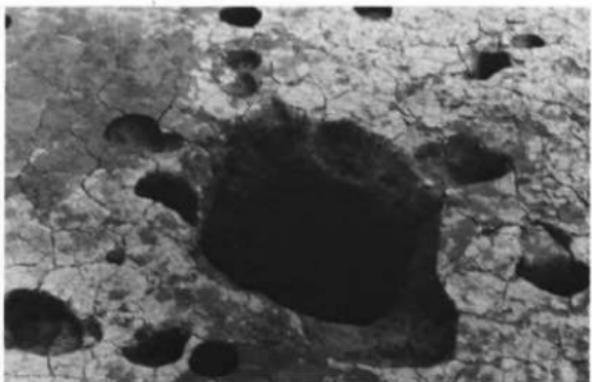
28・27号土塙
30号土塙
(南から)



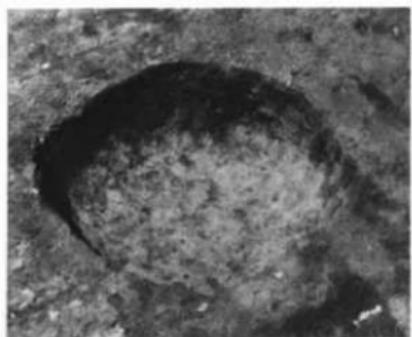
35号土塙 (南から)



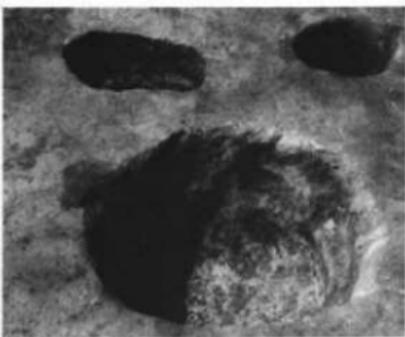
38号土塙 (南から)



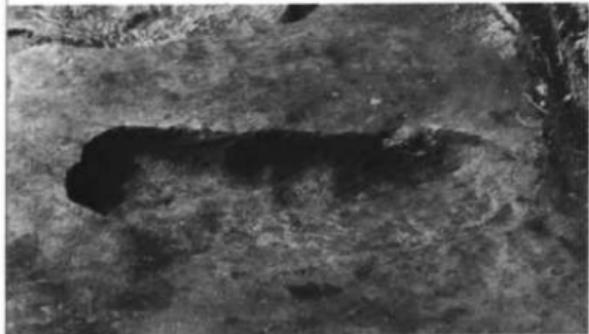
図版15 2地区



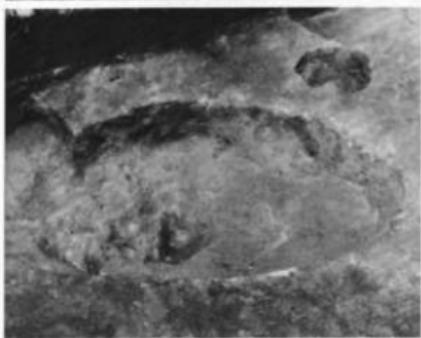
49号土塙（南から）



55号土塙（南から）



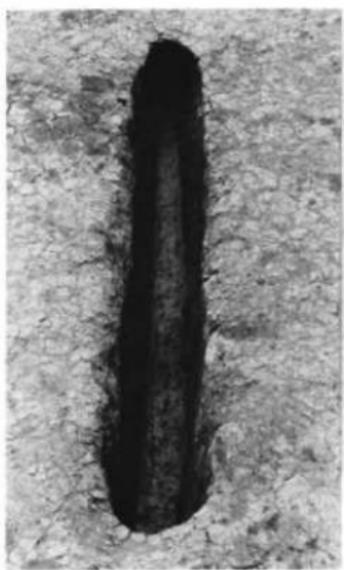
56号土塙（南から）



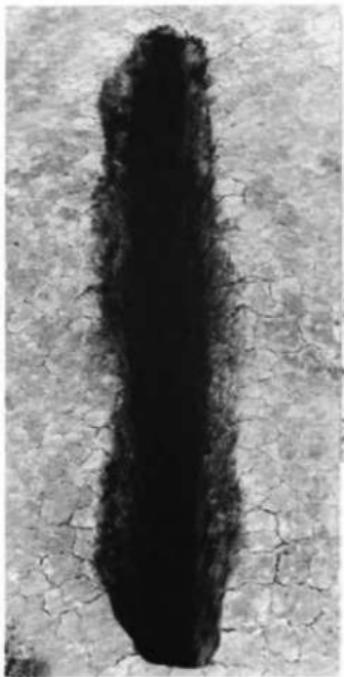
58号土塙（南から）



6号焼土通横遺物出土状態



1号溝状土塙（南から）



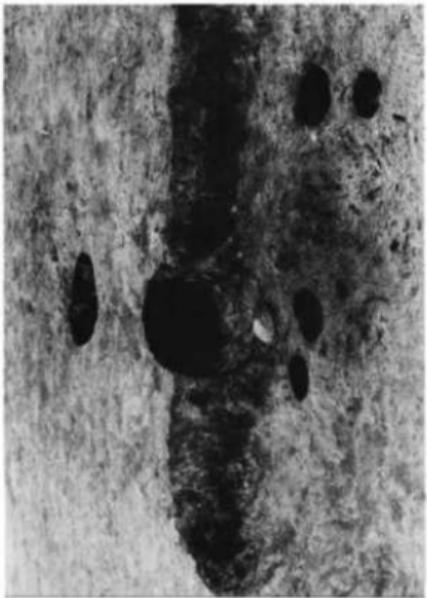
2号溝状土塙（南から）



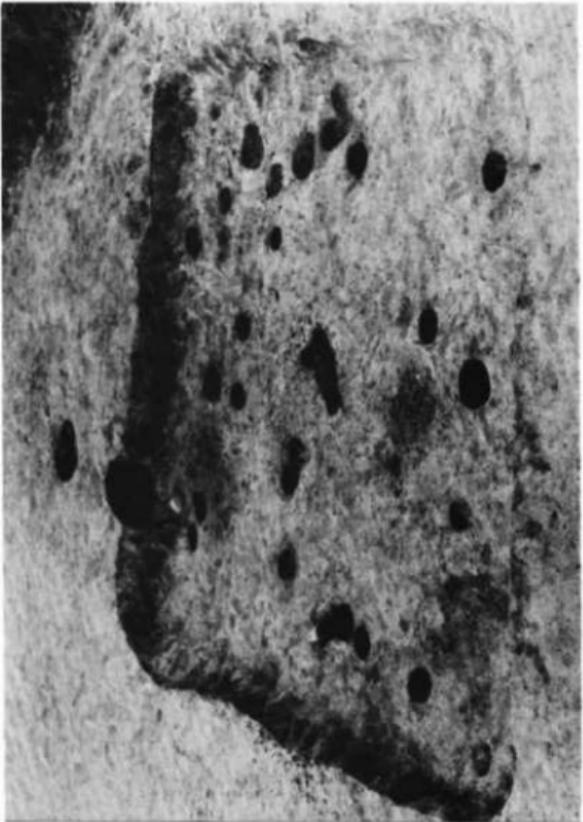
図版18 3地区 上 全景(南から)
下 南南部、奥が2地区(西から)



図版19 3地区 上 トレンチ（北西から）
下 北半部（北から）



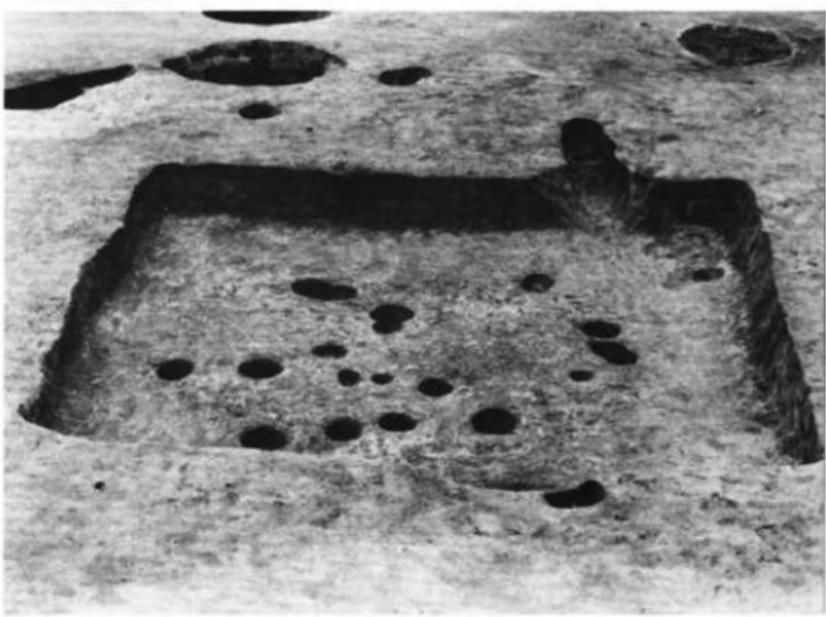
1号住居跡カマド(北から)



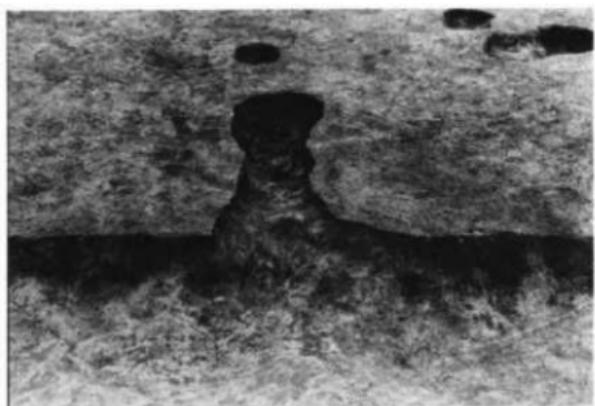
1号住居跡(北から)



2号住居跡カマド(北から)



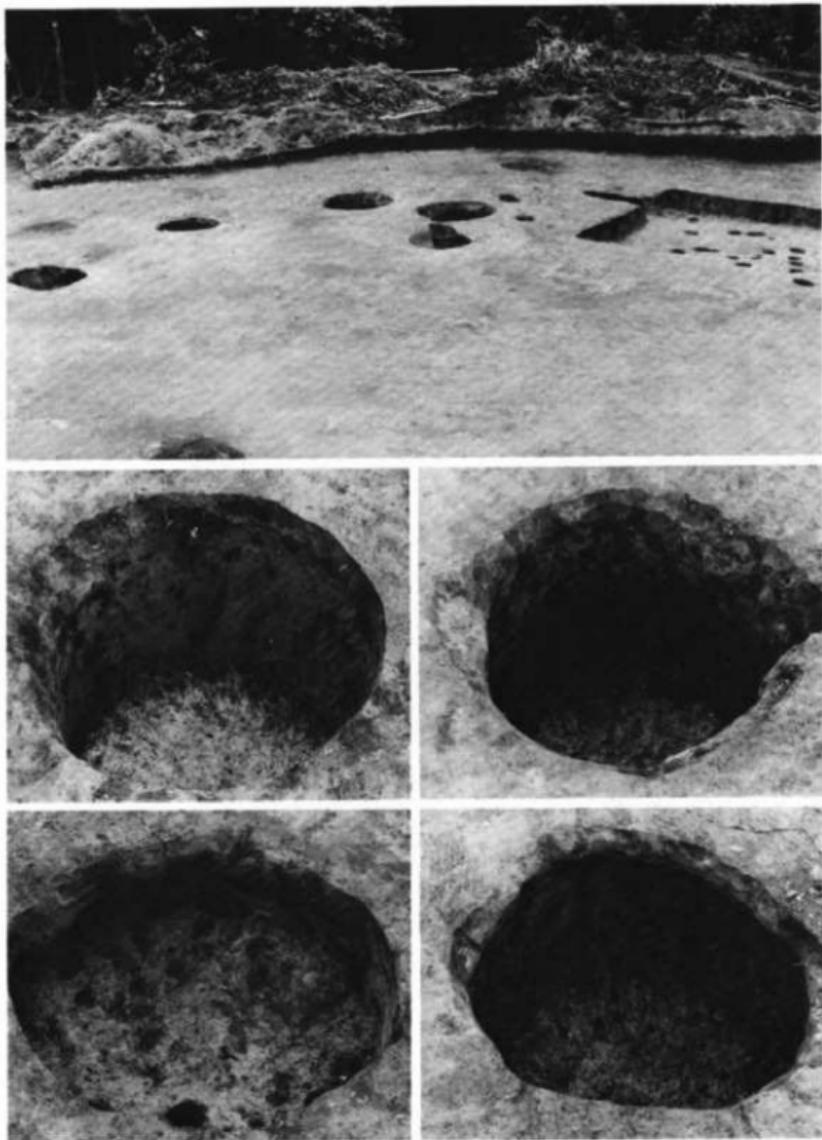
図版21 3地区



3号住居跡カマド(北から)

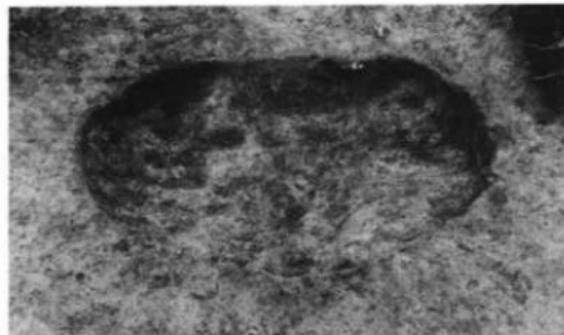


3号住居跡(北から)

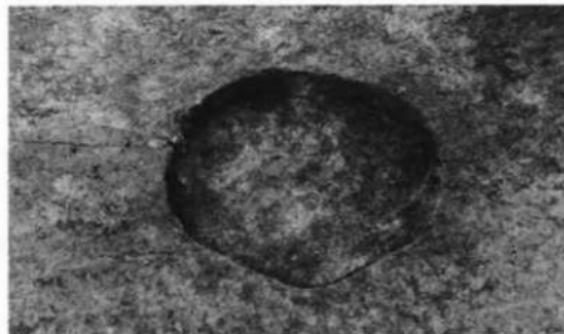


図版23 3地区

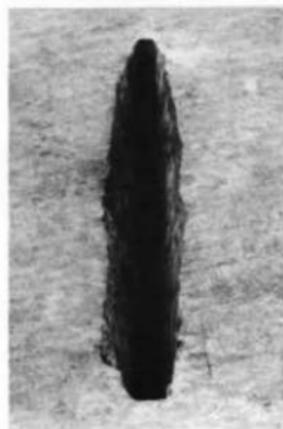
土塙群（北から）	
4号土塙 (南から)	3号土塙 (南から)
6号土塙 (西から)	5号土塙 (南から)



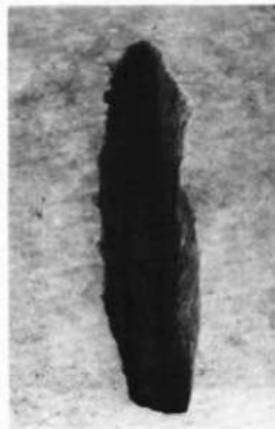
1号土塚(西から)



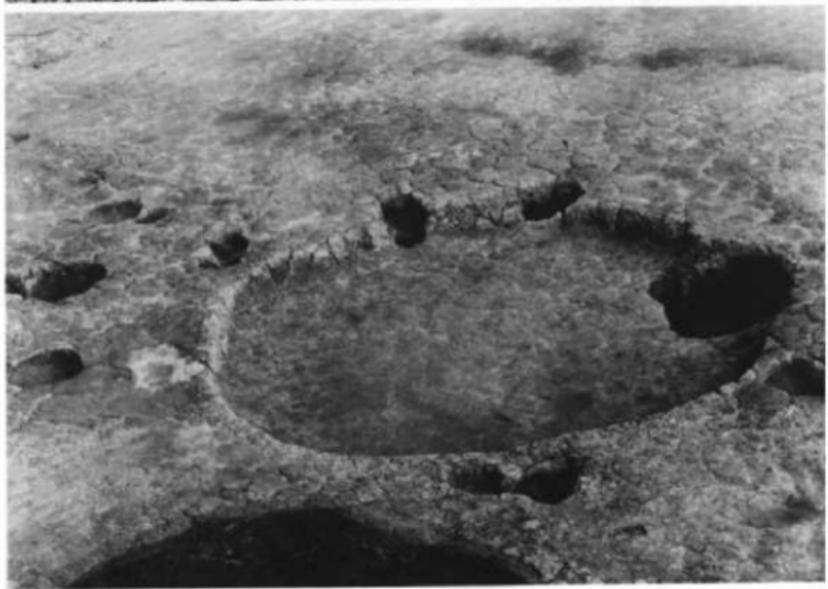
2号土塚(西から)



1号溝状土塚(南から)



2号溝状土塚(南から)



図版25 4地区 上 全景(南から)
下 1号住居跡(西から)



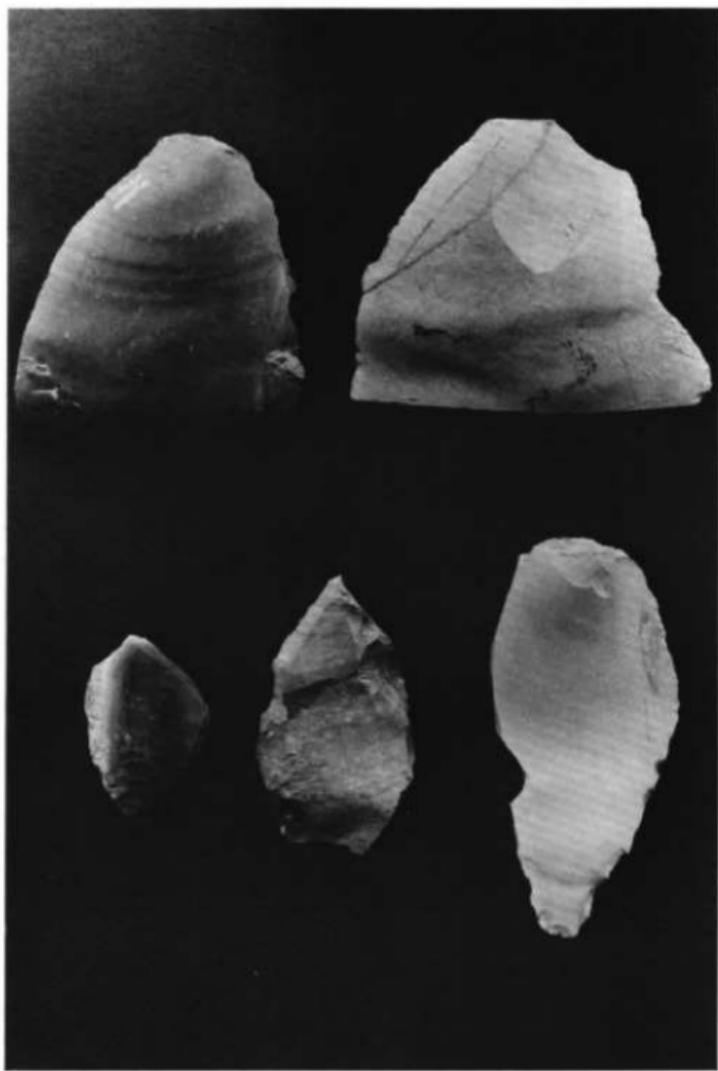
図版26 1地区旧石器時代の遺物



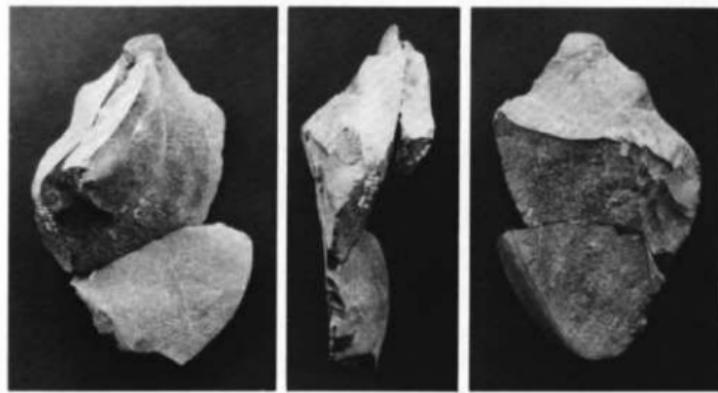
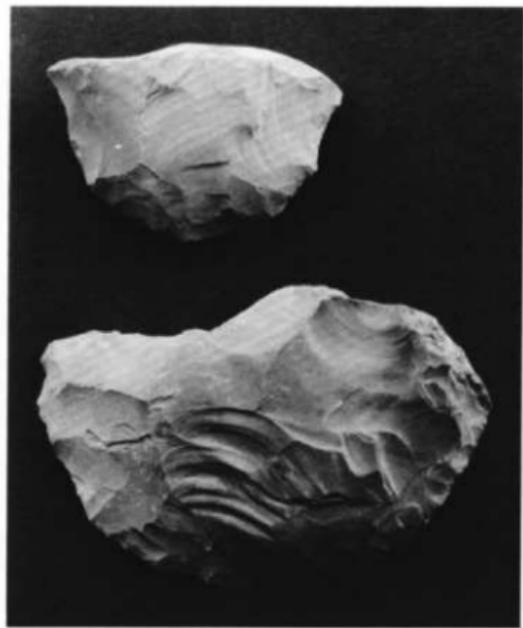
図版27 1 地区旧石器時代の遺物



図版28 T地区旧石器時代の遺物

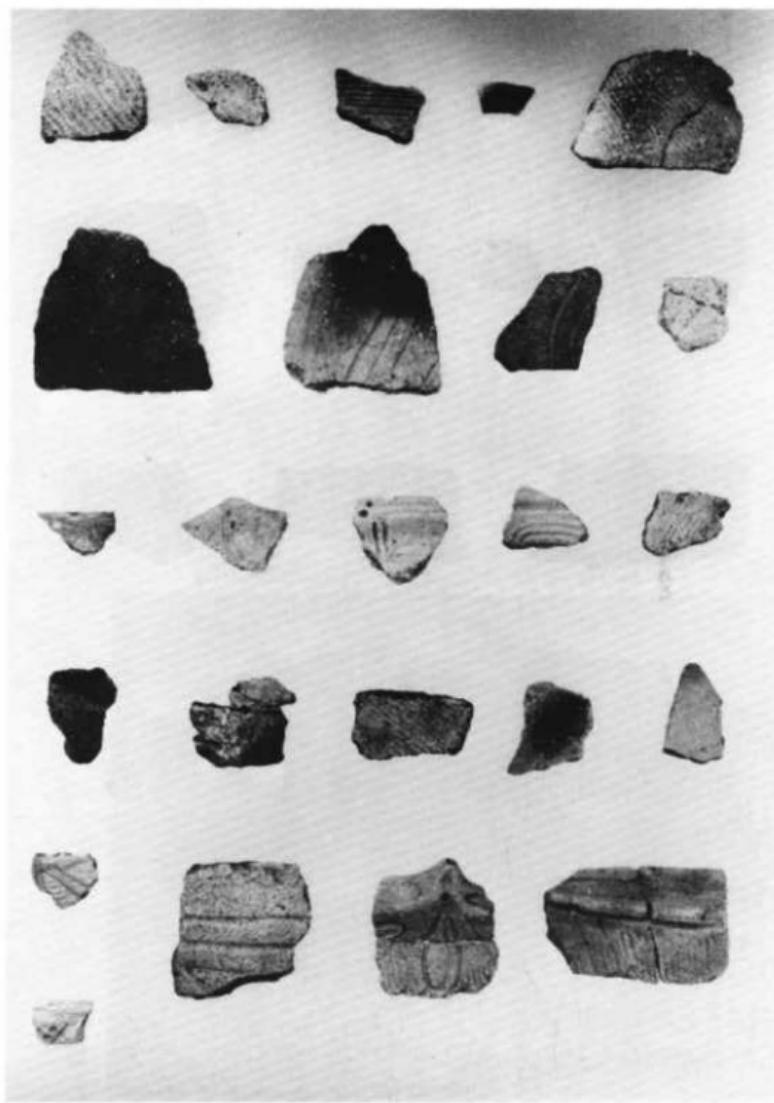


図版29 1地区旧石器時代の遺物

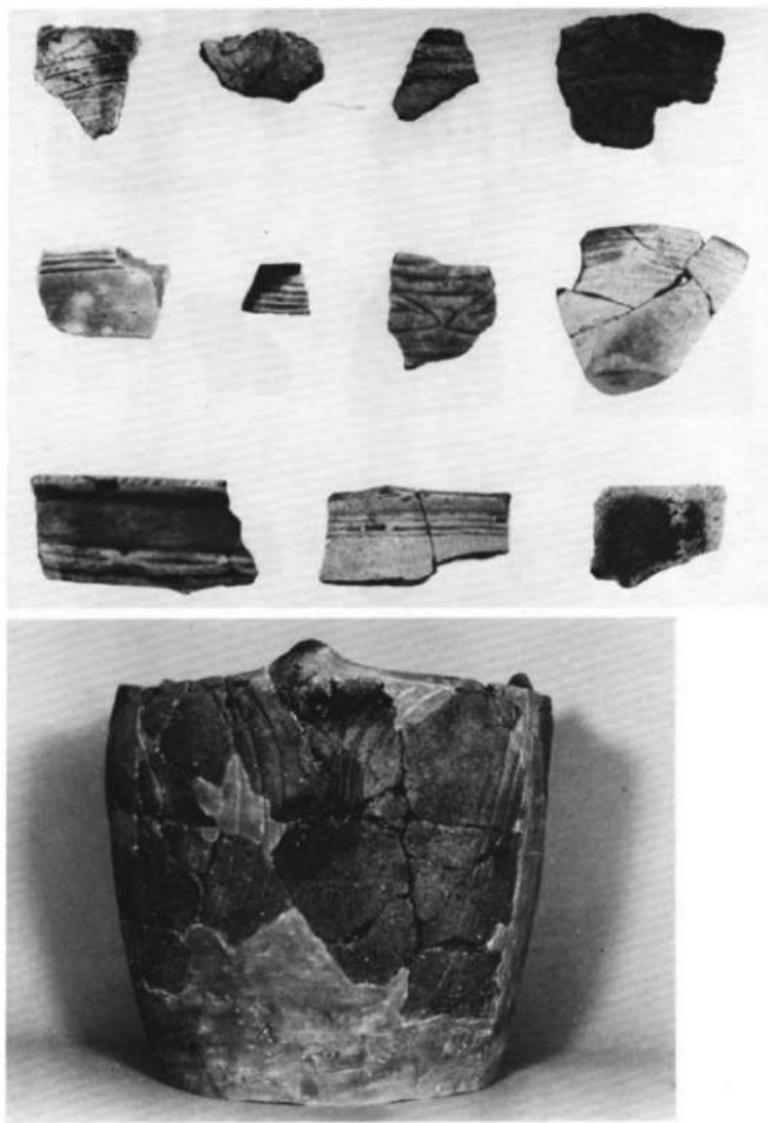


接合刮片

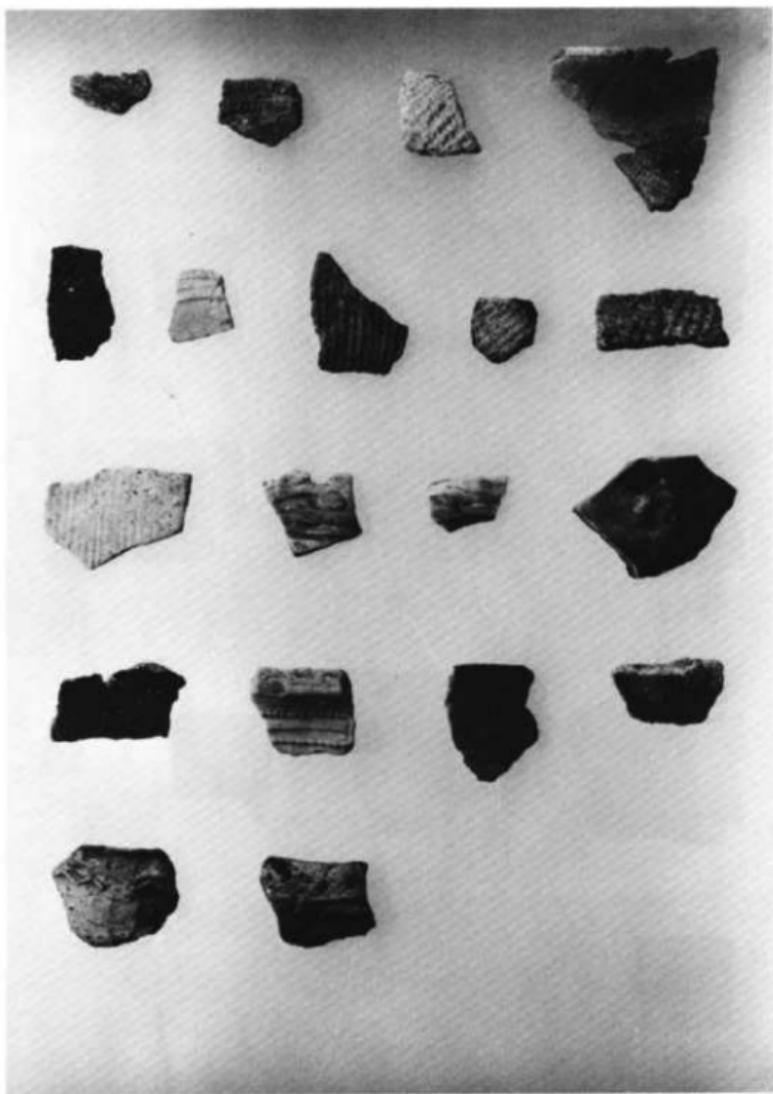
図版30 1 地区旧石器時代の遺物



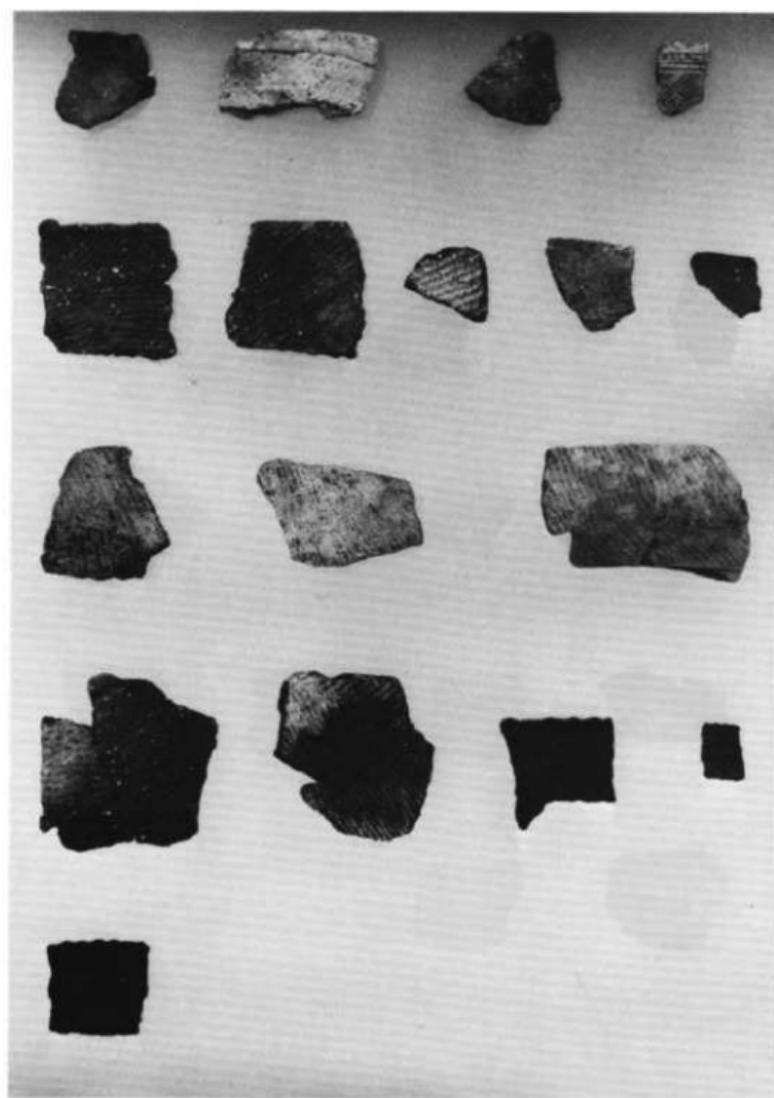
图版31 1地区出土土器



图版32 I 地区出土土器



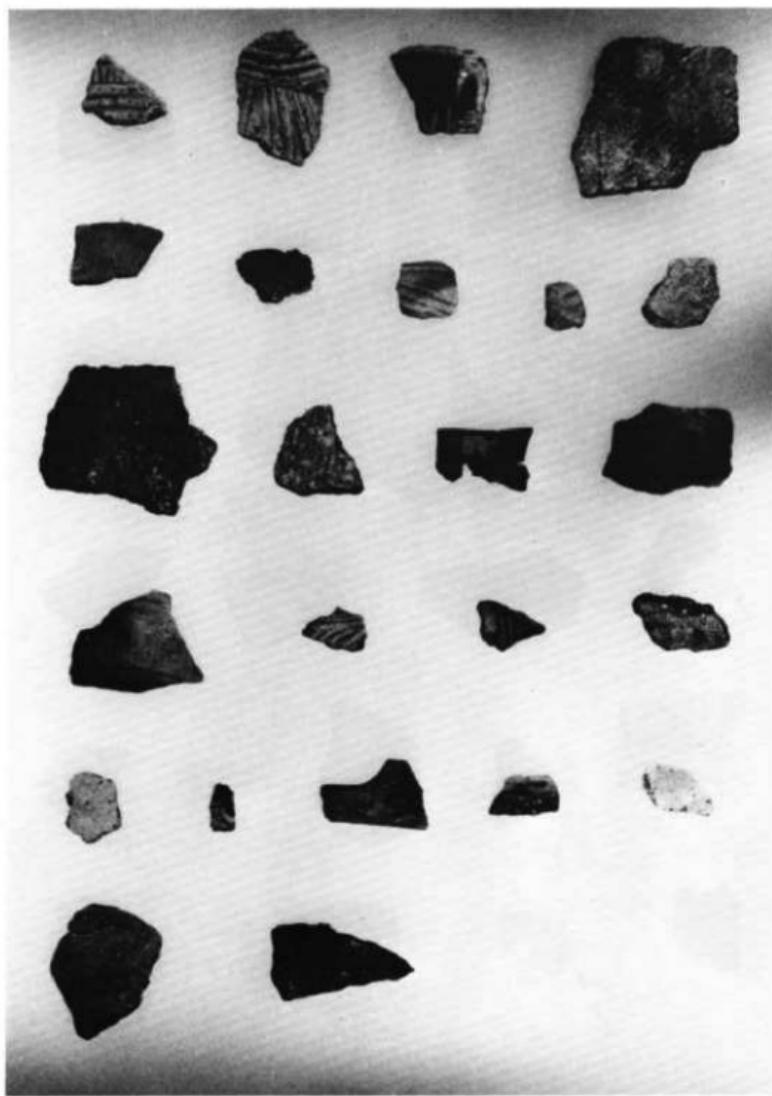
图版33 2地区出土土器



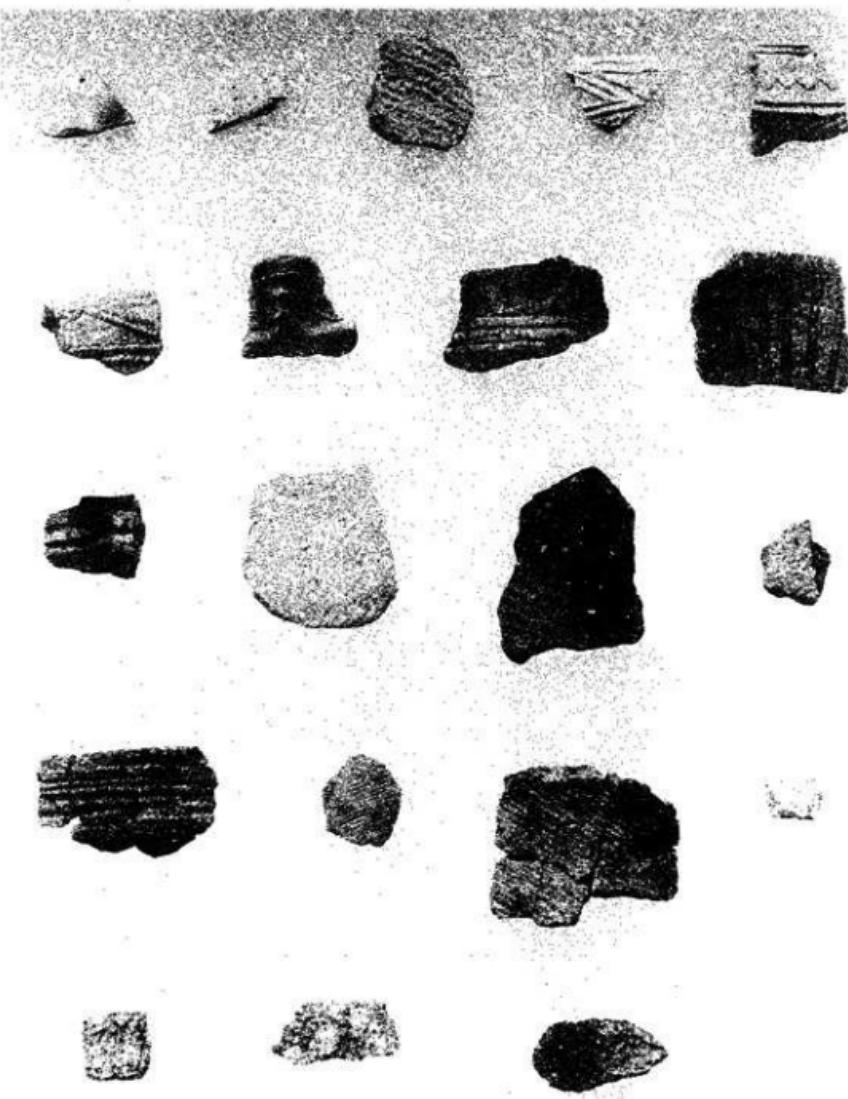
图版34 2地区出土土器



图版35 2地区出土土器

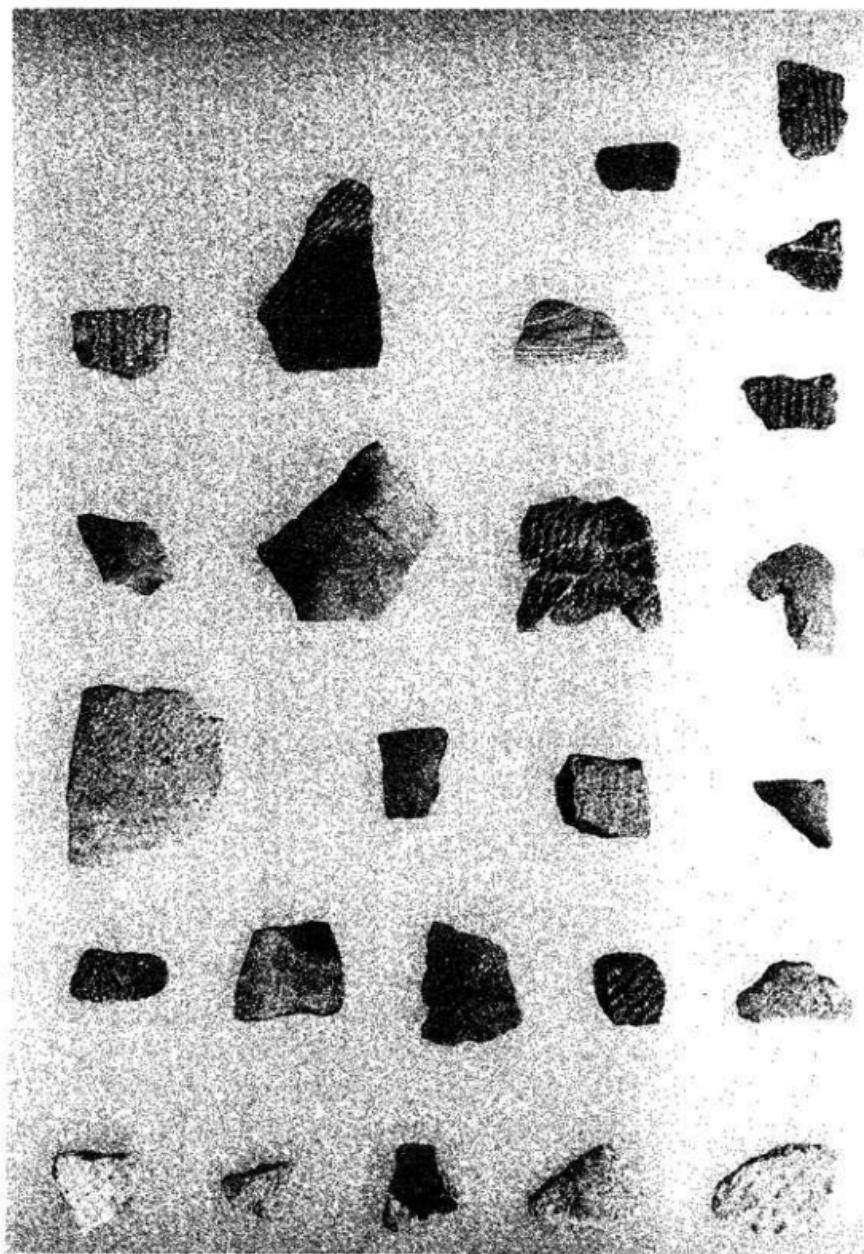


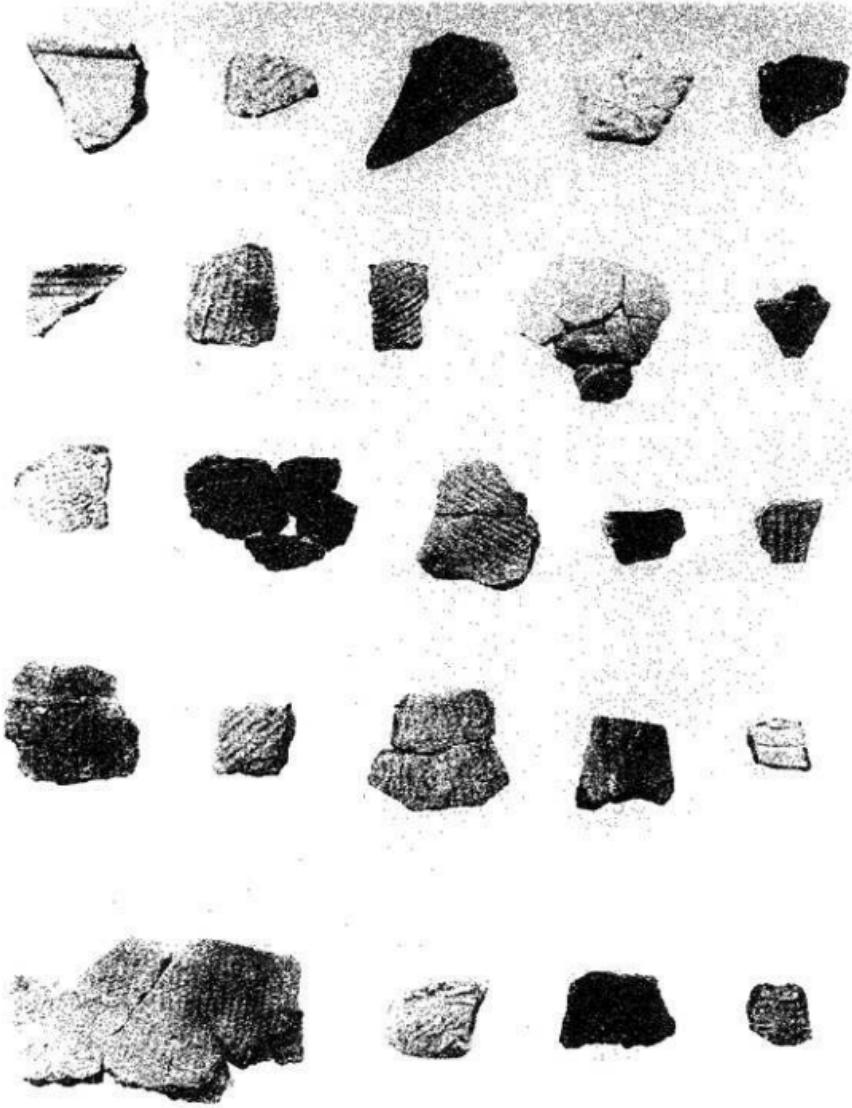
图版36 2地区出土土器



图版37 2地区出土土器

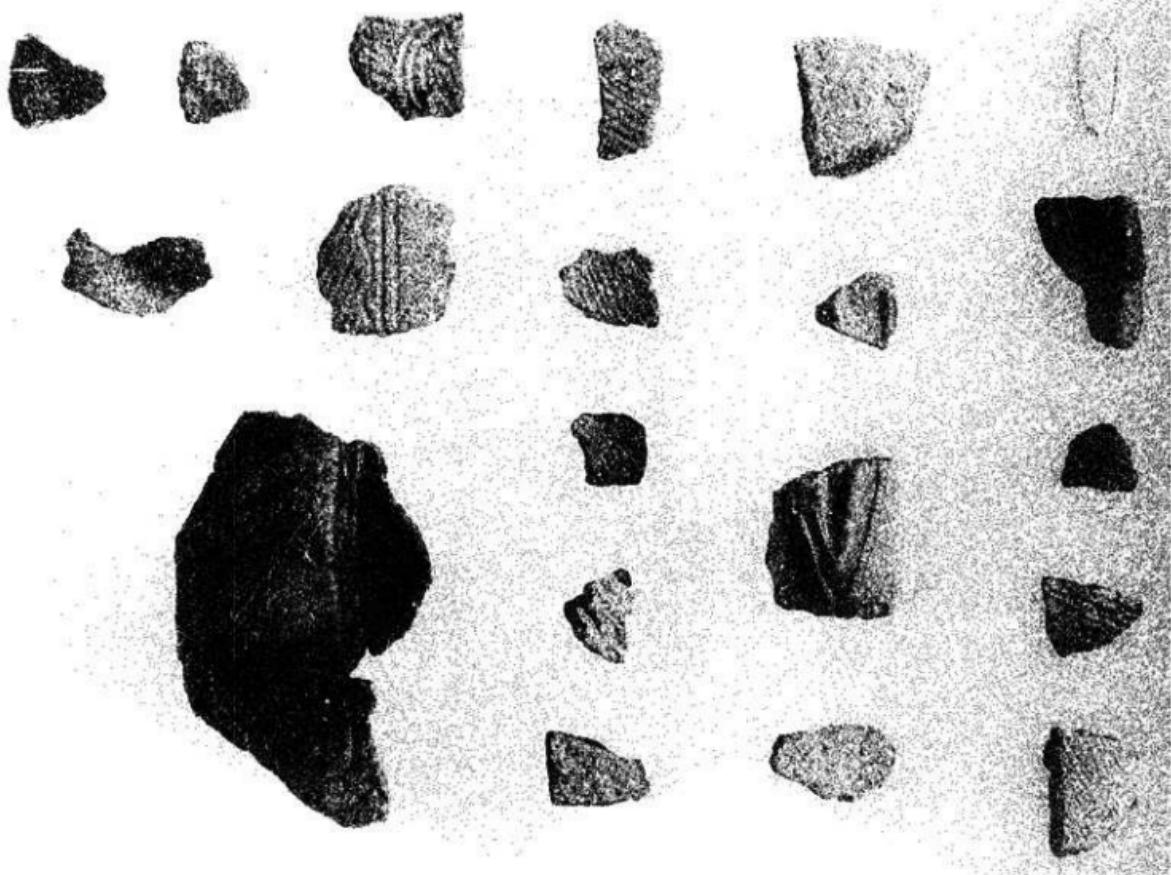
图版38 2地区出土玉器

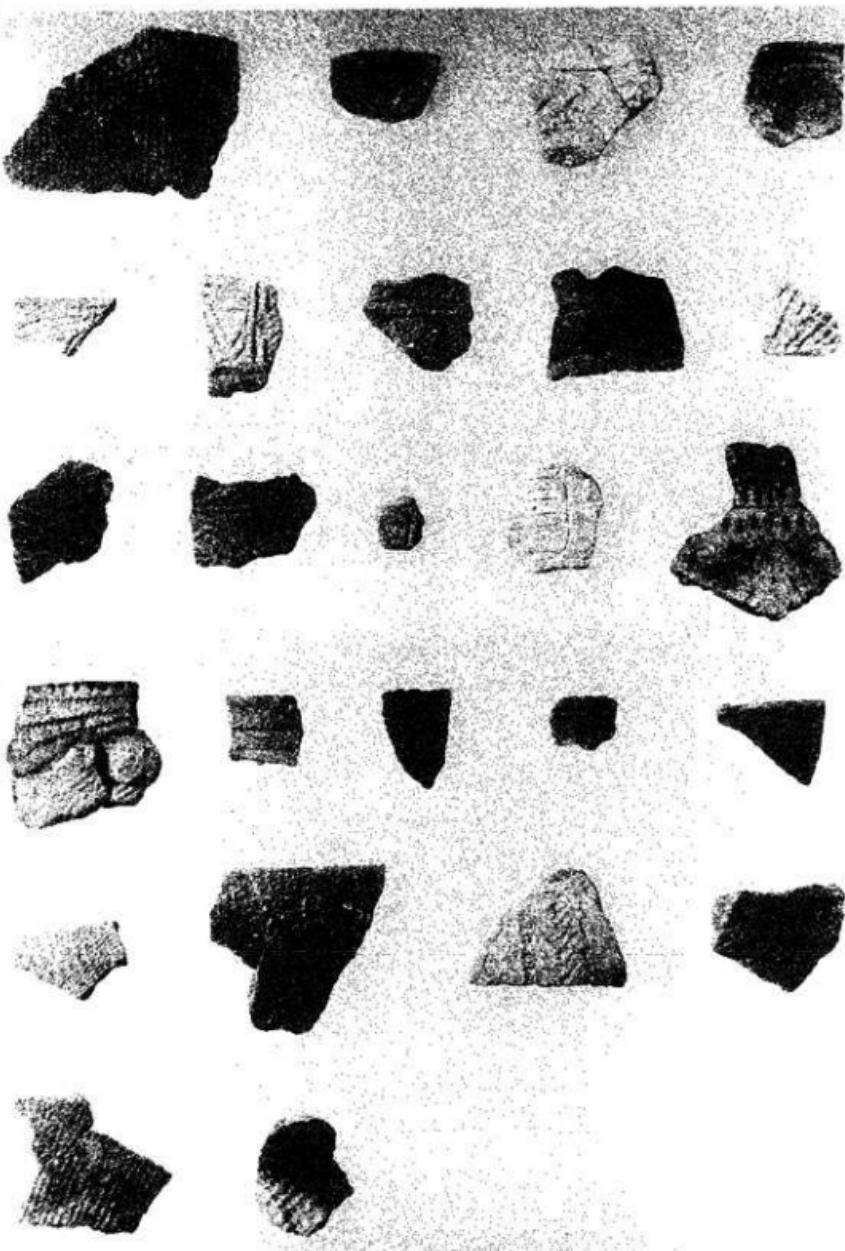




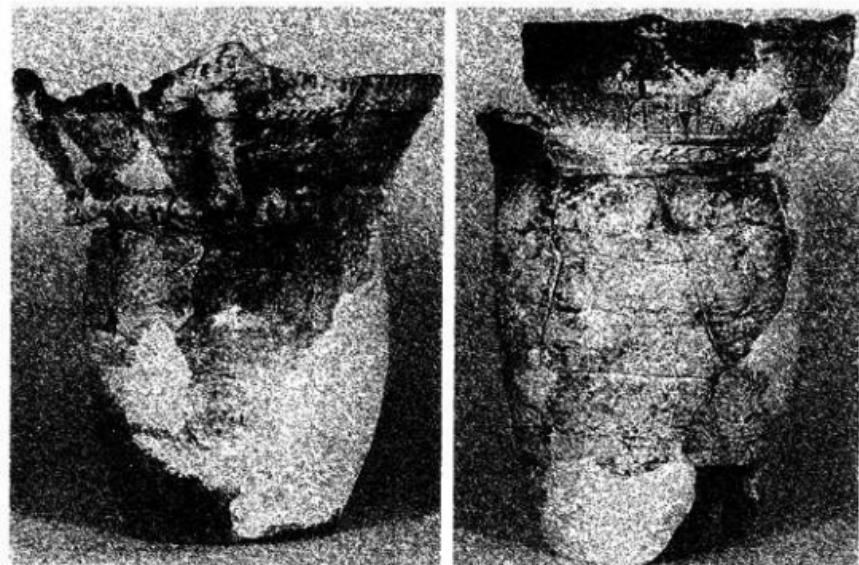
图版39 2地区出土土器

图版40 2地区出土土器



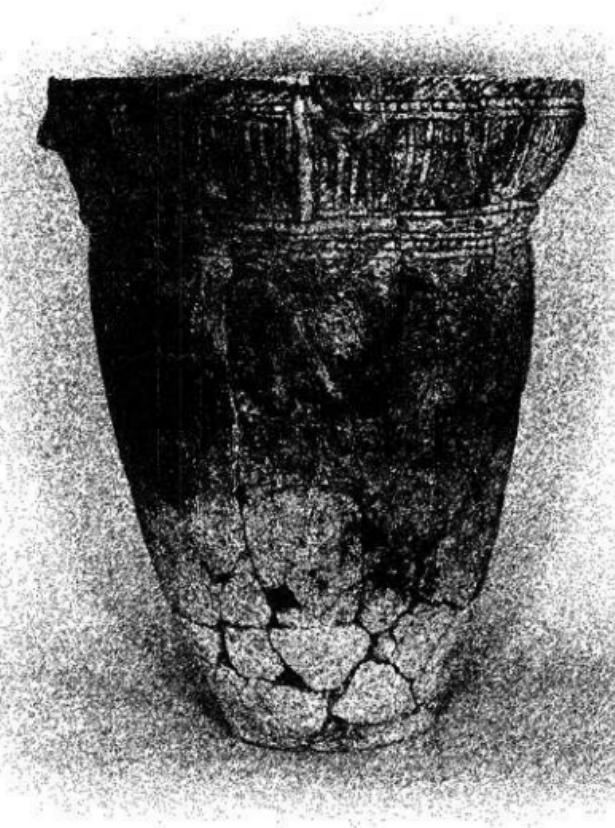
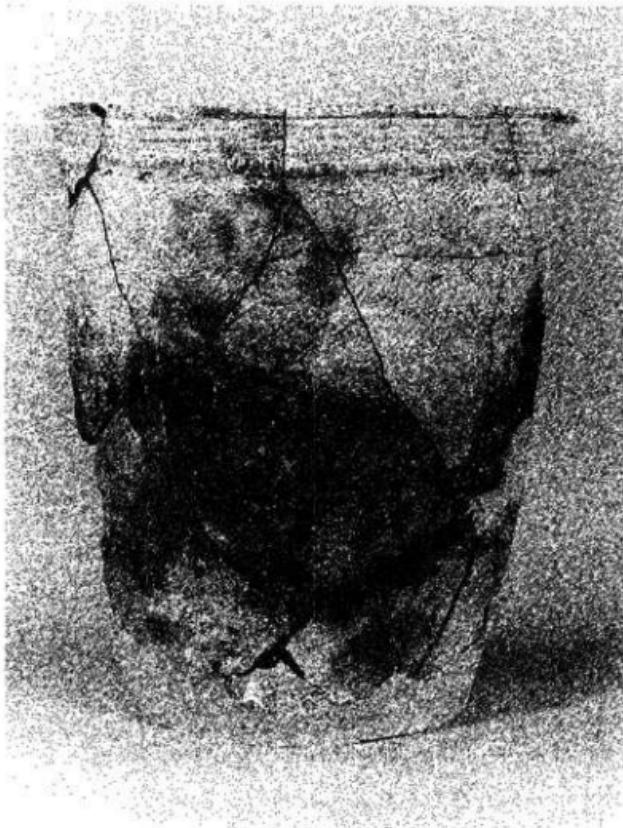


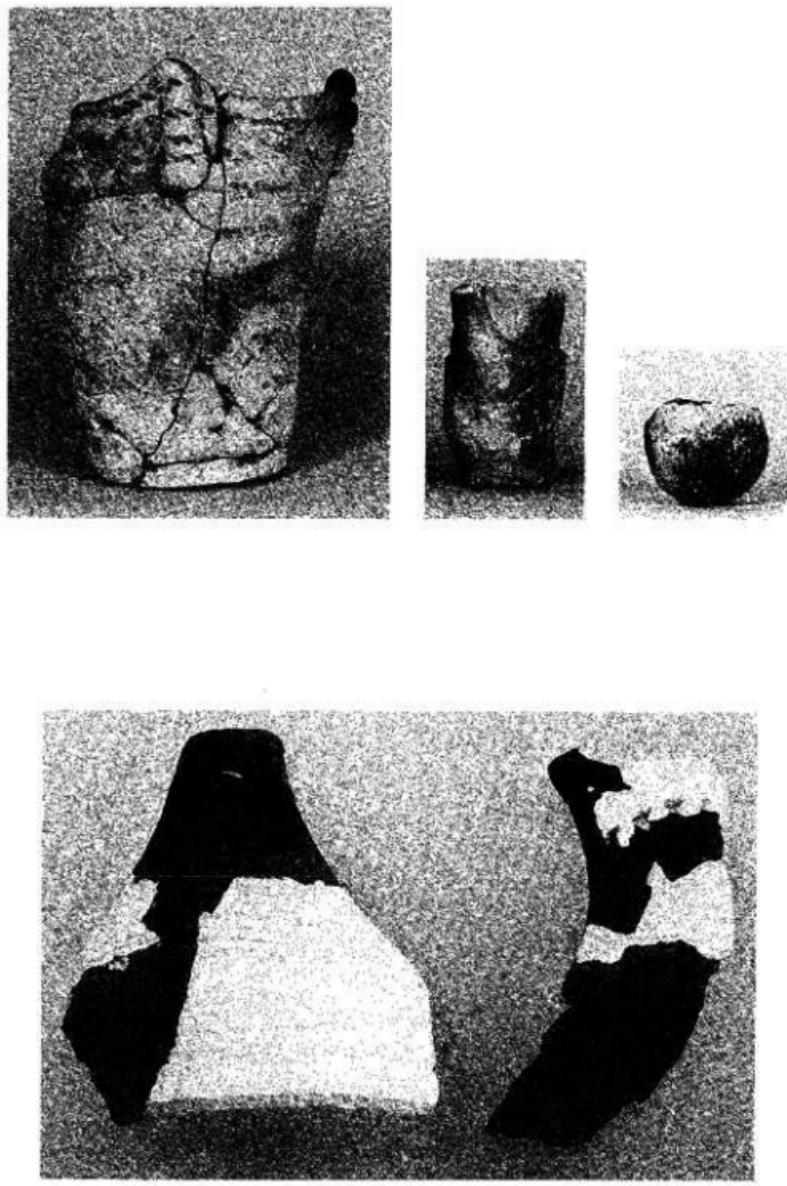
图版41 2地区出土土器



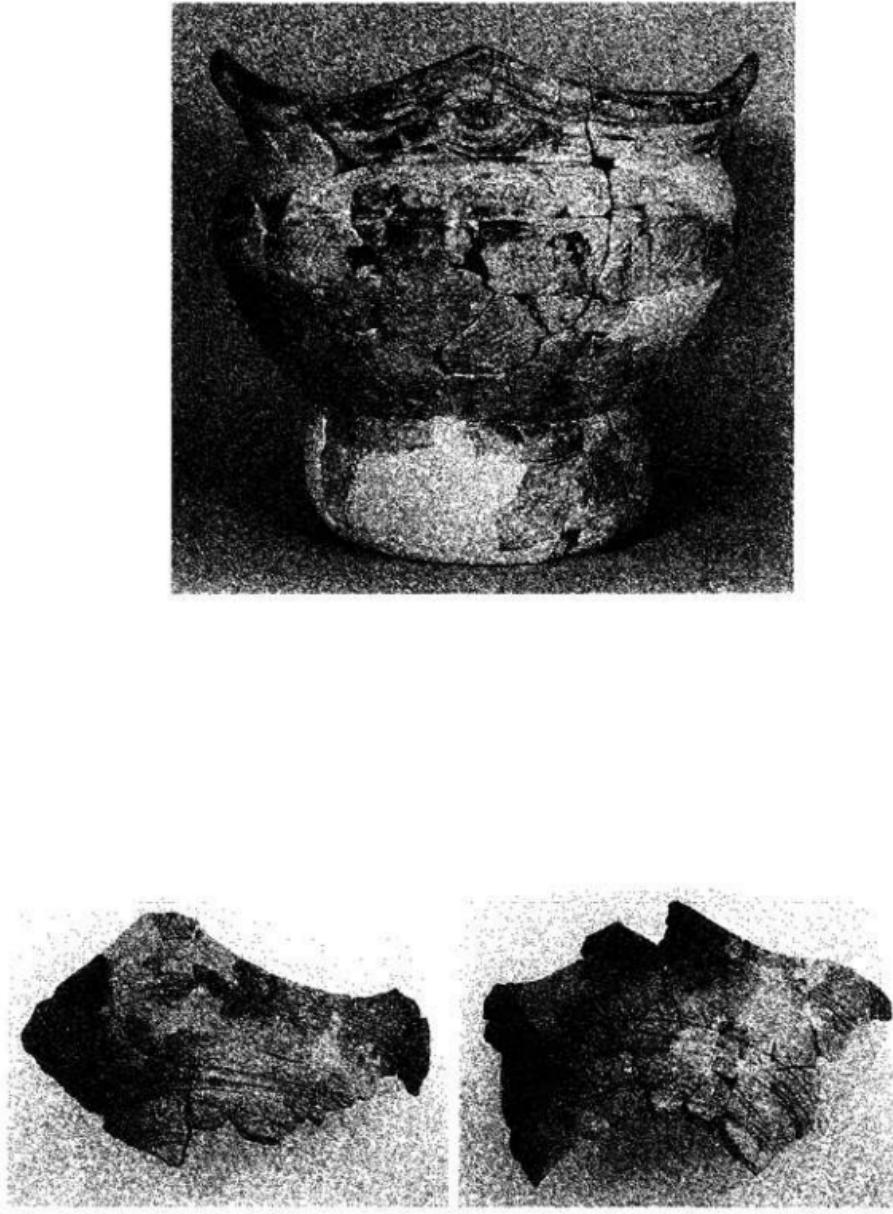
图版42 2地区出土土器

図版43 2地区出土土器

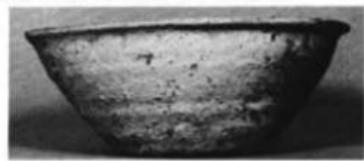




图版44 2地区出土土器



图版45 2地区出土土器

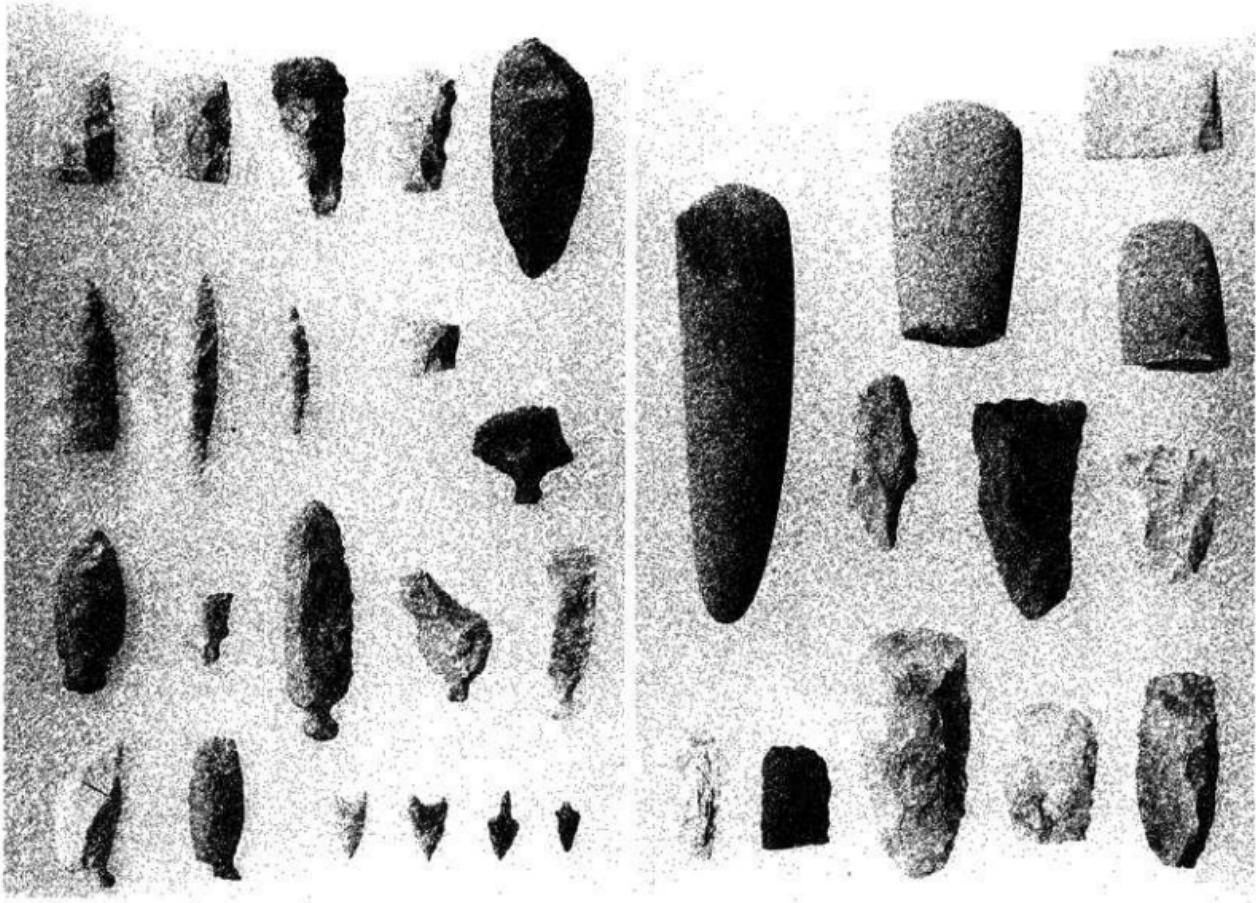


3 地区出土土器

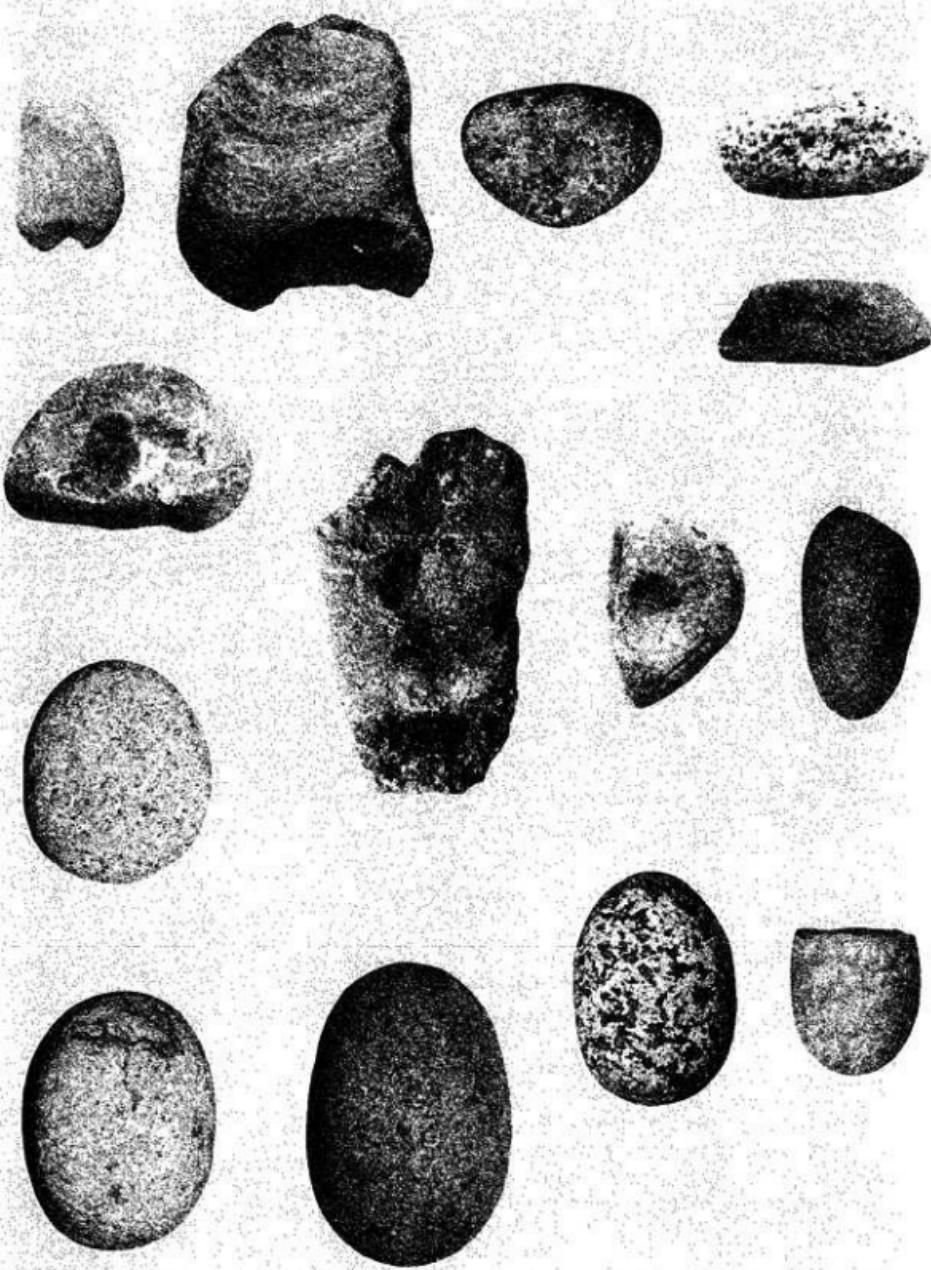
4 地区出土土器



图版46



図版47 出土石器



圖版48 出土石器



图版49 出土石器



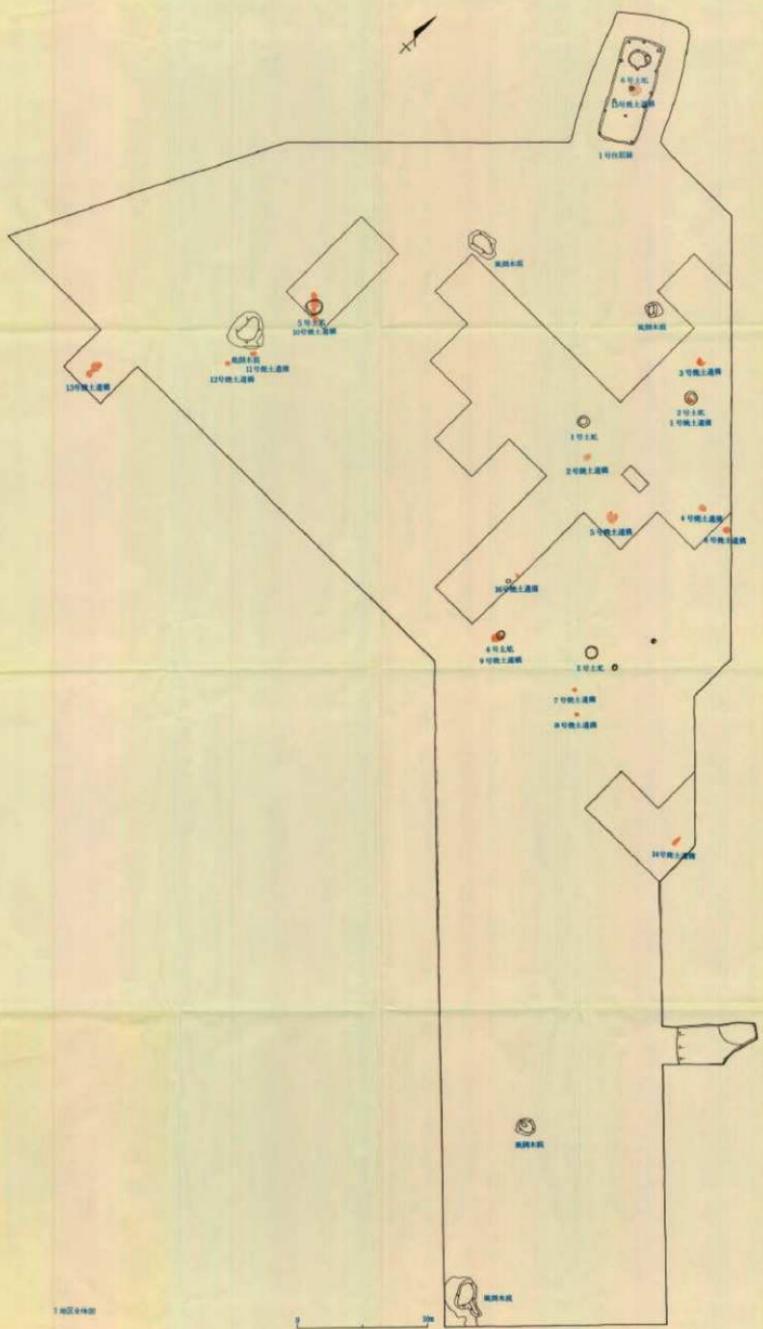
出土石器

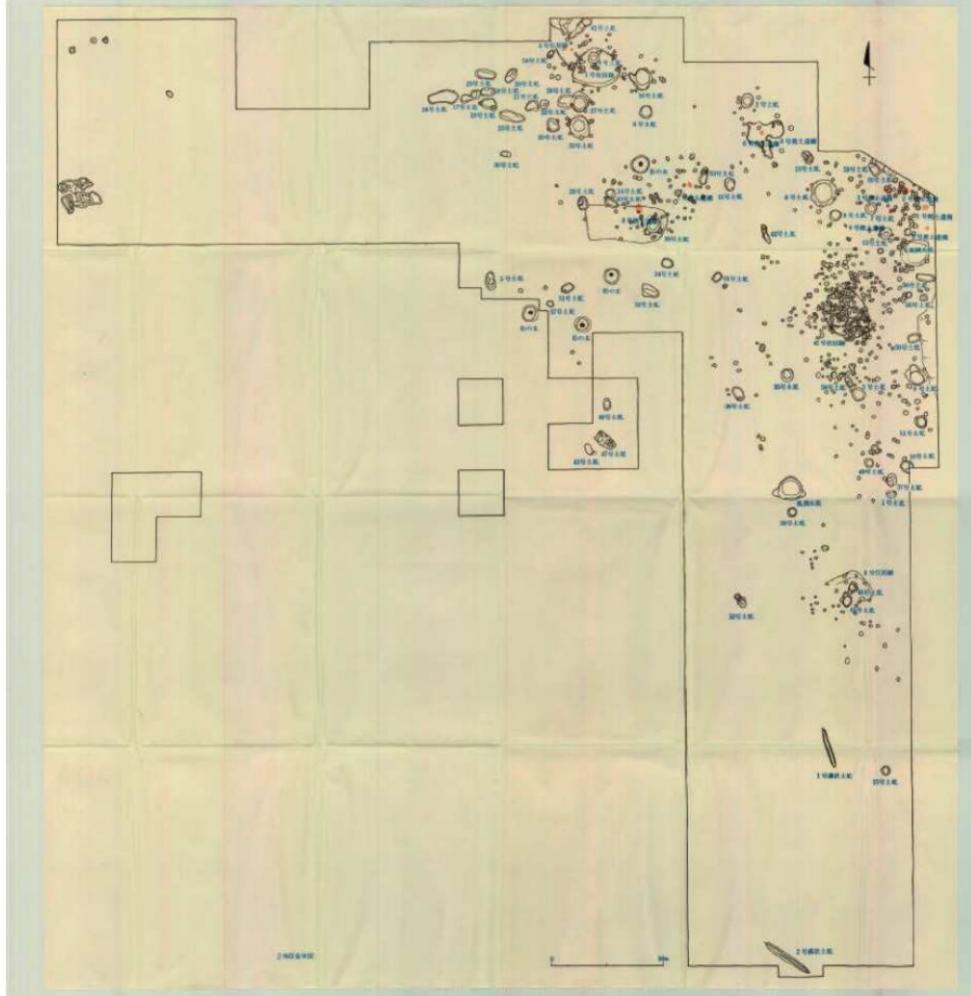


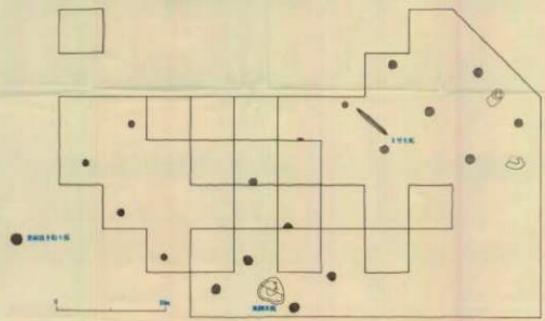
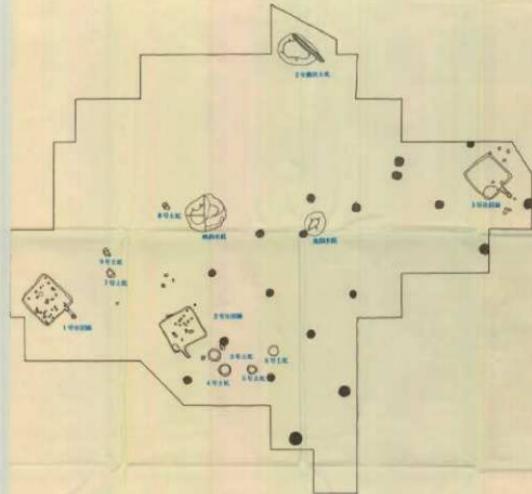
出土石器



出土石器









2号土址

2号



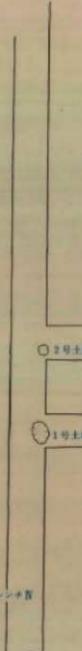
0
3号七机

三



4号土壤

丹波地区クリヤード内出土品



○ 2号土壤

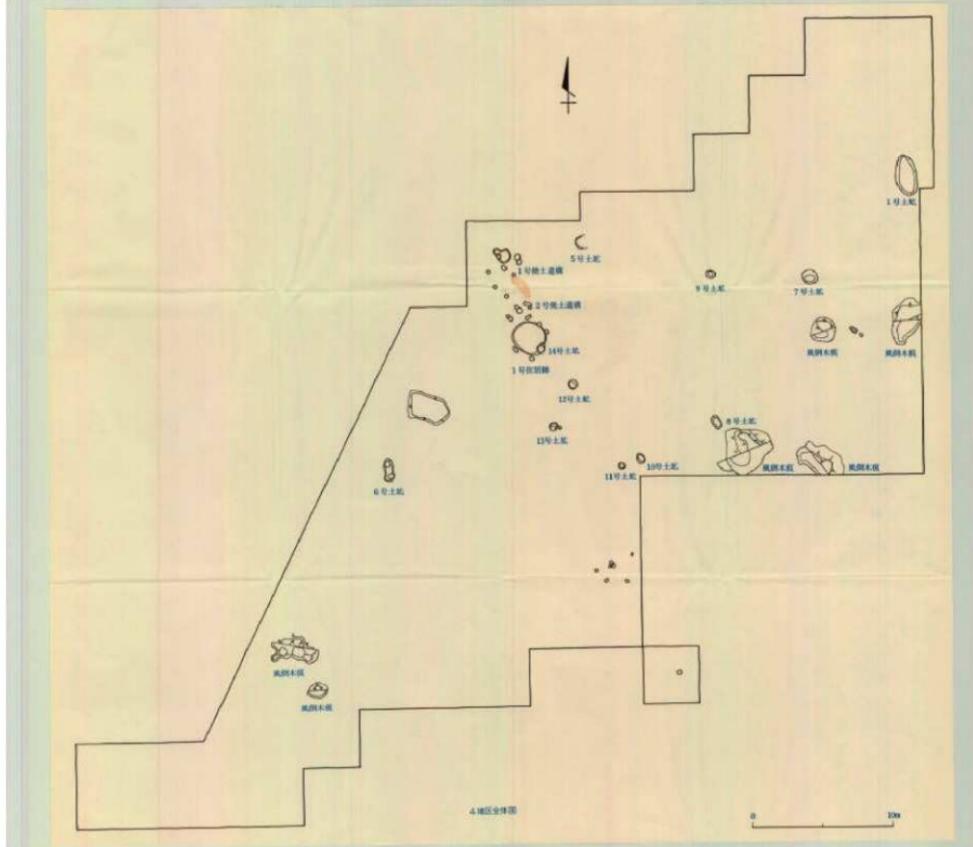
一九七九年

七七二四

3地区トレンチ内様出土品

トレンチ

200



秋田市
下堤D遺跡発掘調査報告書

昭和57年3月

発行 秋田市教育委員会

印刷 株式会社三戸印刷所
